
依り代

陣磨 紳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

依り代

【Nコード】

N0729W

【作者名】

陣磨 紳

【あらすじ】

21世紀の平和な日本に住む無気力サラリーマンが、突然「新世紀エヴァンゲリオン」に似た世界に迷い込んだ。しかも、碇シンジとして

温かさを感じる曖昧な世界で、主人公はいったい何を得的のか。

本作は、旧TV版〜旧劇場版までの「新世紀エヴァンゲリオン」をベースとした二次創作です。2007年以降に発表されている新劇場版「新世紀エヴァンゲリオン」とは世界観・キャラクター設定等

が異なります。

自サイト「ジンマシン ノベルズ」(閉鎖)に掲載していたものの
転載となります。一部加筆修正を行っています。

初稿掲載：2001年 - 2008年

プロローグ（前書き）

本作は、旧TV版／旧劇場版までの「新世紀エヴァンゲリオン」をベースとした二次創作です。2007年以降に発表されている新劇場版「新世紀エヴァンゲリオン」とは世界観・キャラクター設定等が異なります。

プロローグ

西暦2000年。

南極に大質量隕石が落下。

かくして有史以来未曾有のカタストロフィー

「セカンド・インパクト」は起こった。

なんてことはなく、あいも変わらず、腐敗と盲目の平和を貪る、西暦2001年の東京。

俺は散らかった部屋の中、独りで、漫画を読むのに没頭していた。漫画のタイトルは「新世紀エヴァンゲリオン」。

1995年から1997年にかけて、日本に一大センセーションを巻き起こしたロボットアニメのコミカライゼーションである。

俺は、当時TVアニメを通して見ていた。あまり熱心に見てはいなかったが、感情移入をしやすいキャラクター、スケールの大きさを感じさせる世界観と謎が謎を呼ぶストーリー展開に、それなりの魅力を感じてはいた。

TV版のラストは意味不明だった。怒号を上げるファンもいれば、作中で引用されている軍事・宗教その他雑多な知識を仕入れ、一生懸命理解しようとするファンもいた。だが、俺は単純に、製作者が、何かの原因で作品を「投げた」のだと思った。だから少しだけ腹は立ったが、それ以上は気にもならず、その後映画として公開された完結編にも、今一つ興味が沸かなかった。それが、学生の頃。

あれから数年経って、俺は社会人となり、友人の少ない根暗な、それでもありふれた大人になっていた。

暇つぶしに入った書店で、「エヴァンゲリオン」の単行本を見つけたとき、何故か懐かしさを覚えて全巻　　といっても、その時点で漫画版は完結しておらず、6巻までしか出版されていなかったが

衝動的に購入し、帰宅するなり読みふけていたのだった。

「…ふう」

密度が薄いのか読ませ方が巧いのか、この漫画はサクサクと読める。単行本1冊読み切るのに20分とかからない。買ってきた6冊を一気に読み終わると、疲れた目を閉じて休ませつつ、ぬるくなつたコーヒーを少しずつすすった。

……この主人公ってこんなに強気だったか？それにストーリーも微妙に違うような…などと、今読んだ漫画と昔見たアニメを比較しようとするが、アニメの方はもはや断片的にしか思い出せない。全体のあらすじは覚えているし、映画でのラストも、人づてやウェブサイトで大体知っているのだけど…続きも気になるし、レンタルで借りてこようかな。

そんなことを思いながら、見慣れた自室を見渡し、ふと我に返る。

休日に独り、薄暗い部屋に閉じこもって、何をやってるんだろう。

彼女どころか友人もいない。人と話すのが苦手だった。

仕事では問題ない。自惚れかもしれないが、人並み以上にはこなす。必要なら交渉も説得もする。でも、それだけ。

周りで展開される世間話には参加できないし、何かにハマることもないから、マニア仲間もできない。そんなふうには自己分析してみたいところで、現状を打開する気力が沸いてくるわけでもない。要するに無気力なのだ。

ただ時々、猛烈に空しくなることがある。今突然俺が死んでも、肉親以外は気にもかけてくれないんじゃないだろうか。

俺は、いらぬ人間なのかな

そう思った後で、それが先ほど読んでいた漫画の主人公の台詞であったことに思い至る。自分の顔に苦笑が浮かぶのが判った。

こんなの、中学生だから許される台詞だな。少なくとも二十いくつのサラリーマンが言っている台詞じゃない。

などと考えつつ横になると、すぐに眠くなる。ここんところ残業続きで、酷く疲れていたのだ。

今日は特に予定もないので、俺はそのまま睡魔に身を委ねることにした。

……そして気がつくと、俺は見知らぬ街に立っていた。

空では、戦闘機らしきものが低空飛行していた。

第一話 到着、あるいは旅立ち

……あれ？

ここは、どこだ？

見覚えのない街と、山。

奇妙な形のモノレールは、ホームから動こうとしない。

着ているカッターシャツの胸ポケットに、封筒が入っていることに気づき、それを出してみる。

宛名は……

「碓……シンジ？」

思わず洩らした自分の声に、俺は酷く驚いた。

その高い、まだ変声期を迎えていないような声は、明らかに俺の声とは違う。見ると手は華奢で白い。身長も低いようだ。

手近なビルの窓ガラスに自分の姿を写してみたが、そこに写るのは、俺ではなく、女のような整った顔をした少年だった。

俺はパニックを起こしかけたが、頭の片隅に、これが自分の姿だ、という妙に冷めた思考もあることに気づく。そして達した結論。

これは夢だな。

碓シンジ、という名は、さっきまで読んでいた漫画の主人公の名だし、そういえばこの町は、話のはじめで主人公が降り立った町並みに似ている。

漫画の内容を夢に見るとはなあ。まあ印象的なストーリーではあるし。こういうこともあるか。

さっきの封筒の中身を取り出すと、手紙と写真が入っている。

手紙のうち一枚には、殴り書きだが力強い筆跡で、「来い」とだ

け書いてあり、もう一枚にはワープロ書きで、地名や経路などが書いてある。そこにある地名や路線などはよく判らない　　と思ったのだが、ある程度の知識は持っていることに気がついた。

さすが夢。なんでもアリだな。

写真の方をみると、おおっ、と声が漏れた。女性が写っている。

かなりの美人で、前かがみで胸の谷間を強調する、雑誌のグラビアのようなポーズを取っている。それをわざわざ強調するように、胸のあたりにペンでマークをつけて「ここに注目！」などと書いてあるあたりは、ちょっとノリが軽すぎる気がしないでもない。

ここが「エヴァンゲリオン」の世界だとすると、この人は葛城ミサトという名で、もうじき迎えに来てくれるはず。

ぼうつと突っ立っていると、あまり見慣れない型のヘリコプターが、轟音と共に低空を飛んできた。そして、円筒形の何かを落とし、ていく。

その円筒形は、一端から炎と煙を吹きながら、自力で飛行を始めた。

ミサイル？

そう認識した一瞬後、ミサイルが飛んでいった方向で爆炎が上がった。煙の中から、周りのビルと同じ程の背丈を持つ何か、のそり、と現れる。

そこにいたのは、顔を胴体に埋め込んだような、気色の悪い巨人。……使徒、つてか」

巨人は、群がる戦闘機を次々と腕で叩き落とす。大量に打ち込まれるミサイルも、まったく意に介してないようだ。

などと呑気に見ていると、叩かれた戦闘機が一機、こちらに落ちてきたではないか！

「う、うわぁっ！」

夢と思っただけでも怖いものは怖い。情けない悲鳴を上げて、その場から離れようとする。しかし、反応が遅すぎた。聞いたことのないような爆音に、体ごと弾き飛ばされ、アスファルトに転がされた。「うっ、痛い……痛い？」

痛覚がある。両腕に擦り傷ができたが、その位置にはつきりとした痛覚があつたのだ。

夢じゃない。

そう考えると、突然体が震え、歯の根が合わなくなってきた。

「……い、いたい、どうなってんだ、これは……」

と、そこに、けたたましいブレーキ音を立てて、車が突っ込んできた。

俺の目の前に止まると、運転席のドアが開いて女性の顔が出てくる。

「早く乗ってっ！」

面食らったが、その顔が写真の女性 葛城ミサトだと認識できたので、大慌てで助手席に飛び乗った。

ドアを閉め切らない前に、車が急発進する。

「ごめんねシンジ君、遅れちゃって」

状況の割に軽い謝罪に、俺はなんの返答も返すことができなかった。

とにかく呼吸を落ち着かせる。当面の危機は遠ざかったので、現状を考える余裕ができた。というものの……

なんで俺は「碓シンジ」になってるのか。いや、何故「碓シンジ」が俺の人格で動いているんだ？その問いに答えは出ない。出せる訳がない。

いや、俺は本当に『俺』なのか？自分の記憶を疑う。混乱する頭を掻き分けると、『俺』の昨日やった仕事の内容も、『碓シンジ』の伯父の家での寂しい10年間も同様に思い出せるではないか。なんだこれは。あまりにも強引なご都合主義ではないか。

「……………くん、シンジ君！」

女性の大きな声に、思索の海から意識を引き戻される。

「え、あ、はい？」

「ボーっとしちやって、大丈夫？どつか打った？」

「あ、すみません。大丈夫です」

あんまり大丈夫ではないのだが、混乱の原因を素直に語っても信じてくれまい。それこそ、頭でも打っておかしくなったと思われるのがオチだ。ふた呼吸。気持ちを落ち着かせる。

後ろを振り返ると、使徒が攻撃を受けつつ、悠然と前進する姿が見えた。

「国連軍の湾岸戦車隊も全滅したわ……………軍のミサイルじゃ、何発撃つたってあいつにダメージなんか与えられないわよ」

「使徒、ですか……………」

思わず俺が呟いた台詞に、葛城さんが怪訝そうな顔をする。

「……………なんで、アナタがその名前を知ってるの？」

「えっ、あいや、その。父に聞いたんですよ」

慌てて弁解する俺に、葛城さんはさらに怪しむような目つきになる。そりゃそうだな。碇シンジは本来、ここにきて初めてエヴァや使徒について知るんだ。今の俺が知ってるわけがない。機密事項だとしたら、父に聞いた、という話も不自然か…

「ええと、その、葛城さん、名前だけは聞いてるんですけど、使徒って一体何なんです？」

「今は詳しく説明してるヒマはないわ」

突然、車の行く手に使徒が現れた。

「うわわっ、葛城さん、前っ！」

「わかつてるわよっ！」

叫ぶなり、車はスパインターンを決め、来た道を全速力で戻る。恐怖も車酔いも最高潮だ。

後ろを見ると、何故か使徒が追いかけてくる。なかなかスリル溢

れる光景だ。

「うっ……」

「情けない声出すんじゃないの！男の子でしょ！」
怒られた。

と、いきなり、使徒とは別の紫の巨人がビルの陰から現れ、使徒に組み付いて止めた。

「あれは……」

エヴァ初号機、と危うく喋りそうになって口を噤む。すると葛城さんが二の句をつなげてくれた。

「心配しないで、あれは味方よ。それより急ぐわよっ！」

見ると、初号機は使徒に殴り飛ばされ、蹴り飛ばされる。一方的だ。

「一方的に、やられてますよっ！」

葛城さんは、苦渋に満ちた顔を見せる。

やがてボコボコにぼてくりまわされた初号機は、道路に空いた穴に降りていった。おそらく回収されたのだろう。と同時に、あれほど群がっていた戦闘機群が散って行く。

「葛城さん、みんな使徒から離れていきますよっ」

「顔引つ込めて、シヨックに備えてっ！」

そうだ、確かここでは、N2地雷とかいう強力な爆弾を……

瞬間、閃光が走った。

その次に、とてつもない衝撃が飛んできた。悲鳴を上げることがもできない。

車はなす術もなく、木の葉のように吹き飛ばされる。

何がどうなったのやら……

気がつくくと、車も俺も葛城さんも、逆さまになっていた。

「……もういやっ」

葛城さんが泣きながら呟いた。

ひっくり返った車から、なんとか這い出し、葛城さんを引っ張り出す。

煙が晴れると、クレーターの真中に、使徒がまだ立っているのが見えた。漫画と同じ展開だ、と再認識する

戦闘は一時落ち着いたようなので一安心だが、漫画の通りだとすると、俺が初号機にのって、あのバケモノと戦わなければならないのだろう。

「まいったね、こりゃ……」

俺が独りごちると、意味を取り違えた葛城さんが話しかけてくる。

「ホント。まだローン残ってるのに……まあ、今はそれどころじゃないわね。車起こすの手伝ってくれる？」

「あ、はい」

車を起こす。どうやらまだ走れるようだ。あの爆風を受けてまだ走れるのか…ルノーってすごいな。

車の中で、葛城さんから受け取ったパンフを読んできた。

「特務機関、ネルフ、ですか」

「そう、国連直属の非公開組織。私もそこに所属してるの。国際公務員ってところかしらね。あなたのお父さんも同じよ」

あなたのお父さん、というところで、胸にチクリとくる。この感情は、元のシンジのものだろう。

自分には覚えのないはずの記憶と感情。この奇妙な感覚に、俺はもう慣れつつあった。本来の「俺」と碇シンジの人格や記憶が、どういうわけか融合して、今の碇シンジになった、ということ、とりあえず俺は納得することにしたのだ。これ以上悩んでも何か判るわけではない。

「はあ……要するに、使徒から人類を守るための組織、ってことですか」

「そうね」

実際にここでやろうとしていることを、俺は漠然とだが知っている。だがそれは今の葛城さんが知ることではないし、ましてや碇シンジが知ってるわけがない。

しばし沈黙していると、葛城さんが聞いてきた。

「……何のためにアナタが呼ばれたか、聞いてる？」

「いえ。……それを今、考えていたんです」

とりあえず嘘を言っておいた。

「教えてもらえますか？」

「それは、アナタのお父さんに聞いたほうがいいわね」

「そう、ですか……」

あの男と話すのは、心底イヤだなあ、そう思った。

「お父さん、苦手？」

「……苦手ですね……もっとも、人と話すこと自体苦手なんですけど」

「ど」

「そうなの？私とは普通に話してるじゃない」

「……」

俺は沈黙した。どう反応していいか判らなかったからだ。

「それとも、私は特別なのかしらん？」

葛城さんはからかうような口調で言ったが、俺はそれにも答えなかつた。

「……葛城さん」

「ん、ミサトでいいわよ」

「父さんは、俺のこと何か言っていましたか？」

「んー、私には特に何も言わなかったわね」

「……そうですか」

俺の中の「碇シンジ」の心に、シクシクとした痛みを感じた。

いつのまにか車はトンネルを走っている。いや、ミサトさんはハンドルを握っていない。どうやらレールの上を自動で走っているようだ。

少しすると、明るいところに出た。そこは、オカルト雑誌に載っているような、何かの冗談のような光景だった。

天井から逆さまに林立するビル群。

はるか下に広がる森と、中央に位置するピラミッドと、深淵。

「ここは……」

俺が驚いていると、ミサトさんが誇らしく語り出した。

「これが私たちの秘密基地、ネルフ本部よ。世界再建の要、そして」

「人類の砦、ですか」

感慨深く言った俺を見て、ミサトさんは何故か悔しそうな顔をしていた。

もう三十分ほど歩いているだろうか。まだ目的地には着いていない。

「ミサトさん」

「なあに？」

「……見掛けによらず、ずいぶん広い建物なんですな」

「そう？」

「ずいぶん目的地が遠いなあ、と想着て」

「うっ」

ようやく、俺が嫌味を言ってるのに気づいたようで、ミサトさんは俺を睨んだ。

「やっぱり迷ったんですか」

「……アナタ、結構ヤな性格ね」

「それでもないですよ」

「うそぶく俺。」

未だ不安は拭いきれていないが、どうやらここは、あの漫画の通りの世界らしいし、多少でも物事の背景を知っているのだから、元の「碇シンジ」よりはいくらか有利なはずなのだ。そう考えると、嫌味を言う余裕も出てきていた。

と、後ろから白衣の女性が現れた。

「葛城一尉」

「あ、リッコ…」

リッコと呼ばれたその女性は、美人だが妙な違和感があった。なんだろう……あ、金髪なのに黒い眉毛だからだ。あの髪は染めてるのか。……なんか中途ハンパでカツコ悪いなあ。

「あんまり遅いんで迎えにきたわ……また迷ってたわね」

「ごめん。まだ慣れなくて」

ジト目でにらむリッコさんに、悪びれた風もなくあやまるミサトさん。と、リッコさんの視線がこちらに向く。

「その子ね、例の第三の適格者^{サードデルタレン}つて。……私は技術1課、E計画担当博士、赤木リッコよ。よろしく」

「あ、碇シンジです。よろしく、赤木さん」

「リッコでいいわ。……お父さんに会わせる前に、シンジ君に見てもらいたいものがあるんだけど」

「はあ」

リッコさんの言う「見てもらいたいもの」の正体は見当がついたので、俺の返事は気の抜けたものになったが、リッコさんはやる気のなさが気になったのか、「大丈夫か？コイツ」と言うような表情をした。

リッコさんに連れられてやって来たところにあっただのは、案の定……さつき俺らを助けてくれた……」

「人の作り出した、究極の汎用決戦兵器。人造人間エヴァンゲリオン。その初号機よ」

俺の呟きに、リッコさんが続けた。

先ほど使徒と戦っていた紫の巨人の、頭部だけが見えていた。そ

こから下は液体に浸かっている。

そして、その頭の向こうに、見覚えのある人影が見えた。

「父……さん？」

「久しぶりだな、シンジ」

その人影は、碇シンジの父親にして諸悪の根源、碇ゲンドウだった。漫画以上の悪人面である。どうやったら、アレからこの息子ができるんだ。よっぽど母親が美人に違いない……そう思ったが、シンジの記憶の中にも、残念ながら母の顔はおぼろげで、よく見えなかった。

「シンジ、よく聞け。これにはお前に乗ってもらおう。そして使徒と戦うのだ」

その言葉に慌てたのはミサトさんだった。

「まってください司令！レイでさえ、エヴァとシンクロするのに7ヶ月かかったんですよ！今日来たばかりの子にはとてもムリです！」

「座ってればいい。それ以上は望まん」

正直、乗れと言われたら、この場は乗るしかないのだろうな、と思っていたのだが、ゲンドウの傲慢な態度にカチンと来た俺は、嫌味の一つも言つてやるうと思つた。

「何言つてんの？戦闘訓練も受けてない中学生に、こんなの操縦してバケモノを倒せて？もっとちゃんとした兵士とか軍人とかいないの？」

「お前が適任なのだ。いや、お前にしかできん」

「さつきは誰が動かしてたんだよ」

「パイロットはもう一人いる。だが怪我をしている」

「それで、俺？一人二人にしか動かせないなんて……そりゃまた、役に立たない兵器だね。それならそうもつと早く呼んでくれよ。訓練もなしにいきなり実戦なんて、何考えてんの？」

「判つたのは最近だからな。それに、座ってればいいといったはずだ」

「座つてればいい？コイツはただ座つてるパイロットを放っておい

て、勝手に戦うってこと？そんなもん、人乗せる必要ないじゃないか」

「……乗らんなら帰れ！」

ついにゲンドウは激昂した。ありやりや。ずいぶんと短気というか、小心者だなあ。

「条件付きで、乗ってもいいよ」

「……」

交渉を持ちかけてみるが、反応なし。しょうがないので一方的に条件を提示してみる。

「まず生活の保証。出撃や訓練に応じた報酬と住居を用意してください。どうせ今回で終わりではないんでしょう？ それと、今回は出撃前に、エヴァの操作について一時間ほどレクチャーを受ける時間を下さい。やるからには少しでもまともにもやりたいですから」

ゲンドウは数瞬、不思議そうな顔をして俺の顔を睨みつけてきたが、すぐにリツコさんの方に向き直る。

「赤木博士、使徒の状況は？」

「は、N2地雷によって一時的に沈黙。体組織の回復状況から見て残り30分ほどで行動を再開すると思われます」

「シンジ、レクチャーの時間は三十分だ。報酬と住居については後だ」

「しょうがないね。わかったよ。でも、あとで決めた報酬は、今回の分もちゃんともらうからね」

「…わかった」

ゲンドウの戸惑うような様子に少しだけ溜飲を下げ、リツコさんの方へ向き直った。

「そういうことですリツコさん。よろしくお願いします」

すると、リツコさんもミサトさんも呆然としていた。

「シンジ君、本当にいいの？」

ミサトさんは解りやすく心配そうな顔をして、確認を重ねる。

「さっき司令に言ったとおりです。どうせこのまま帰しちゃくれな

いんでしょう？ それより、時間がもつたないですから。早く説明してもらえますか？リッコさん」

「え、ええ」

その後三十分、エヴァの操作や武装、A Tフィールド等について、座学のみだがレクチャーを受けた。

エヴァに乗りこんだ。

『第一次接続開始、プラグ注水』

オペレータの声と同時に、エントリープラグ内に液体 L C L とか言ったか が満ちてゆく。顔まで水位が上がってきたところで、思い切って飲みこんだ。

「気持ち悪いな、これ……」

『我慢しなさい、男の子でしょ』

ミサトさんのふざけたような声が聞こえる。

『……初期コンタクト全て問題なし。双方向回線開きます』

オペレータの声がそう叫ぶと、全身の感覚が広がってゆくような感じを覚える。そしてその感覚が何かに触れると、こんどはそれが自分の体内に入ってくるような感じになる。

そういえば確か、この初号機にはシンジの母親 碓ユイ の魂が込められてる、っていう設定だったよな。するとこの入ってくるもの、ってのは、母親の魂なんだろうか。

……話せないかな。

そんなことを不意に思いついた。ダメ元で、心のなかで呼びかけてみる。

母さん。

すると、さらに自分の中に何かが入り込んでくるようなイメージが脳裏に浮かんだ。少しだけ恐怖を覚えたが、抵抗せずに受け入れる。わけのわからない世界に飛ばされたせいで、結構自暴自棄になっていたのかもしれない。やがて、体内への「何か」の進入は、不意に停止した。そして、なにかメッセージを「感じた」。俺はそれに応える。

しばしの邂逅。俺は確かに、エヴァンゲリオンの中に在る「母親」と、会話した。

「 母さん」

『シンジ君っ!?!?』

リッコさんの、取り乱した声が聞こえてきた。ＬＣＬのせいで見た目には判らないが、俺はどうやら泣いているようだ。

『シンジ君、返事をして!』

「どうしたんですか?」

『シンジ君、何か異状はない?』

レクチャー中はずいぶん落ち着き払った声をしていたりリッコさんがうるたえるのを聞いて、少し意外な感じがする。

「ええ、特に何もありませんが……」

『そう……』

そういつて通信が一時切れた。おそらく、モニターしている数値が不可解な動きでもしたのだろう。エヴァの中のものど心を通わせ。アニメでは、パイロットがＬＣＬに溶けるとか、異常な状況でないと起こらなかったことだ。これがどうシンクロに影響するのか、よくわからない。

数十秒後、再度リッコさんからの通信が開く。

『問題ないわ。起動状態も良好よ』

ミサトさんがそれを引き継ぎ、指示を開始する。

『エヴァンゲリオン初号機、発進準備！』

号令以下、エヴァが射出口の真下へ移動。そして、最後の指示が下された。

『エヴァンゲリオン初号機、発進！』

強烈な慣性力を感じた。想像よりも強烈な勢いで、地上に打ち出される。

しばらく後、再び襲う強烈な慣性力が、停止したことを知らせてくれた。

『最終安全装置解除、エヴァンゲリオン初号機、リフトオフ！』

背中の固定具がはずされ、俺が乗るエヴァンゲリオン初号機は今、第一歩を踏みしめた

が、俺が今回やるのは、ここまでだった。俺は再び意識をエヴァの中に向ける。彼女は確かに、この場はまかせて、と言った。俺はその言葉に従うことにした。そして、この世界に在るために必要な情報を、少しでも彼女から引き出したかったのだ。

意識が戻した時に始めに目に入ったのは、使徒のコアを、初号機の右手が握りつぶす瞬間だった。

第二話 踏み込む決意

目が覚めると、最初に見えたのは、ヤケに白い、初めて見る天井だった。右手を持ち上げる。華奢で色白な少年の腕が見えた。

軽く、落胆のため息。

自分が何もせぬままに戦いが終わり、止めを刺した瞬間が脳裏に焼き付いている。だが、その後の記憶は朧げだった。操縦席のコンソールの光は失われていたような気がする。たぶん、あのまま気を失った俺は、動かなくなったエヴァから、ネルフの職員によって助けられたのだろう。

ここに至っても、俺はほんの少しだけ、今までのことが夢であることに望みを抱いていたが、俺は『俺』の部屋でない、知らない場所にいて、そして俺は『俺』ではなかった。酷く気が重くなる。

ともあれ、この世界に来てから、初めてゆっくり考えられる状況になった。

俺の中にある碇シンジの記憶、そして初号機の中の碇ユイが教えてくれたこの世界の過去、エヴァや碇ゲンドウらのあらまし……彼女は、訊けばなんでも答えてくれた。しかし、どうにも情報量が多すぎて俺のほうで消化しきれていない。

それでいて、何故俺がここにいるのかについては、何も判らなかった。

情報とは別に、碇ユイという人物についても多少は把握できた。作中では登場シーンが多くなく、半ば舞台装置的な役割だったように思うが、実際に会って話してみれば、これがまた嫌いなタイプの女であった。

信心深く、彼女が属していたゼーレと呼ばれる宗派の教義を深く

深く信仰しており、その奥義を達成することが全人類のため、即ち自分の愛する夫や子供のためになるのだと疑わない。通常であればただの宗教狂いだが、厄介なことに、彼女は自身の頭脳によって、科学的裏付けを与えてしまった。達成する道筋を見つけてしまったのだ。伴侶が見も世もなく嘆き悲しんでも、幼い息子が孤独に苛まれ歪んでも、それは些細な問題であり、彼女は変わらさずエヴァンゲリオンと共に在り、その日を待ち続けることを望んでいた。

正直言つて、こんな女には関わりたくないし、それに狂って手段を選ばなくなった旦那にも近寄りたくない。いくら『シンジ』の肉親の情があつたとしても、それだけでは如何ともしがたい嫌悪感のしかかった。

とは言うものの、このまま俺が逃げ出した場合、どうなるか想像もつかない。ユイは、初号機に取り込まれた後のことをほとんど知らなかった。おそらく、初号機に直接関わること以外は認識できなかった、ということなのだろう。例えば、自分のサルベージが試みられ、代わりに綾波レイという存在が生まれたことは知っていたが、その後どうなったのか知らない。現状のネルフが、彼女の夢見た方向に進んでいるとは限らなかった。

何にせよ、アニメのような、ほとんどの登場人物が不幸になったシナリオは、自分が当事者となつた以上、絶対に回避したい。

悲劇の要因の大部分は、シンジを始めとした登場人物の精神にある。ゲンドウやゼーレやらの陰謀もあるが、結局は病んだ心によるコミュニケーション断絶の物語であつたのだから、それを回避するには、他人とのつながりを大切にし、いざというとき支えあえるようになっていなくてはならない。「人類補完計画」のようなストーリーのバックボーンには、いかな主人公とはいえ、パイロットの立場ではおいそれと手は出せない。主要なキャラクターである綾波レイ、葛城ミサト、惣流・アスカ・ラングレー、それぞれ心に深い傷を負っている彼女らと、共に戦えるような絆を得るにはどう

したらいいのだろうか。

などと考えていて、ふと思う。

元の世界では、こそこそと他人を避け、関わり合いを嫌っていた俺が、異世界に来て初めて、他人との関わり合いについて真剣に考えている。ひどく奇妙な感じがした。自分に似つかわしくない、そんな風にも思えた。

考えるのもそろそろ煮詰まってきたので、起きあがって病室から出た。ロビーに來ると、テレビで「第三新東京市での爆発事故」のニュースをやっていた。エヴァや使徒の話は一切出なかったが、そこに映る建物の壊れ方は、明らかに爆発の類によるものではないのは、素人目からも判る。

数人の医師と看護師がベッドと共に移動してゆくのが見えた。すれ違う瞬間、ふと、ベッドに載せられた患者に目をやる。

全身を包帯に包まれた少女の髪は、蒼みがかかった銀色という、見たことのない色をしていた。

目が合う。冷たく深い紅玉は、俺の心臓を掴み上げた。

そのまま彼女を目で追うと、その向こうに淀ゲンドウの姿があった。少女に一言二言話し、見送った。

なんとなく妙な雰囲気を感じ、遠くから眺めていたが、住居や報酬について詳しく話せていないことを思い出した。彼とはあまり話したくないが、今後の生活のことだ。

「司令」

呼びとめる俺に、振り向きもしないゲンドウ。

「住居と報酬の件、あとで話しに行きますので、よろしく」

敢えて使う敬語に、肉親としての拒絶を込めた。

ゲンドウはこちらに一瞥をくれると、

「葛城一尉に話してある。彼女に相談しろ」

ぶつきらぼつにそれだけ言うと、父親であるはずのその男は去っていった。

「ひどいわねえ。息子に労いの一言もないなんて」

不意に後ろから声がした。ミサトさんだ。

「出撃前にいろいろ言っちゃいましたからね。怒らせちゃったんでしょうか」

おどけて言うと、ミサトさんも苦笑を浮かべた。

「身体の調子はどう？」

「大丈夫ですよ………というか、全然何も判らないまま、戦いが終わっちゃいましたからね」

半分、嘘である。

「何も憶えてないの？」

「ええ。全く。………教えてもらえませんか？前回の戦いについて」

「いいわよ。と言ってもここじゃなんだから………車の中でね」

「どこ行くんですか？」

「ま、ドライブよドライブ」

走る車の中で、ミサトさんは戦闘の様子を語ってくれた。

初号機の戦う様には、怖気を感じた。噛み付きや引つ掻きのような、獣らしい戦い方ならばまだ判る。だが、拳で殴り、掴み挙げて投げ、倒れた相手に馬乗りで殴りつける、というような人間臭いアクションが、なおさら狂気を感じさせるのだ。怖がらせないようにという配慮なのか、語っているミサトさんはおどけて話していたが、その笑顔もすこし引き攣っていた。

「シンジ君が意識していないとなると、あれはエヴァの暴走、ってことになるわね」

「それにしても、勝手に動いて使徒を倒す、か。まさか冗談で言っ

た言葉が本当になるとはね。ホントにパイロットって必要なんですか？」

呆れて言う俺に、ミサトさんも同じような顔をして言った。

「そういつもいつも暴走されちゃ困るわよ。こっちの言う通り動いてくれないと」

「ははは、そりゃそうですね」

「……意外と冷静ね」

「は？」

突然ミサトさんの口調が真面目になったので、ついていけず間抜けな応えになる俺。

「暴走、とか言ったら、もうちよっと怖がるかと思っただけ」

「はあ」

暴走とはいえ、ちゃんと意思のあるものの動きだから、意図さえ読めれば怖くないんだけど。……ってミサトさんはこの辺の事情知らないんだっけ。

「ま、そう言うわけだから、ちゃんと操縦できるように、明日から訓練を受けてもらうわよ」

「それは、こないだの要求が通れば、の話ですね」

「……子供のクセにシビアねえ」

肩をすくめつつ、ミサトさんはゲンドウから提示された報酬額とネルフ内での待遇を語る。中学生、かつ一兵卒に対する報酬としては高すぎる。ありふれた平社員の月給からすればちよっと信じられない額だった。住居もそれなりの広さのマンションをあてがってもらうこととなっていた。

「どうかしら」

「まあ、文句はありません。今後どんな要求をされるか怖くもありませんけど」

「納得してくれて何よりだわ」

はあ、とミサトさんは溜息をついた。それは呆れたというより、安心しているように見えた。

「ところで、今日病院で司令と話してた女の子、ご存知ですか？」
なんとなく判っているが、一応聞いてみる。

「ああ、シンジ君の同僚よ」

「てことは、彼女もエヴァのパイロット？」

「そ。第一の適格者、綾波レイ」
ファースト
チルドレン

「なんか酷い怪我みたいでしたけど」

「シンジ君が来る前に、初号機で使徒と戦ってたからね。見たですよ？」

使徒にボコボコにされる初号機を思い出す。

「心配？」

「そうですねえ」

「ふふん、かわいいもんね彼女」

「そうですねえ……って何言わせるんですか」

「照れない照れない。でも彼女無愛想だから、口説くの大変よ」

口説かないっての。14歳に手え出したらロリコンじゃないか。

って今の俺も14歳か。でも……いいのかなあ。

判断に苦しむところである。

「難しい顔しちゃって。わっかいわねー」

別にそういうわけではないのだが、こういうからかい方はあまり好きではなかった。

「ああ、それと住居の件だけど、部屋を用意するまで2日かかるんだって。それまではわたしの家に泊まりなさい」

「ええ？」

「何よ、イヤそうね」

イヤだ。

「……えーつと、ミサトさんに悪いですよ。本部内に部屋でも用意してもらえれば……」

「一晩や二晩くらい、平気よ。本部の部屋を借りるのは手続きが面倒だしね」

「はあ……」

心底イヤだったけど、ここまで言われた以上、ムリに断るのも変な話である。

「わかりました。お世話になります」

「ん、素直でよろしい」

などと言っている間に、ミサトさんの住むマンションに着いた。

俺の目の前で、ミサトさんがビールをガバガバと飲んでいる。

それはいいのだが、テーブルの上は非常に狭い。コンビニ弁当のカラや缶詰の空き缶などが大量に乗っかっている。

別に今、これだけの量を食ったわけでもないのだ。一体いつからこの状態なのか。

ダイニング中に奇妙な匂いが漂っているし、周りをみると着散らかした服や雑誌、ペットボトルが転がっている。

俺もそんなにきれい好きというわけじゃないが、この惨状はさすがに耐え難い。

「うーん、それにしてもシンちゃん、料理うまいのねえ」

いつの間にか呼び方が変わっている。

ミサトさんがパクついているのは、俺が作ったサラダである。コンビニにある数少ない生野菜とドレッシングでさっくりと作ったものだ。こんなのは、野菜の鮮度とドレッシングの味次第なのだから、料理の腕などあまり関係ない気がする。

「こんなもん、料理の内に入りませんよ」

俺は相変わらず不機嫌に言う。

「謙遜しなくていいのよ。ねーシンちゃん、ここに住まない？」

「遠慮します」

「遠慮なんかしなくていいのよお」

「なら、イヤです」

「つれないわね」

頬を膨らます。年齢的には少し無理があるしぐさだが、妙に似合っていた。

「どうせ、家事全般押し付ける気でしょ？」

「そっ……そんなことしないわよ」

「どうだか……」

「部屋んなかジロジロみてんじやないわよ」

ゴミ溜めを再度見回していると、頭をひっぱたかれて止められた。

「ま、確かにここにいれば、俺の監視もしやすいでしょーけどね」

何気ない俺の一言に、ミサトの顔が、すっ、と険しくなる。

「……なによ、それ？」

「別に隠す必要ないですよ。俺だってそれくらいは自覚してますから。どうせ、ただ外歩いてるだけでも見張られるんでしょ？」

「なぜ、そう思うの？」

「……ネルフでの俺の扱いを見てれば、想像はできますよ」

「でも、私はそんなつもりじゃあ……」

もごもご言い訳しようとするミサトさんを見て、少し申し訳なく感じてきた俺は、意識して語調を和らげた。

「あー、いやその、判ってますよ。母を亡くして、父に捨てられて、その上戦いに追いやられる俺に同情してくれてるんですよ。そのお心遣いには、感謝します」

すこし沈黙したあと、ミサトさんは顔を上げた。

「そっ……でもね、私は、同情や仕事の上だけで他人と一緒に住めるような、物事割り切れる人間じゃないわ」

漫画と同じ台詞だった。それが、どうにも癢に障った。嫌がらせをしてやるうという思いが、次の言葉を吐かせた。

「ミサトさんからすれば普通の、コミュニケーションをスムーズにするオツキアイなんでしょうけどね。……家族を演じてくれる優しい人に命令されて、死闘へ駆り出される。残酷なことだと思いませんか」

苦虫を噛み潰したような、という形容通りに、ミサトさんの端正な顔が歪んだ。

アニメのストーリーを思い起こせば、葛城ミサトというキャラクターは、シンジにとって最大の加害者であったように思う。エヴァに乗る以外のシンジの価値を否定した上で（本人にそんな気はなかっただろうが）、愛情を与えてエヴァに縛り付けたし、アスカのトラウマとシンジの性格を知りながら、何の配慮もせず同居させた。そして、シンジが最も傷つき、自分の存在意義を疑っているとき、大人の理屈でねじ伏せようとしかなかった。何より最後まで、大人としての体面の維持に努め、それが壊れそうなきはシンジに近づこうともしなかった。そんな印象しかない。

人としては嫌いじゃない。だが、シンジの立場としては、アニメのようにうやむやのうちに取りこまれることだけは避けたかった。

重いおもい、沈黙が流れた。

と、いきなりミサトさんがビール缶を持ち上げ、一気に飲み干した。そしてもう一缶を開栓し、これもまた一気に空けた。さらに一缶。

三缶目を空けてテーブルに勢い良く叩きつけ、あっけに取られた俺を睨みつける。

「うアタシだつてねえ。あんたみたいな子供に戦わせたくなんてないわよっ！アタシじゃだめだからしょうがないでしょう！アタシが、アタシがどんな思いでっ……！」

突如愚痴り始めたミサトさんを見て俺は驚いた。こんな簡単に内

心を吐露してくれるのは想像だに wasn't。俺は彼女が強くないことを知っている。いや、もしかしたら漫画の彼女とは違うのかもしれない。それでも、大人がみんな、普段かぶっている仮面ほどに強くないことを、多少なりとも俺は知っていた。だから、その愚痴にも共感できたし、むしろ少しだけ近づけた気がしていた。

「……ミサトさんは何故、そんな思いをしてネルフの作戦部長なんかやってるんですか？」

だから、俺は、ミサトさんの心に踏み入る決心をした。

第三話 絆

研究に没頭して家族を省みない父親と、それに苦しみ、責める母親。幼い頃はそれを見て育ってきた。

あるとき、ようやく父が歩み寄ってくれて、自分を調査隊に同行させてくれた、まさにその時発生した大災厄。セカンド・インパクトあれは世間一般で言われているような隕石衝突などではなく、南極に埋まっていた使徒、そのエネルギー源に関する実験で発生した「事故」なのだという。

すべての生命が死に絶えたあの地で、父は死に、自分は助かった。「使徒が家族の時間と絆を奪って、最後には命まで奪っていったしまった。なんて考えちゃったのよね。仇討ちみたいなものよ。簡単に言つと」

そんなことを、ミサトさんはオドケながら話した。

「そのために、戦略自衛隊に入って死に物狂いで上を目指したわ。その後、使徒に対抗するための特務機関ができたから、無理を言つてそっちに出向、目論見通り作戦部のトップに就任」

とん、とん、とん、と、テーブルを右から順に指で叩きながら言う。最後はビール缶の上に指を置いて、小さくつぶやいた。

「そしてやってることは……子供に命令を下して、本部から喚くだけ」

自らを嘲笑うミサトさん。

「改めて事実を並べてみると酷い話ね。軽蔑したかしら」

ミサトさんは本当に酔っ払っているわけではなさそうだ。たぶんこの人は、俺を見て話している。俺に対してはこういうことを打ち明けたほうが話がしやすくなる、この碇シンジという少年はそういうタイプだ、そう判断したように見える。酔った勢いで語るにしては重すぎるし、ちよつと話を単純にしすぎている気もする。だから、多分彼女が期待しているだろう返答をする。

「いえ。こちらこそ、立ち入ったことを訊いてしまつてすみません。

俺は、軽蔑なんてしませんよ。そういうものだって、始めからはつきりしていた方が、やりやすいです」

「……そう、よかったわ」

その一瞬だけ、ミサトさんの顔が不思議な表情を象った。何かしらつくような、何かを諦めるような。その表情が何なのか、俺は推測するのを諦めた。

翌日。

朝から明らかに遅刻の葛城ミサト一尉に連れられて、再びネルフ本部へと出向いた。

エヴァンゲリオンを起動し制御する、そのための実験テストを行うのだそうだ。

「どうしたのシンジ君、起動限界ギリギリよ」

リッコさんが苦々しげにシンクロテストの結果を眺める。先日の第三使徒戦の時は、信じられないほど良好な数字が出ていたのだそうだ。碇ユイとの対話のおかげだろうか。しかし、その時ががなまじ好成绩過ぎたためか、今の凡庸なデータを見る目に焦りが窺える。「こないだのがマグレだったんですよ。きっと」

テキトーに受け答えしていると、リッコさんの表情がさらに険しくなった。

「マジメにやりなさい」

「は、はい」

エヴァンゲリオンとの接続シンクロに心理的な作用が影響するのならば、碇ユイを嫌っている今の俺ではまともにシンクロできないのかも知れない。「心を閉ざしていれば、エヴァは動かないわ」とは誰の台詞だったか。

だが、おそらく俺は、今後もこれに乗って戦闘を行わなければならない。好き嫌いの問題ではないのだ。そうは思っても、半ば恐怖に近い拒否反応はなかなか拭えない。どうしたものかと頭を抱える。

テスト
実験が終わり、ようやくリツコさんの説教から解放された。ミサ

トさんも「シンジ君にビールでも飲ませたんじゃないの」などとあらぬ嫌疑をかけられたため、うんざりしている。

ふと、俺は綾波レイに会っておこうと思いついた。

「ミサトさん、今日はもう何もありませんよ？」

「そうね。今日のところはシンクロテストで終わり。どこかに行きたいの？」

「いや、綾波さんに挨拶がてら、見舞いに行こうと思って」

「あら、やっぱり気になるのかしらん」

「……まあ、そうですね。同僚になるわけですし」

「ふうん。場所はしってるのよね？まあ頑張つてらっしゃい」

などとニヤニヤしながら言う上司に、俺は「ただの見舞いですからな」とだけ断って、踵を返した。

「はじめまして……綾波さん」

ベッドに横たわる少女。蒼銀の髪と、紅い瞳。透けるような白い肌。

うーむ。現実だとこんなふうになるのか。綺麗だなあ。

それだけに、右目を塞ぐ眼帯や、右腕のギプスが痛々しい。

「……誰？」

見惚れていると、訝しげな目で尋ねられてしまった。いかん、これじゃ怪しいやつだ。

「えーっと、俺は碇シンジ。今度、綾波さんと同じエヴァのパイロットになったんだ。よろしく」

「いかり……しんじ、そう、アナタが」

「え、俺のこと知ってるの?」

「……私に、何をやる気なの?」

「は?」

「司令が言ったわ。シンジは、女と見れば何をやるか判らんから、気をつける、って」

あまりに予想外のセリフに呆然とする。

あの野郎。どういうキャラなんだアレは。アニメではそんなギャグ要素なかったよな?

湧き上がる困惑と怒りを抑えつつ、微笑を作る。果たして成功してるだろうか。

「ただ、挨拶したいと思ったただけだよ……ダメかな?」

「……構わないわ」

彼女の返事に、俺はホツとした。とりあえず椅子に座る。

とは言うものの、何を話せばいいんだろう、えっと……

「……怪我、まだかかるの?」

「あと一週間くらいと聞いている」

「そっか……ねえ、そんなに酷い怪我までして、君はまだ、エヴァに乗るの?」

「ええ」

少女の表情は変わらない。

「なぜ?」

「絆、だから」

「司令との?」

「……私には、エヴァに乗る以外、何も無いから」

聞き覚えのある会話。しかし、実際の彼女の口から発せられる言葉は、酷く重く響いた。

「……そっか」

数瞬、沈黙する。

「何故、泣いているの？」

「え、あれ？」

確かに頬に感じる涙の軌跡。いかん、なんだこれは。決して同情じゃない。この少女を想って涙するような善人じゃない。不可解な涙の理由を頭の中で必死に探って、一つの言葉にたどり着いた。

「……寂しいんだよな」

「私が？あなたが？」

「俺も、君も」

すべての柵を置き去りに異世界に送りこまれた男と、愛を与えず自らに引きこもる少年。寂しく、不安であることには間違いない。

そして、この少女は、エヴァに乗る以外に自分には何も無いと言ったのだ。エヴァのパイロットであることにどれだけの価値があるうとも、彼女にとってこんな寂しいことがあるだろうか。

もしかしたら勝手な、価値観の押し付けかもしれない。それでも、彼女が新たな絆を得ることができれば、そう思った。

「……よく、わからないわ」

「父さんは、優しい？」

「……よく、わからない」

彼女は俺を見ない。じつと、虚空を見ている。

「エヴァに乗ることで得られる絆……それ以外にも、もっとたくさん絆を、欲しいと思わない？」

「それは……司令が望まないわ」

「君はどう思うの？」

少し、俯いてしまう。だんだん罪悪感が湧いてきた。

「そっか……でも、君ならきつと、もっとたくさん絆ができるよ」「何故？」

「ここでようやく、彼女は俺を見た。」

「……君がかわいいし、純粹だから。君が他人に興味を持てば、みんなも君に興味を持つてくれるよ。」

「紅い瞳が泳ぐ。」

「きつといつか、判るよ。……まず、俺と友達になろう。」

「司令の命令なら、そうするわ。」

「命令じゃないよ。ダメかな？」

「……構わない。」

「そっか、よかった。」

「ホッとした。」

「ごめんね、長々と喋らせちゃって……あとはゆっくり休んで。早く退院して学校へ行こう。」

「そう言っつて、立ち上がったところで、ふと思いつつ。」

「そっだ、お願いがあるんだ。」

「……何？」

「俺のことはシンジって呼んでほしい。」

「……シンジ、くん。」

「うん。それと、君のことレイって呼んでいい？」

「……構わないわ。」

「よかった。じゃ、また来るよ、レイ。」

レイに語った内容を思い出して、俺は休憩コーナーで独り、羞恥に悶えていた。

「なんであんな気障な言葉、ポンポンと出たんだろう。」

「……彼女の言葉を聞いて、俺も独りだつてことを再認識したら、

「……でも多分、彼女は俺以上に孤独を感じているんだろう。何故かそう思った。だから、言わずにいられなかった。」

「はあ、ゲンドウの動きも気になるけど、俺もいい加減にキャラが

変わっているな。『俺』も『シンジ』も、こつこつのは苦手だったはずなんだけど。

……まあ、いいか。

これがかきつかけでレイが人間らしくなって、反骨心みたいなものを持ってくれればいいんだけど。

「何、頭かかえてるの、シンジ君」

声をした方を振り向くと、リッコさんが立っていた。

「あ、いえ何でもありません。大丈夫です」

「何か悩みがあるなら、私やミサトに相談しなさいね。エヴァとのシンクロには精神状態も影響するから」

「はあ。わかりました」

そんな俺を見て、微笑を浮かべるリッコさん。

「まあ、ミサトとはもう、随分腹を割って話ができているみたいだけれど。意外と世渡り上手なのかしら」

その言葉に、思わず苦笑が漏れる。

「そんなことありませんよ」

この人、こんな優しいキャラだったかな？もっと冷たいのかと思っただけ。

などと考えていると、視線を俺から外し、表情を消して、リッコさんはボソリと問うた。

「シンジ君、第三使徒との戦いするとき……初号機の中で誰と話したの？」

「え？」

「意識を失いつつ、誰かと会話していたように見えたわ」

どうやらリッコさんは察しているようだ。「会話」の相手も。隠す意味は……あまりないか。

「……ええ。母さんと話していました」

「そう……やっぱり。シンクロ率が落ちてるのは、お母さんの存在

を知ったから、かしら」

「判りませんが……たぶん、違います」

「違うというのは……なにか見当がついているのかしら」

俺はどこまで話すか悩んだが、どうせ腹芸など不得手だ。隠せるネタなんてないし、それなら子供らしく、嫌だと思ったことを吐き出してしまおう」

「許せないですよ。母さんが。父さんも許せないけど、母さんはあまりにも勝手過ぎる。俺も父さんも、母さん一人に苦しめられるようなもんですから」

それを聞いたリツコさんは目を見開いた。

「シンジ君……エヴァのこと……」

「ええ。大体のところは母さんから聞きました。母さんがエヴァを開発した理由、初号機に取りこまれ、サルベージされない理由……母さんの信仰するナニモノかには付き合いきれない。そんなもののために振り回されるのが許せない、というのが正直なところですよ」

怒りのあまり声が震える。

しばらく流れる沈黙。

「シンジ君が、何のためにエヴァに乗ったのかわからないわ。お金のためやお父さんのため、というわけでもなさそうだけど……あなたがお母さんを憎む気持ちもわかるわ。でも……お母さんは、シンジ君の目的を妨害しようとしてるかしら？」

はっ、とした。

「私もね……正直言うと、あなたのお母さんに含む所があるわ。でも、私は私の欲するもののために、彼女たちを利用する。拒絶する理由は、今のところない」

なるほど、と思った。目先の憎しみに捕われて、目的を見失ってはいけない。

同時に、俺が目的自体を失いつつあることに気がついた。

始めは、シンジとしてネルフに関わりつつ、アニメで描かれたらしいサードインパクトの回避を、と考えていた。

しかし、この世界と「エヴァンゲリオン」の世界が同じとは限らない。相違点も多い。それを実感として認識しつつある。アニメの「人類補完計画」とて、碇ユイの計画とは違っているようだし、行く末がサードインパクトのような破滅に至るのかどうか、判らないではないか。

考えこむ。

結局、当面はエヴァに乗って使徒を撃退しつつ、真実を探らなくてはならない。この世界の事実を。そのためにはエヴァに、碇ユイに協力を仰ぐ必要がある。少なくとも俺に対して害意は持っていない。

「そうですね。目的を見失っちゃどうしようもないですもんね。……ありがとうございます。リッコさん」

「いいわ。私も、今のような状態が続くと困るもの。いざと言うときエヴァが動かないと、ね」

それは、照れ隠しなのか、俺のことも利用しているだけであるという宣言なのか判別できなかったが、少なくとも、ミサトさんより付き合いやすい相手ではある気がした。

そして俺は、リッコさんのことも利用させてもらおう、と思った。それは危険な賭けでもあったが……

「リッコさん、一つ相談があるんですが」

「何かしら？」

「父さんが、母さんのことを諦める、何かいい方法はないでしょうか」

碇ゲンドウと赤木リッコの関係がアニメの通りであるとするならば、このセリフはとても重い意味を持つだろう。リッコさんがゲンドウに欲してやまないもの、それを得るにはどうしたら良いか、と問っているのだ。その答えはリッコさん自身が一番望むものだろう。リッコさんは怪訝そうな顔をした。あまりにも脈絡がなさ過ぎただろうか。

「どうして、司令があなたのお母さんを諦めていない、と思うの？」

俺は慎重に答えを探った。

「……レイが、母さんに似ていたんです」

リッコさんの顔が、少しだけ険しくなる。

「レイの出生については、母さんに聞きました。彼女は母さんのクローンみたいなものでしょう？そして、父さんは彼女を傍におき、あんな風に……エヴァ以外に何も無い、そう思い込ませている。そうやって自分に縛り付けている。ということは……そういうことでしょう？」

重い沈黙が流れた。リッコさんは顎に手をあて、しばらく考え込んだあと、口を開いた。

「それは、レイのためかしら？」

「自分のためでもありません。あんなでも実の父親ですから」

どちらのものともつかない、溜息ひとつ。リッコさんが立ち上がった。

「正直見当もつかないけれど、まあ、考えてみるわ」

そう言って立ち去った。

碇ゲンドウが、もしアニメの通りならば、彼は、ゼーレのものは別の、妻に再開するためだけに立てられた「計画」を進めようとする。それに対する楔になればいいが。

そんな手前勝手な理由で、彼女の後ろ暗い部分をつついてしまうことに、今更ながら一人、酷い罪悪感を感じていた。

第四話 新しい日常

「碇シンジです。父の仕事の都合で先日引越してきました。よろしく願います」

碇シンジは中学生である。学校には通わなくてはいけない。ということで、市立の中学校に転入することになった。

「それじゃ、席は……まあ、ごらんの通り空席が多いから、適当に座りなさい」

いいかげんな担任教師の言葉に、教室をぐるりと見渡す。レイも同じクラスと聞いていたので、席が近い方が何かと話せていいかなあとも思ったのだが、彼女はまだ怪我が治りきっておらず休んでいる。そのため、彼女の席がわからない。担任か誰かに訊けば判るだろうけど、「綾波さんの席はどこですか？」なんて訊いたらさすがに露骨過ぎる。

しかたないので、窓際の空いている席を適当に選んで、座ろうとした。

「ああ、すまん。そこはもう使ってる人がいるんだ。今日は休んでるが……」

俺はちよつと驚いた。普通、学校の机など、本人がいなくとも中に何かしら物があったり、横になにか引掛つ掛けてあったりするものだが、今座ろうとした席は、そういった「使っているような痕跡」が全くなかったのだ。それで、この席の使用者がレイであることを直感した。

「はあ、じゃ、こっちはいいですか？」

ちよつと、その席の斜め前が空いていたので、そこを指差す。

「ああ。そこは空いてる。じゃあ、わかんないことがあれば、そこにいる学級委員長の洞木に訊きなさい。洞木、たのんだぞ」

「はい」

担任の言葉に返事したのは、髪を二つに分けて纏めた、そばかす

顔のマジメそうな女の子だった。

ホームルームを終えて担任が教室から出て行くと、その洞木さんが話しかけてきた。

「洞木ヒカリよ。よろしくね」

「よろしく、洞木さん」

「それにしても……こんな時期に引越してくるなんて、珍しいわね」

「え、なんで？」

「この辺、もう疎開が始まってのよ。この間の怪獣騒ぎ、知ってるでしょ？」

「怪獣騒ぎ……ああ」

思わず苦笑しかけて慌てて抑えた。

「そうだね……」

「ねえ、やっぱりあの噂、本当なの？」

後ろから、別の女生徒が身を乗り出してきた。

「あの噂って？」

「碓君、あのロボットのパイロットなんですよ？」

噂。子供の空想から生まれた根も葉もない作り話なのか、それも機密が漏れているのか、判断に苦しむところだ。まあ、疎開の始まったこの時期に転入生するのは確かに不自然だし。確かアニメでもすぐにバレていたような気がする。

「碓君、ホントなの？」

洞木さんまで身を乗り出して訊いてくる。教室中からも視線が集まる。バレバレでも、自分の口から機密を漏らすのは抵抗がある……とはいえ、今後隠し続けながらの学校生活もやだなあ。口止めされてるわけでもないし、いいか。

「まあ、うん。ホント」

そのとたん、教室中の人があわつと集まってきた。

「すごい！カッコイイ！」

「どうやって選ばれたの？」

「テストとかあったの？」

「怖くなかった？」

「必殺ワザとかあるの？」

「どういう仕組みで動いてるんだ？」

「あの怪獣、一体何なの？」

恐ろしい勢いで質問が飛んできて、しどろもどろになつて答えにくく。といつても、めんどくさそうな質問には「機密だから」とお茶を濁しておく。

そうしていると、不意に後ろから声がかかった。

「ふん、エラそうにスカしおつて」

振り向くと、ジャージ姿のガタイのいい男が立って、見下ろしていた。

「鈴原、喧嘩はだめよ」

「喧嘩なぞせんわい」

洞木さんがたしなめるが、男はさらに鋭い視線を俺にぶつけてきた。

こいつは……もしかして鈴原トウジ、つてやつだろうか。たしか漫画だと、第三使徒戦で彼の妹が大怪我して……それを恨んだ彼に、この後屋上に呼び出されて、殴られるんだよな。

などと考えていると、ジャージの男は突然頭を下げってくる。面食らった。

「気にはくわんが……礼はいつとく」

「礼つて……俺なんかした？」

「ワシの妹が隠れてたシエルターな、危うくあの怪獣に叩き壊されるところだったんや。直前でオマエのロボットが怪獣をフツ飛ばしてくれなんだから、そのままシエルターごと御陀仏やった……だからオマエは妹の命の恩人や。ありがとう」

周囲で「おおお」という歓声上がる。拍手まで上がった。男は頭を下げたままだ。

「い、いいよそんな。頭上げてくれよ。俺だって無我夢中で、助け

ようと思って助けられたわけじゃないんだ」

俺はその時、母親と呑気に談笑　というほどいいもんでなかったが　していたのだから。

だが、男はそれを謙遜としてとらえたようだ。ようやく上げると、きよとんとした顔をして、俺を見た。

「オマエ……思ったよりいいヤツやな……」

「そ、そう？」

「よっしゃ。これから仲よろしうやないか、碇。ワシは鈴原トウジや。トウジと呼んでくれ。それとこいつは」

トウジは、自分の横にいた眼鏡をかけた男の方を向く。眼鏡の男は一歩前に出てきて、言った。

「俺は相田ケンスケっていうんだ。ケンスケでいいよ」

「ありがとう。よろしくトウジ、ケンスケ。俺のことも、シンジでいいよ」

「おう、よろしく」

その後も、休み時間の度に質問攻めにさらされることになった。

「今日はシンクロテストの前に、インダクションモードの訓練を行うつもりわ」

今日の訓練の内容について、ミサトさんとリッコさんから説明を受ける。

「インダクションモード……えーと、射撃訓練ってことですか？」

「そうよ。ようやくパレットライフルも実戦配備になったしね。一応これに目を通して置いて」

そう言つとリッコさんは、パレットライフルの使用説明書とスペックシートをよこした。

「これでちよつとは楽になるといいわね」

さほど期待していない、というような口調で話すミサトさんに、

眉をひそめるリッコさん。

ふと、漫画の第四使徒戦を思い出した。確かあの時、焦ったシンジはパレットライフルを撃ちまくり、弾かれて粉塵化した弾丸で視界を遮られ、ピンチに陥った。

そこで俺は、弾丸のスペックシートを見た。幾つかのオプションがあるようだが、基本的には劣化ウラン徹甲弾を使用するようだ。

「リッコさん、この弾丸、劣化ウランって書いてますけど……」

「ええ。それが何か？」

「えーと、確か劣化ウラン弾って、弾着したときに高温を発生して燃焼して、さらに酸化ウランの粉塵を撒き散らす、らしいじゃないですか」

ネットで仕入れた知識を披露する。と言っても、単に知ったかぶりしようということではない。

「なあに？環境保護でも主張するつもり？」

「いや、まあ確かに守るべき都市の近くでウランを撒き散らすのもどうかと思いますが、その前に、こういう弾丸を高速連射したら、煙と粉塵で視界が遮られるんじゃないかなー、と」

そんな指摘をすると、ミサトさんは意外そうな顔で、こちらを見た。

「意外と詳しいのねえ。実はシンちゃんって軍オタ？」

「いや、そういうわけじゃないんですけども。したこともない戦争で命かけることになったんで、自分なりにいろいろ調べたんですよ」

「そう、ヤル気があるのは感心ね。あなたの言うとおり、劣化ウラン弾でフルオート連射は避けたほうがいいかもしれないわね。もともともそういう使い方をする弾丸ではないし」

うまくいった。「煙幕になってしまふ」ということをミサトさんやリッコさんに意識させておけば、使徒と出会い頭に、いきなり「パレットライフル斉射」なんて命令を出されることもないだろう。

「それはそれとして、インダクションモードの訓練をはじめましよう」

ミサトさんの言葉に、俺もリッコさんも従った。

「目標をセンターに入れて、スイッチ。目標をセンターに入れて、スイッチ……」

シミュレータの画面に現れる、第三使徒を模したポリゴンキャラクターを、レバーで照準を操作して、撃ちぬいてゆく。4、5発食らったキャラクターは、それだけで粉碎されてゆく。

こんな簡単に使徒が倒せるんなら、苦労しないよなあ。

落ち込んでいたエヴァとのシンクロ率は、だいぶ回復していた。碇ユイを許すのではなく、理解するでもなく、単に「協力者」として受け入れる。微妙な距離感だったが、それなりにうまくいったようだった。

新居は、意外に広かった。

広いと言っても2LDKだが、元の世界では六畳一間の部屋に住んでいたのだから、とても広く感じる。

荷解きを終え。今日調達した食料、調理道具、その他もろもろを収納したあと、リビングに寝転がる。

盗聴機やら監視カメラがそこらに仕掛けられてるんだろうな、とは思ったが、俺に探す技術があるわけでもないので気にしないことにした。大体、下手に処分して怪しまれるのも得策じゃない。

昨夜はミサトさんとリッコさん、オペレータの伊吹マヤさんが訪ねてきて、俺の引越し祝いをしてくれた。といっても、この女性陣は揃いも揃って料理ができないようで、ミサトさんがレトルトや惣菜を山のように買ってきたのだが、それでは寂しいと思い、俺が腕を振るうことになった。その味には三人とも随分喜んでくれた。

その料理の腕前は「シンジ」のものであったが、これにはあまりよくない記憶が纏わりついていた。伯父の家に行ったとき、まだ十にも満たないシンジに、わざわざ離れが生活スペースとして与えられたのだ。台所も完備されていて、食事は独りで作り、食べる。「自立心を養うため」と言えば聞こえがよいが、俺から見れば体のいい「隔離」である。……伯父夫婦は、シンジのことを疎ましく思っていたようだ。あるいは意識的に扱いを悪くしているようにさえ思えた。

彼の料理の腕は、そんな孤独の中で培われた。そういう「孤独から生まれた料理」を他人が食べ、喜んでくれる。それを見ていると、俺は無性に嬉しくなった。

レイが学校に出てきた。

といっても怪我が完全に治ったわけではなく、相変わらず右目には眼帯を着け、右腕を吊っている。

彼女は、学校に来ても終始無言で、あの紅い瞳でぼうつ……と窓の外を見つづけている。ちなみに席は、俺の推測通りだった。

とりあえず、校内の女子にやたら詳しいケンスケに、レイのことを聞いてみることにした。

「なあ、ケンスケ」

「ん、なに？」

「レ……綾波さんのことなんだけど」

「綾波がどうした？」

「どうしたってワケじゃないんだけど、学校では普段どんな感じなのかなーって」

「なんだシンジ、お前綾波に気があるのか？ 渋い趣味してんなあ」

「う、いや、そういうわけじゃなくて」

「ははは。照れるな照れるな。と言ってもなあ……」

言いよむケンスケ。

「……あの通り、としか言えないんだよ」

そう言っただけケンスケは視線を移す。その先には、相変わらず独りで外を眺めているレイの姿があった。

「友達もいないみたいだな。そもそも全然喋らないし、笑いも怒りもしない。鉄面皮、ってやつだな。綺麗な顔してるんだから、普通に笑ったりすれば人気もでるんだろうに」

「オマエは売れる写真が撮りたいだけやろ」

ケンスケの後ろからトウジが声をかける。ケンスケは、人気のある男女の写真を密かに撮影し、それをファンに売りさばいて小遣いを得ている。彼のカメラマンとしての腕はかなりのものだが、その腕の使い方には少々問題があった。

「まあね」

ケンスケは悪びれもせず、そう宣ったものだ。

その様子を尻目に、俺はレイに視線を移した。相変わらずぴくりともせず外を眺めているレイ。その姿は本当に人形のように見え、俺は暗澹たる気分になった。

と、そのレイに動きが見えた。携帯電話を取り出し、電話に向かって何やら一言二言話した後、立ちあがった。

「シンジ君、非常召集。……先、行くから」

それだけ言っただけで、レイはかばんを引つ掴んで出て行ってしまった。余りに唐突だったので、脳味噌が理解するのに五秒ほどかかった。

「……あ、俺も行かなきゃ」

そう言っただけで、未だ呆然としているケンスケとトウジを残し、俺はレイを追いかけるのだった。

そして、第四の使徒が襲来した。

第五話 傷つく弱さ

「なんだアレ……」

ケイジのモニタに映し出された第四使徒は、確かに漫画と同じ姿だった。その表面には、蛇のような鱗が見える。

その生物的な質感が、超自然的なデザインと相俟って、吐き気を催すような雰囲気を放っていた。

「ホラ、シンジ君、ボーッとしないで早く搭乗しなさい」

スピーカからミサトさんの声が響き、俺は慌ててエントリープラグに飛び込んだ。

プラグが初号機に挿し込まれ、中にLCLが満たされると。起動シークエンスが始まる。

「緊張してる？」

ミサトさんの声。

「まあ……実際今回が初戦みたいなもんですからね」

俺は努めて軽く喋るが、ちよつとだけ声が震えている。

「だあいじょぶよ。ある程度は訓練積んでるんだから、前回よりは随分マシなはずよ」

いくら訓練を積んでいるとはいえ、ついこの間までは戦争どころか殴り合いのケンカすら縁のない生活をしてきたのだ。むしろ訓練が「これが命の取り合いである」ことを否応無しに実感させてくれた。もちろん全く実感がないうよりはマシなんだろうが。

「……初期コンタクト全て問題なし。双方向回線開きます」

この感覚。自分が初号機に溶けこんでゆく感覚が、少しだけ心を落ち着かせてくれた。

「いい？シンジ君。地上に出たら、すぐ右の兵装ビルにパレットライフルを出すからそれを取って。その後、パレットライフルを三点^パ射モードにして、使徒のATフィールドを中和しつつ牽制するのよ」

訓練の中で幾度と無く議論し、厳選したいくつかの攻撃パターン
のうちのひとつ。イメージはすんなりと浮かんだ。

「了解」

応答すると、満足そうに微笑んで、ミサトさんは号令を下す。

『エヴァンゲリオン初号機、発進！』

号令と共に、初号機は地上に打ち出された。

初号機がリフトオフした一瞬後、右にある兵装ビルからパレット
ライフルが出てきた。それを取る。

「インダクションモードに移行。パレットライフル、バーストモ
ード」

前面のモニタに照準が表示され、グリップハンドルの表面にトリ
ガーの感触が現れた。ビルの陰に隠れながら、向こうにいる使徒の
様子を伺う。

殺気、というのだろうか。あの使徒はこれから、俺を殺すために
動き始める。その相手をこの手で殺す。未経験の恐怖。手が震える。
俺は深呼吸して、声を抑えて気合を入れ、ビル陰から体を乗り出
した。瞬時、使徒のコア付近を照準と重ねることができた。今だ！

ガガガン！ ぎぎぎいん！

ガガガン！ ぎぎぎいん！

弾丸は全て、使徒に達する前に甲高い音を立てて砕け散った。

あれ？

『ちよつとシンジ君！ATフィールド！』

ああっ、しまったっ！

慌ててATフィールドを張ろうと思った瞬間、使徒から何か飛ん

でくるのが見えた。殆ど反射的に横に飛ぶと、光の鞭がすり抜けていった。持っていたパレットライフルを貫いて。

まずい、武器を失った。

『シンジ君、予備のライフルを出すわ。受け取って』

ミサトさんから通信。ほどなくして新たな兵装ビルが生え、そこからパレットライフルが出てきた。が……

「うわっ」

再び光の鞭が飛来し、俺はほとんど反射的に横に飛んだ。鞭は回避できたが方向がまずい。ちょうど、ライフルを格納した兵装ビルと自分との間に、使徒が位置するという状態になってしまったのだ。焦るな。無理に取りに行っても敵の攻撃の餌食だ。使徒から距離をとり、時計回りにゆっくり回り込む。散発的に鞭での攻撃が飛ぶが、相手の動きを見ていればなんとか回避できる。ただ、近づくのは難しそうだ。やはり、ライフルは回収しなければ。

やがて、もう数歩でライフルに手が届く距離までたどり着いた。

あと少し。そう思い、視線がライフルに向く。

その瞬間が命取りだった。

視線を戻すと、いつの間にか使徒が間合いを詰めていた。

「しまっ……」

叫びきらないうちに、足首に痛みが走る。次いで、ぞっとするような浮遊感。

足首を鞭に絡め取られ、そのまま投げ飛ばされたのだ。

「うわああああああっ！」

地鳴りのような轟音がこだまする。

背中に激痛が走り、息が詰まった。どうやら山肌に叩きつけられたようだ。

と、その状態に強い既視感を覚える。それが、朦朧となった意識を急速に覚醒させ、さらに恐怖すらも忘れさせた。

その既視感に従い、尻の後ろについた、エヴァの右手元に視線を

移すと、指の間で、泣きながら震えるトウジとケンスケがいたのだ。そう、それは漫画版と同じ展開。エヴァ見たさにシエルターから抜けだした二人が、戦いに巻き込まれるのだ。迂闊だった。漫画と同じこの状況は予測できたはず。ちゃんとクギをさしておくべきだった。

『何でこんなところに民間人が!?!』

ミサトさんの声も悲痛だ。

だが、使徒は驚いている余裕なんか与えてくれない。光の鞭が再び襲ってきた。

下手に動くと二人を踏み潰してしまう。

そう咄嗟に思った俺は 自分でも信じられないが 飛んできた鞭を二本とも掴んでいた。

光の鞭は炎のような熱量を持ち、容赦なく、エヴァの手のひらを焼いた。熱さは接続シンクロしている俺にも伝わる。

「熱ぢぢぢぢぢぢぢぢっ! ミサトさんっ!」

『わかっているわよっ! なんとか振り払って!』

「だって近くに人がっ!」

『できるだけ動かないように、振り払うのよ!』

「ムチャ言わないで下さいっ!」

トウジとケンスケを見るが、腰が抜けているのか、恐怖に竦んでしまったのか、座り込んで動かない。

俺は手の痛みには耐えながら、数瞬、考える。が、考えるまでもなく、他に手はない。

「ミサトさんっ、二人をエントリープラグに収容します! 許可を下さい!」

一瞬の沈黙。しかしそれが、俺にはヤケに長く感じられた。

『……わかったわ。許可します』

「初号機、現命令のままホールド! エントリープラグ、イジェクト!」

許可が下りたところで、俺は躊躇なくプラグを出した。そして、

外部スピーカーをオンにして、叫ぶ。

「二人とも、乗れっ！」

俺が場所を説明する前に、即座に反応したのはケンスケだった。迷わずエントリープラグに向かってよじ登る。トウジは慌ててケンスケに倣った。

さすがケンスケ。どっからエヴァの仕組みなんて情報を仕入れてくるんだか。

『葛城一尉！プラグに民間人を乗せるなんて越権行為よ！』

『責任は私がとります』

リッコさんとミサトさんの口論が聞こえるが、俺の知ったこつちやない。ハッチをあけると、二人が飛び込んできた。

「ぶわあっ！なんやコレ、水やないかあっ！」

「か、カメラ、カメラが……」

ＬＣＬに驚く二人。

「プラグ、エントリー！」

俺が叫ぶと、再びプラグがエントリーされ、神経接続が回復する。手にあの熱さが戻ってくるが、先ほどより感覚が鈍い。

『異物が入ったせいで、シンク口率が落ちてるわ！』

リッコさんが叫ぶ。

「異物とはなんじゃコラア！」

「うるさいトウジ！気が散る！」

なにやら喚くトウジを怒鳴って黙らせる。この状態でエヴァを動かすには、いつも以上の集中が必要だ。

『退却よシンジ君。回収ルートは38番』

ミサトさんの指示が飛ぶ。38番ルートは現在地のすぐ横だ。

鞭を引っ張って使徒を寄せ、蹴り飛ばす。その隙に、回収坑に走り。首尾よく坑に飛び込んだ。回収坑が開き、初号機が回収されると、使徒がその穴に飛び込もうとしている。

ヤバイ、ジオフロントに入られたら……

そう思った俺は、坑にATフィールドで蓋をする。

使徒が坑に入れず、ATフィールドに頭を打ち付けているうちに、シャッターが閉じた。

「……疲れた。」

「だ、大丈夫かシンジ」

「大丈夫じゃないよ……」

謝るトウジに、ジト目で返す俺。

「なんであんなとこにいるんだ、死ぬ気かよ？」

「す、すまん。いや、ケンスケのヤツがな……」

「なんだよ、トウジこそ」

何か言い訳をしようとして、口論になりかける。こんな狭いところでケンカでもされたらたまらない。慌てて制止する。

「おい、やめろ。こんなとこでケンカすんな。……事情は俺じゃなくて、ネルフの職員に説明してくれ。どうせ絞られるだろ」

「げ」

「まあ拷問とはいかないだろうが、それなりに厳しい尋問と説教が待ってるんじゃないかな」

「うつつ……」

と、さんざん脅しかけてる間に、エヴァはケイジに到着する。トウジとケンスケは、プラグから降りると、黒服につれていかれた。

そして俺は、三度エヴァにエントリーする。こっちの仕事は、まだ終わっていない。

「すみませんミサトさん、ミスりました」

『まあ、反省会は後にしましょう。ちよっちマズイ情報があるわ』
「……なんです？」

『やつのATフィールド抜きに体皮強度を試算したら、パレットライフルの火力じゃ不足するっていう計算結果が出たそうよ』

まじか。というより、どうやってそんな試算をしたんだろうか。

『むき出しのコアの強度は情報不足で試算できてないけど、第三使徒の例からいくとそっちなら行けそうなのよね』

「といつても、今の俺の腕じゃ、動きながらあの小さな的に当てるのは、どうにも……」

かと言つて、あの高速で動く光の鞭を掻い潜つて、近接戦に持ち込むのもまた難しい。せめてあの攻撃を無力化できれば……というところまで考えて、脳裏に浮かぶのはまたも漫画の風景。やはりアレしかないのか。躊躇するが、あまり時間を掛けてもいられない。覚悟を決める。

「……作戦を提案します」

『言つてみて』

「あの使徒の鞭は、鞭といいつつ薙ぐのではなく、何故か突く攻撃がほとんどです。そこで、プログレッシブ・ナイフを装備して、使徒の正面から一気に間合いを詰めます。そして、あの鞭で初号機のボディを貫かせます」

『え？』

「で、ボディで鞭の動きを封じつつ、頭の下にあるコアをナイフで破壊します」

そこまで説明すると、慌てた様子でミサトさんが制止する。

『ちよつと待つてよ、あなた、痛覚までシンクロしていることを忘れてない？ それに、一歩間違えばプラグごと破壊されるわよ』

「今の俺の技術と頭じゃ……これが精一杯です。もう少し被害を抑えられる方法があればいいんですが」

しばしの沈黙。

『……その作戦を採用します』

「了解です」

『ごめんなさい。無能な指揮官で』

俯くミサトさん。

「お互い様、ですよ。その辺も、あとで反省会しましょう」

そして、少し意識的に笑って見せた。

「大丈夫。なんとかしますよ」

その直後、何故かミサトさんの映像が突然途切れた。

再び地上に現れる、俺と初号機。

プログレッシブ・ナイフを肩のウェポンラックから取りだし、構える。エヴァを人間サイズとすると、刃渡りはだいたい文化包丁といったところか。酷く頼りなく見える。もうすこしリーチの長い武器がほしいところだ。
手と膝が、震える。

それでも、こんなところで死にたくはない。

使徒を睨む。気合を入れる。

ATフィールドを使徒のそれにぶつけ、中和させる。

俺はナイフを腰だめに構えて、そのままチャージをかける。

「うおおっ！」

恐怖を振り払うための絶叫。

そんな初号機に向かって、恐怖の元が、飛んできた。

どすっ！どんっ！

「うっ、ぐ……」

腹から全身に走る、経験したことのない激痛に、一瞬意識が飛びかける。

だが、初号機の胸と腹を貫き、目論見どおり身動きできなくなつた使徒を見ると、辛うじて踏みとどまることができた。

痛みを通り越して、もはや何だか判らなくなった異物感に耐え、大きく一歩踏み出す。それでようやく、使徒の胸元の光球コアに手が届く距離になった。

かすかに残った意識をかき集め、イメージする。コアにナイフを突き立てる、イメージを。

「うわあああああああああああああああああ！」

狙いあやまたず、刃は光球に吸い込まれる。

「あああああああああああああああああああ！」

高速で振動する刃は、使徒のコアを少しずつ抉ってゆく。

「あああああああああああああああああああっ！」

そして、コアの亀裂から漏れる光が消えたとき……エヴァを貫く光も消えた。

使徒は脱力し、その場に立ち尽くす。

一瞬後、俺は痛みから解放された。そして、そのまま俺は意識を失った。

また、病院送りか。

目覚めて最初に見えた天井が、前回と同じだったので、俺は苦笑するしかなかった。

その天井を見たまま、戦いを思い返す。

怖かった。恐ろしかった。だけど、それとは別に、妙な感覚があ

った。

ただ興奮していただけではない。手詰まりの場面でも、妙に冷静に、漫画の内容を思い出せる俺がいた。

楽しんで……いたのかな。

そう考えると、納得がいった。何故こんな状況に楽しみを覚えるのか、心当たりはないわけではない。

退屈だったのだ。

逃げたかったのだ。

かつて『俺』がいた世界で感じていた、閉塞感と無力感を払拭するものが、ここにはあったのだ。

恐怖は、事が終われば消える。肉体的な痛みもやがて消える。

それなら精々、「傷つきながら戦うヒーロー」を演じてやるっ。

ここならそれができる。そんな風にさえ思った。

そんなことを考えていると、病室の扉が開いた。入ってきたのは、蒼銀の髪の少女。

「レイ？」

レイは無言でベッドの傍まで来ると、あの冷たく紅い目で、俺を見つめた。俺は何故か、その瞳から目を逸らせない。しばらくただじっ、と互いの顔を見つづけた。

沈黙を破ったのは、レイだった。

「わからない」

「え？」

「なぜ、あなたは あんな危険なことをしたの？」

「危険なことって？」

「双子山に叩き付けられたあと、使徒の攻撃をかわさず、鞭を掴んだ。シンクロ率が落ちるのに、あの二人をプラグに乗せた。なぜ？」

「なぜって、そりゃあ あの二人は友達だしなあ。さすがに、へ

夕に動いて二人を踏み潰したんじゃ、寝覚めが悪いじゃない」

友達、とか、知り合いが死ぬ、ということがよく理解できていないようだ。これも命令優先で育てられた故なのだろうか。

「シンジ君が死にそうになっても？」

「死にそうなのは、今だってそう変わらないと思うけど」

「人類が滅亡が賭かっけていても？」

「うーん」

俺はしばらく考えたあと、言った。

「やっぱほら、友達や知人が危機に陥ってたら、助けてあげたいよ。できれば、他の人をないがしろにしたくはないけど、……これも絆、ってやつかな。やっぱ絆が強い人は、えこひいきしちゃうよね」

「えこひいきって、自分よりも？」

「……あんまり、いいことじゃないんだけど……つい、ね」

「そう」

レイは相変わらず、冷たく言った。

そのまま、しばらくの沈黙。

「どうしたの？レイ。俺のこと心配してくれるの？」

沈黙に耐えられなくなった俺が、からかうように言ってみた。

「心配？そうね……そうかもしれない」

「え、ほんと？」

俺は軽い驚きと、強い喜びを感じていた。このレイが、俺のことを心配してくれているなんて。

だが、レイが語る次の言葉は、より強い驚愕と、大きな疑念を俺に打ちこんだ。

「私はあなたを守らなくてはならないから。……命令、だから……
碇司令の」

第六話 そばにいるJr

俺は、第四使徒の亡骸の解体・調査現場にやってきた。ミサトさんに「自分の倒した敵を見ておくのも悪くないわよ」とか言われて、連れてこられたのだ。

「やつほー、リッコ」

「ちわー」

「あらシンジ君、こんにちは」

出迎えてくれたのは、技術部の最高責任者であるはずのリッコさんだった。

「リッコさん自ら現場で調査ですか。大変ですわー」

「まあ、自分で分析するのが一番確実だからね」

言葉の割に、自嘲気味に笑うリッコさん。偉くなっても権限委譲できずに諸事に忙殺されるタイプの人だなあ。

「ほお、言うじゃない。で、何かわかったわけ？」

「これよ」

リッコさんが指差すモニタには、大きく「601」と表示されていた。

「……何スか？これ」

「解析不能、つてことよ」

「何よそれ。結局ワケわかんないってこと？」

「まあ、そうね。でも、一つだけ判ったことがあるわ。使徒の固有波形パターンが、人間と酷似してるのよ。共通部分は99・89%と言われても、俺はよく解らないのだが、ミサトさんには思い当たるところがあるようだ。」

「それって……」

ミサトさんがつめくのに続けて、リッコさんがちょっともったいぶる様に言った。

「エヴァと、同じよ」

その後、使徒の解体現場を見て回っていると、ミサトさんが不意に声を上げた。

「あれ、司令じゃない？」

指さす方へ振り向くと、使徒のコアの破片を見学するゲンドウの姿があった。

「へえ。意外と研究熱心なんですね……ちょうどいい。話したいことがあったんだ」

何故レイが、「俺を守る」などと言い出したか、何故そんな命令を出したのか？それを聞きたかった。

「あ、ちよつとシンジ君」

ミサトさんの制止を聞かず、俺はゲンドウに近寄っていった。

「司令」

俺が呼びかけると、ゲンドウはこちらを一瞥し……何も言わず、また視線をコアに戻した。

「司令、お聞きしたいことがあるんですが」

「お前に関わっている暇はない。葛城一尉に聞け」
それだけ言つて、ゲンドウは去っていった。

ずいぶん露骨に避けてくれるな。単に子供への接し方が判らないというだけじゃなく、他にも何かあるのだろうか。

そんなことを考えて眺めていると、去っていくゲンドウの手の平が、酷い火傷跡で荒れているのに気がついた。

「シンジ君……」

心配そうに、俺を呼ぶミサトさん。俺は慌てて、取り繕った。

「ああ、ミサトさん。心配しないで下さい。なんとも思つてないですから、ところで……父さんの手、なんか酷い火傷の跡みたいなの

がありましたけど、何かあったんですか？」

「火傷？さあ……リツコはなんか知ってる？」

「ああ、あれはね……」

リツコさんが語った内容は、俺の「知っている」通りだった。

それがほんの少し妬ましく、ほんの少し、嬉しかった。

退院後、レイは毎朝のように、通学路の途中で俺を待ち、一緒に登校するようになった。

レイいわく、俺を守るため、だとか。

14歳の女の子に護衛させるというのは、男としてどうにも情けない。とはいえ、何年も戦闘訓練を受けているというレイは、ロクに喧嘩もしたことはない俺などよりよほど強いから、強く反発できない。それがますます情けない気分させるのだが……

まあ、こうやって一緒に歩いているだけでも、ネルフ保安部が請け負っている本来の護衛任務は効率よく進められるだろう。そう思うことにした。

俺とレイは、無言で歩く。レイは言うに及ばず、俺も元々よく喋る方じゃない。結果、互いに無言になる。だけど、不思議とその沈黙は不快ではなかった。ただ、肩を並べて歩く。お互い話をしたときだけ、話す。そんな距離は、とても心地よいものだった。

しかし、レイはどう思ってるんだろうな？

「ねえ、レイ」

「何？」

「俺を守る、って、イヤじゃない？」

「イヤじゃないわ。命令だもの」

レイの口から出る「命令」という言葉は嫌いだ。酷く痛々しく感じるから。

「命令じゃなかったらさ、こうして、俺と一緒に歩きたいとは思わないかな？」

レイは沈黙する。顔には相変わらず表情が無い。怒らせちゃったかな……

と、しばし経って、

「……よく、わからない」

呟くように、レイは答えた。

そして、再び数分の沈黙のあと、レイは先ほどよりも小さな声で、言った。

「……でも、こうしているのは、イヤじゃない」

「そっか。よかった」

それにしても、ゲンドウは何故、レイにあんな命令を出したのだろうか？

ずっと、その疑問が頭に引っかかっている。

ゲンドウの計画が俺の知る通りならば、ゲンドウにとってレイは人形であり続ける必要があるはず。なのに、こうして俺とレイを近づけるような命令を出すことに、どんな意味があるのか。

一体、ゲンドウは何を考えているのだろうか。俺の知らない事実があるのだろうか。あるいは、俺の知ってることは間違いなのだろうか。

「うーん、わからん」

「何が？」

思考がつい、口に出てしまったようだ。レイが俺の顔を覗き込んでくる。顔は相変わらず、無表情だが。

「え、いや、司令がさ……なんでレイに、シンジを守れ、なんて言ったのかなあ、って」

「……あなたが、司令の息子だから」

「だからってレイを……」

そこまで言つて、俺はしまったと思い、口を噤んだ。

稀有で希薄な「絆」に縋る少女に、あまりにも無神経なことを言つてしまった。

レイは俯いている。

「……あー……その」

「私には……代わりがいるもの」

「レイ」

俺がちよつと強めに呼びかけると。驚いたように顔を上げるレイ。「代わりがいる、なんて言うなよ。少なくとも俺にとって、クラスの連中にとって、レイの代わりなんかいないんだからな。」

それにレイだって、父さんに大事にされてるじゃないか。

聞いたぜ。父さん、手に酷い火傷を負つてまで、レイを助けたんだろ？」

調査現場で、リツコさんから聞いた話だ。

俺がここに来る前、エヴァ零号機の起動実験が失敗し、零号機は暴走。勝手にエントリープラグが強制射出され、ケイジの壁を跳ね返り、天井の高さから落下した。

レイはその衝撃で怪我をしたのだが、その時、過熱したハッチを、火傷に耐えながら素手でこじ開け、レイを助け出したのがゲンドウだった。

「……でも、あの人が見ているのは、私じゃないもの」

そう呟くと、また、レイは俯いてしまう。

「それを言うなら、俺でもないさ」

「嘘」

「嘘じゃない。あの男が見てるのは……まあいいや。とにかく、な。レイはもっと自分を大切にしろ。レイが死んだら、悲しむ人間は少

なくともここに一人いるんだからな」

そう言って笑って見せた。

すると、レイは俺の顔をじっ、と見つめてきた。

「ん？どうした？」

そう言つとレイは目をそらし、「何でもない」とだけ言った。

「今朝も夫婦揃って登校か、羨ましいことやな」

「まったくだね」

今日も今日とて、お決まりの冷やかしを浴びせるトウジとケンスケ。

「だからそんなんじゃないってのに……まったく」

とはいえ、毎朝一緒に登校して、帰りも大抵一緒となれば、そんな風に見えるのは当然だろう。だから俺も強く否定できない。

正直、悪い気分じゃないしな。

「こんだけ見せつけとって、何言つとるんや」

「そうだそうだ。綾波も、シンジが来てから何か雰囲気変わってるし」

「……そんなことないわ」

レイも否定するが、それすらもトウジたちに見ればいいネタだ。

「そんなことあるわい。前はこんな風に、ワシらの話に入ってこんかったやろ」

これまで、レイはたとえ自分のことが噂されていても、反応することはなかったらしい。自分に用事があるときだけ、機械的に反応する。

他人との関わりが嫌いなんだろう……それが、クラスメイトの綾波レイに対するイメージだった。

まあ、これまで他人との関わりを必要ないものと思っていた

ようだから、あながち間違いというわけでもないのだろうが。

だから、俺がクラスの連中、トウジやケンスケ、洞木さんなんかと話すときは、できるだけレイを交えて話すようにした。目論見通り、レイは俺以外の人も少しずつ会話を交わすようになっていった。相変わらず表情は乏しいが、それすらも、彼女の個性として受け入れられつつあった。

トウジがからかう様子を見ていた洞木さんが、寄ってくる。

「そうそう。綾波さん、最近私達とも随分話してくれるようになってたし。やっぱり碓君の愛の力なのね」

「ほ……洞木さんまで」

「シンジ。ワシはお前を見縊っておった！お前は凄いやつ！」

オーバーアクションで、トウジは俺の肩を掴む。

「心を閉ざした女性を変える……ある意味、男として最高の勲章だね」

ケンスケも大げさに頷いて見せる。

「や、やめろつてば。変わるのにはレイの意思。俺は何もしてないよ」

「シンジ君」

「な、何？レイ」

俺を呼ぶレイの声が、なんとなく緊迫感を持って聞こえる。

「……私が変わると、迷惑？」

「……はあ？」

その場にいた全員の声が八毛る。

「な、なんでそうなるの？」

「私が変わるせいで、シンジ君が皆に詰め寄られて、困っている」
啞然とする一同。

いち早く再起動を果たしたのは洞木さんだった。

「や……やあね、綾波さん。別に綾波さんが変わるのが悪いわけじゃないわ。今みたいに、明るくなっていくのはむしろいいことよ。」

碓君だって喜んでるわ。ねえ碓君」

「あ、ああそうだよレイ。レイが気にすることはないんだ」

「本当に？」

無表情だが、瞳が微かに揺れるレイ。

「ホントだってば」

「……アホらし」

「同感」

そう言つて、トウジとケンスケは気が抜けたように自分の席に戻つていった。

放課後。

「レイ、俺、今日は道場だけど、レイはどうする？」

「私も行くわ」

レイに守られてばかりというのも癪なので、ネルフの訓練の合間を縫つて、学校の近くにある中国武術の道場に通うようになった。

「今日も道場かいな。シンジも見かけに寄らず熱血やなあ」

トウジがからかってくる。

「そんなんじゃないよ。融通が利かないだけさ」

「同じや。ワシはそういうノリは好きやけどな」

「あー、確かに好きそうだな」

「トウジは熱血バカだからね」

「誰がバカじゃ、誰がっ！」

「はははは、じゃあな」

トウジとケンスケの漫才を尻目に、俺とレイは教室を出る。

「せいっ！せいっ！」

棒を使った演武を繰り返す。俺から少し離れたところで、レイも同じ鍛錬をしている。

「せいっ！はあっ！」

この道場では、徒手空拳での戦い方の他に、剣、棒、ヌンチャク、トンファーといった多様な武器を用いた戦い方を学べる。俺が空手や柔道といった、比較的メジャーな格闘技ではなく、この道場を選んだ理由がこれだ。ここで馴染んだ武器を、エヴァ用の近接戦用武装として提案しようと思っている。

「よし、そこまで。小休止だ」

師範代が手を叩いて言った。

汗を拭いていると、先輩道場生が話しかけてきた。

「よお、碇。今日も彼女連れか？」

「彼女じゃないけど……来てますよ」

視線をレイに向けると、数少ない女性の道場生が集まり、何やら話していた。

始め、女連れで道場に来るのはかなり反感を買ったりもした。何人かがこっそり俺に喧嘩を売ってきて、レイに叩きのめされた。それがなお強い反感を誘うことになったのだが、元来他人に関心を持たない性質である俺は、気にせず鍛錬に没頭していた。しばらく通つていれば、真剣にやっているのを見てくれる人も増えてきて、気安く話せる仲間もできた。

「ほんつと、レイちゃんって綺麗だよなあ」

「……あんたハタチ過ぎでしょ。14歳に手出したら犯罪ですよ」

ま、それは俺も似たようなものだが。

「それ以前に、叩き伏せられるよ」

「はは、ごもつとも」

「彼女が強いと、苦労するだろ」

「だから彼女じゃないですよ……」

などと笑いながら話す。「俺」も「シンジ」も、本格的に運動を

したことがなかったから、こういう場での人との触れ合いは新鮮だった。戸惑うことも多いが、楽しい。

なんだ、俺もレイと大差ないじゃないか。

そう思うと、不思議と笑みがこみ上げてくる。ふとレイの方に視線を向けると、目が合った。

「なあに見詰め合ってたんだ、碇い〜」

それを目ざとく見つけた先輩道場生に首を締められる。

レイは無表情で、女性たちの談笑の輪に戻っていった。

第七話 想いと疑惑と駆け引きと

今日は学校を休み、レイと一緒に、ネルフ本部へ向かう。零号機の起動実験があるのだ。レイはパイロットとして、俺は、万一のための警戒要員として参加を言いつけられていた。

俺は相変わらず考え込んでいた。次の使徒のことである。

漫画の通りならば、今日、第五使徒が来襲するはずだ。兵装ビルを一瞬で溶融させる程のエネルギーを持った加粒子砲。それに対抗するための作戦は、レイの乗る零号機をディフェンスとし、初号機が陽電子砲で打ちぬく、というものになるはず。

初弾を外し、特製の盾をもって加粒子砲からシンジを守るレイ。

しかし、予想以上に早く盾が融解してしまったため、零号機は全身で加粒子砲を浴びることになる。

結果的に、レイには目だった怪我もなかったはずだが、一歩間違えばエヴァごと破壊されていたかもしれないし、そうでなくとも沸騰したLCLで全身火傷、もしくは内臓をやられていたかもしれない。

フィクションのキャラクターに対してならば、そんな危惧の欠片も抱くことはなかったが、こうして目の前にいる少女に降りかかるであろう災難だと思つと、身震いが走る。

なんとか、安全に切り抜ける方法はないものか。

「……くん、シンジ君」

ふと気がつくと、レイが俺の顔を覗き込んでいた。

「どうかしたの？」

「あ、ごめん。ちょっと考え事してて……」

「そう」

前方に視線を戻すレイ。

いつものその無表情さが、今日はやけに気になった。

「ねえ、レイ」

「何？」

「今日の起動実験、怖くないの？」

わずかにだが、当惑混じりの視線を、レイは再びこちらに向けてきた。

「なぜ？」

「だってさ、前は失敗して、怪我したんだろ？」

「怪我は、怖い。だけど、今回は前の反省を踏まえているいろいろ対策しているはず。だから怖くないわ」

淀みなく言つてのけたレイが、少し羨ましかった。

「そう。信じてるんだね」

「……シンジ君は、信じられないの？司令のこと」

どう答えたものだろうか。正直に答えたら嫌な気持ちにさせてしまつかもしれない。けど、今更取り繕っても嘘くさいし、どこかでボロがでるだろう。

「そうだなあ。割りきってエヴァには乗っているけど、正直言つと、イマイチ信用できないかな」

そう言つと、レイは立ち止まり、俺を見つめてきた。初めて見る、はつきりと判る悲しい表情。

「レイ……」

「なぜ？あなたと司令には、親子という絆がある。私より強い絆がある。なのに……なぜ？」

それを聞いて、俺は息を詰まらせた。レイにとっての「絆」というものの重さを、俺は軽く見ていたのかも知れない。君が大切にしているものは、俺も大切だ、つい、そういう安直な同意の言葉が喉から出そうになる。

だが、すぐに思いなおすと、首を横に振り、言つ。

「あのね、絆が信頼を作るんじゃないんだ。逆なんだよ。信頼が絆を作るんだ。」

血がつながってることが絆を作るんじゃないくて、血のつながりが家族を作り、その中で信頼関係を築くからこそ、絆ができるんだよ」「家族……信頼」

レイは何かの設問を解こうとするかのように、その口から単語を紡ぎ出す。

「俺には、レイと父さんがどんな関係なのかは判らないけど……でも、多分……君は父さんと何年も一緒にいたんだろう？ でも、俺との間には何も無いんだよ。十年も離れてたんだから。何も、無いんだ」

口を突いて出た言葉に、自分で戸惑う俺を、傍らで冷静に分析する俺がいた。「何も無い」といつつ、言外にそれを求めている。

『シンジ』が、未だに父親を求めているというのだろうか？

最近は、どこまでが『俺』の思考で、どこからが『シンジ』の思考なのか、区別がつかないようになってきている。こんな風に、自分の言葉に戸惑いを覚えるのは、久しぶりだった。

レイは俺の横顔をじつと見ている。こんなことで混乱している俺を、この少女は、どんな風に見たのだろう。

やがて、少女は静かに口を開いた。

「でも、司令はシンジくんのこと、心配してるわ」

レイの言葉は、にわかには信じられなかった。

「……それ、本当？」

レイに問い直すと、しかしレイは心細げに俯いて、

「そんな気がするの」

と小さく言った。

「そっか」

信じられないが、レイが嘘をつくとは思えない。絆を信じたいレイの主観が混じっている……俺は、そう思うことにした。

その後は無言のまま、歩く。

ジオフロントへ通じる電車に乗る前に、空を見上げる。常夏となつてしまった日本の、夏らしい抜けるような青空。そして強い日差し。

今日も、暑くなりそうだ。

『パイロット、零号機と接続開始』

『パルス及びハーモニクス正常』

起動実験はスムーズに進められている。

ゲンドウはじつと、発令所から零号機の様子を見つめている。

実験開始前、俺はゲンドウに話しかけてみたが、「後にしろ」の一言で突っぱねられた。

『絶対境界線まで2.5……2.0……1.7……』

そんなゲンドウから目を逸らし、零号機を見上げる。

『……0.4……0.3……0.2……0.1……ボーターライン

クリア。零号機、起動しました』

零号機の目に光が灯る。レイと零号機が繋がった瞬間だ。

起動実験が無事に終了したのだ。レイの無事に、とりあえずホッと胸を撫で下ろす。

そのとき、神経を逆なでするような警告音が鳴り響いた。

『未確認飛行物体接近中。分析パターン青。おそらく使徒と思われるます』

やっぱり来たかっ！

ここまで沈黙を保っていたゲンドウが、口を開く。

「実験中止だ。初号機を出撃させる」

その時、俺は大事なことを忘れていたのに気がついた。

まずい。ここでいきなり出撃させられたら、出鼻を加粒子砲でブチ抜かれてしまう。漫画では、それでシンジが仮死状態にまで陥った。

「ちょ……ちょっと」

なんとか説得しようと考えたが、「使徒は加粒子砲を持つてるはずだから、まず威力偵察してくれ」などと言ったら、使徒の能力を知っている俺が怪しまれてしまう。

「何をしている、早く行け」

「シンジ君、早く！」

ゲンドウは俺を冷たく睨みつけながら、ミサトさんは焦燥を浮かべて、俺を促す。

しょうがない。

俺は腹を決めると、ケイジへと駆け出した。

モニタに映る使徒は、漫画と同じ、いかにも金属的な質感を持った正八面体だった。……これで生き物だってんだから、なあ。

エヴァに乗りこみ、神経接続をしている最中も、俺は加粒子砲を食わない方法を考えていた。

真っ先に考えられるのは、ATフィールドで防ぐこと。

しかし、あの加粒子砲のエネルギーは、使徒のATフィールドを貫いた試作型陽電子砲と同程度以上だと考えられる。だとすると、エヴァのATフィールドも貫かれてしまうかもしれない。

地上に出たら即かわす、というのも、タイミングがシビア過ぎるだろう。固定具ロックホルトがあるから、それを引き千切るためのタイムロスがある。

『シンジ君、応答して、シンジ君！』

「あ、はい？」

『どっしたの?』

ミサトさんの声。

どうやら、呼びかけても返事のない俺を心配したらしい。

「す、すみません。ちょっとぼーっとしちゃって」

『もう、シンジ君、集中して』

「あ、はい。すみません」

要は地上まで出なきゃいいわけだから……あれが使えるか。
よし。

『エヴァ初号機、出撃!』

号令と同時に、リフトが高速で上昇する。身構える俺。

『ダメっ!シンジ君、よけてっ!』

上がり切る前に、ミサトさんの悲痛な叫びが聞こえた。

やっぱりかっ!

予測していた俺は迷わず、初号機を包むように球状のATフィールドを展開した。

メキメキッ!

ATフィールドはリフトのレールを破壊し、周囲の壁にめり込んで、上昇を止めるブレーキとなった。

ガリガリガリッ!

壁が円筒面状に抉りとられてゆく。

「ぐっっ」

強烈な振動と慣性力。シートベルトが肩にくい込む。

止まらないっ!?

ATフィールドを使ってリフトを止め、地上に出るのを避ける……
名案だと思ったが、リフトの速度を甘く見ていた。フィールドを

展開しても、すぐには止まらないのだ。俺は焦った。

中途半端なところで停止し、首だけが死の閃光を浴びる光景を想像した。

全身で受け止めるのと違い、首だけでは負荷に耐えられず、吹き飛ばされるだろう。集中しているためかシンク口率が高くなっているようだから、首をもがれる痛みのフィールドバックは想像を絶する。シヨック死だって考えられるのだ。

恐怖。

それがさらにATフィールドの出力を上げた。

「ぐううあああああー！」

思わず漏れる絶叫。

やがて、停止した。

しかし、目の前には閃光が迫る。肩から上が、地上にはみ出ているのだ。

「うわあああああああつ！」

余りの恐怖に、咄嗟に頭を抱えてしゃがみこんだ。固定具がATフィールドによって吹き飛んでいたのは幸いだった。

すぐ頭上で轟音が響く。恐らく加粒子砲が兵装ビルか何かに当たったのだろう。頭部に、微かに熱を感じた。俺はその威力に恐怖しつつも、とりあえず助かったことに安心していた。

ため息と共に、ATフィールドを解除する。

「っはあ、助かつ……」

と、突然感じる浮遊感。

……あ、しまった。リフト壊したせいで、台座が落ちちゃったの

か……

「たあああああ……」

俺は間拔けな声を発したまま、数十メートルほど落下した。

どおん、と大きく鈍い音と共に、初号機は背中を射出ルートの曲がり角に打ちつけた。

「いててて……」

『シンジ君、大丈夫？』

ミサトさんからの通信。

「あ、はい……すみません、リフトと射出ルート壊しちゃって」

『仕方ないわよ。エヴァの修理費に比べれば安いもんだわ。むしろいい判断だった。最後はちよーっちカツコ悪かったけどね』

「たはは……」

『作戦を練り直すから、とりあえず自力でケイジまで戻ってきて』
「了解」

よつやく、まともな作戦を立てられる。

状況について簡単に説明を受けた後、シャワーを浴びて、休憩室でジュースを飲む。ビールでも飲みたい気分だが、さすがにここでビールは売っていない。

椅子に座り、今立案されつつあるであろう「ヤシマ作戦」へ思いを馳せていた。

「あらシンジ君、大丈夫？」

考え込んでいた俺に声をかけたのは、リツコさんだった。

「この通り、大丈夫ですよ」

そう言って、腕を振り回して見せると、少し安心したように微笑んだ。

「……あの、リツコさん、作戦立案で忙しいんじゃないんですか？」

「私の役目はデータを分析して、提供するだけよ。あと初号機の点検ね。いずれにせよ、もう終わったわ」

「はあ、そうですか」

そんな俺を尻目に、リッコさんは自販機でコーヒーを買い、俺の隣に腰を下ろした。

しばし流れる沈黙。

「……聞かないのね、今回の使徒のこと」

唐突なリッコさんの台詞に、どきりとする俺。

「あ、ああ、そうですね。えっと、あのとき、どんな攻撃してきたんですか？」

「あなた、知っているんじゃないか？」

リッコさんは、すっ、と目を細めて俺を見る。

「……え？」

まずい。感づかれただろうか。

「あなたがATフィールドを展開したタイミングは、ミサトの叫びに反応したにしては、早過ぎるわ。何しろまだ言い終わってないタイミングですもの。使徒の攻撃を、あらかじめ知っていた、としか思えないのだけど……ちがう？」

俺から視線を逸らさず、疑惑の根拠を語る。俺は触れば切れそうな視線に負けじと、見つめ返した。

「そんなの知ってれば、苦労しないですよ……今回の使徒って、これまでのと違って、いかにも格闘戦はできません、って形じゃないですか。てことは飛び道具があるかもしれないでしょ？なのに、威力偵察も無しでいきなり放り出されることになったから、警戒してたんですよ」

「……無理のある言い訳ね」

いつもより低い声。正直ビビる。

「そう言われても……」

さらに言い訳を続けようとするが、リッコさんは、ふう、とため息をついた。

「まあ……今はいいわ」

うーむ。すっかり怪しまれちゃったなあ。ま、今更どうこうしようもないか。

それより……そうだな、レイのこと、リッコさんなら何か知ってるかもしれない。

「ところで……リッコさん」

「何？」

「司令……父さんは……なんでレイに、俺の護衛なんか命令したんですか？」

「……どうしてそれを、私に訊くの？」

「直接訊こうとしてるんですけど、何かずっと避けられてるんですよ。あの人は、一体何を考えてるんですか？」

「それを、私があなたに教えると思う？」

悪戯っぽく微笑むリッコさんは、さっきとギャップが大きく、なんだか魅惑的に見えた。幼くも見える。その様子に、少し戸惑った。「どうしたの？」

「あ、いえ……うーん、やっぱり信用してもらってないんですね。ま、俺も隠し事は多いですから、追求はしませんよ。そういえば、この間の話はどうになりました？」

この間の話とは、ゲンドウがユイを諦める方法についてである。

「それも、秘密」

「ええ？」

「なんてね、正直言うと、やっぱり全く思いつかないわ。他を当たってもらったほうがいいかもね」

そんなことを言う。たぶん、まともに考える気はないのだろう。そんな簡単に考えつくようなら、とっくに実行しているだろうし。「いつそ誘惑してみたら、どうです？」

ぶっ、とコーヒーを吹き出しかけるリッコさん。アニメの通りなら、そんな段階はとうに越えているはずだが、本当のところはどうなのだろう。この反応だけではよく判らない。

「何をマセたことを言っているのよ、子供のくせに」

コーヒーカップを見ながら、苦笑するリッコさん。

「……ねえ、シンジ君、一つだけ教えてくれないかしら？」

「何ですか？」

「あなたは、何をしたいの？」

「……ずいぶん、核心的な質問ですね」

「言えない？」

すこし考え込む。言ってよいか、ではなく、そもそも「何をしたいか」がはっきりしていないのだ。

十秒ほど、考え込んだ後……

「いえ、俺自身、実ははっきりとしないんです」

正直に言うことにした。

「強いて言えば……世界を守りたい、でしょうか」

「英雄願望、というやつかしら？」

「……独善的なところは似てるかもしれませんがね」

自嘲的に笑う俺。怪訝そうな目を向けるリッコさんを尻目に、俺は少し考えて、言った。

「そうですね、結局は……俺が存在できる場所を、守りたい。できるなら、俺に近い人も守りたい。そういうことだと思えます」

その言葉に、嘘はないつもりだった。元々ここは「俺」のいる場所ではない。それは判っている。だが、元々いるべき場所からはじき出され、今、俺は碇シンジとしてここに存在している。自分の意思では逃げようもない。その上、俺次第でこの場所すらもなくなってしまうかも知れない、となれば、動かざるを得ないではないか。

リッコさんはしばし沈黙した後、半分ほど残ったコーヒーを飲み干した。

そして、妖艶な笑みを見せた後……俺の耳元に唇を寄せた。

ちよつとキツめの香水と、コーヒーの香り。　趣味は悪いとは

言え、リッコさんもかなりの美人である。ドギマギする俺。

「ちよ、ちよつとリッコさん？」

「ひとつだけ、キーワードを教えてあげるわ」

ひそひそと話すリッコさん。その声すら艶かしい。

「キーワード？」

唐突な話に、戸惑いながらも眉をひそめる俺に、リッコさんは楽しそうに、その言葉を口にした。

「……じんるいほかんけいかく」

俺は思わず、ひゅっ、と音を立てて息を詰まらせた。

アニメのシナリオのバックボーンとなる重要な舞台装置。大人たちの間で蠢き続け、クライマックスまではその存在すら俺やチルドレンには知らされないはずのその言葉を、あえて俺に聞かせるリッコさんの意図が判らない。

混乱する俺の反応を見て、リッコさんは満足げに微笑むと、握りつぶした紙コップをごみ箱に投げ捨て、何も言わず休憩室から去っていった。

しばしショックで硬直したのち……

「ああっ、しまったっ！」

俺は、自分のミスに気がついた。

前フリもなくキーワードだけ聞かされて、あんな反応を返したんじゃない、「俺は何か知っている」って言ってるようなもんじゃないか。一杯食わされたことにようやく気がついた俺は、一人、頭を抱えた。

そのとき、館内放送が鳴り響く。

『ファーストチルドレン、及びサードチルドレンは、発令所に集合してください。繰り返しします……』

まあとりあえず、今は使徒をなんとかしなくちゃ、な。

そう思いなおし、俺は発令所に向かった。

第八話 ひたむきな心のその先は（前書き）

繰り返しになりますが、本作はTV版と旧劇場版を元にした二次創作になります。フリーダムなラミエルさんなんていません。ご了承ください。

第八話 ひたむきな心のその先は

「これまで採取したデータによりますと、あの光線、目標の外周部にある加速器によって高エネルギーを与えられた粒子を、ビームとして放出しているものようです。この加粒子砲をもって、目標は一定距離内の外敵を無差別に排除するものと推測されます」

「エリア進入と同時に、加粒子砲で狙い撃ちってワケね……エヴァでATフィールドを中和しながら接近戦、ってわけにはいかないか」
オペレーターの報告に、ミサトさんが受ける。

俺の知るミサトさんと違って、やり手のキャリアウーマンを想起させる、凜とした美しさを見せている。

それはいいんだが。

これは作戦会議である。作戦部でも上位の人しか出席できない。そんなところに一介のパイロットがいていいのか？

『実際に動くのはアナたちなんだから、聞く権利はあるわよ。大丈夫、ただ座ってればいいわ。もちろん、言いたい事は言っちゃって構わないし』

とは作戦部長の弁である。

まあ、責任者がいいって言ってるんだからいいんだろうが、その割には、一部の出席者の怪訝そうな視線が痛い。単なる末端の兵士、それも14歳の子供に、自分たちの仕事へ口出しして欲しくない、といったところだろうか。

へえへえ。何も言いませんよ俺は。

隣を見ると、レイが俯いている。珍しく緊張してるのかな、と思いきや……

かつくん。

蒼髪の頭が一瞬落ちそうになり、慌てて立ち直る。その上「ずる」と涎をすすなのだ。その音がまた、出席者の視線を厳しくさせた。

ミサトさんは、そんな俺たちを見ないふりをして、会議を進行させる。

「敵のATフィールドは？」

「健在です。相転移空間が肉眼で確認できるほど、強力なものが展開されています」

「攻守ともにほぼ完璧……難攻不落の要塞ってわけね。問題のボーリングマシンは？」

「現在、直径17.5メートルの巨大ドリル・ブレードが、ネルフ本部に向かって穿孔中。第2装甲板まで到達しています」

「本部への到達予想時刻は？」

「明日、午前0時6分54秒には、全ての装甲板を貫通し、ネルフ本部に到達するものと予測されます」

「あと10時間足らずね……」

爪を噛みながらそう言うと、ミサトさんはコンソールへ向き、通信を開く。

「赤木博士、いる？」

『伊吹です。赤木博士は席を外しています』

「伊吹二尉でもいいわ。エヴァの現在の状況を教えて」

『はい。初号機は、射出坑落下時に破損した背部第1装甲板を換装しました。起動準備も完了しています。零号機も起動準備が完了していますが、フィードバックにまだ誤差が残っています』

「零号機は、実戦投入できる？」

『動くには動きますが、精密な動きや機敏な動作は期待できません。接近戦闘は不可能と思われます』

「そう……ありがとう」

通信を切ると、こちらを向く。

「はあ……初号機がすぐに動けるのが救いだけ……状況は芳しくないわねえ」

「白旗でもあげますか？」

ため息をつくミサトさんに、面白くもない洒落を言う眼鏡に短髪

の男。……日向二尉、とか言ったかな？

「それもいいけど、その前に……パイロットからは、何か意見はない？」

悪戯っぽい笑みをこっちに向けるミサトさん。他の出席者は、同情するような顔、露骨に顔をしかめる人もいる。

何考えてるんだよミサトさん。

とは言うものの。作戦立案に介入できるといのは、願ったり叶ったり、と言えなくもない。俺やレイの危険を減らせるかもしれないのだ。

「えーっと、それじゃ、ひとつ質問させてください」

「なに？」

「……加粒子砲の最大仰角って、わかります？」

その場の全員が全員、怪訝そうな表情に変わる。

「どうなの？日向君」

訝しがりながらも、質問の答えを促すミサトさん。

水平になっている円形の加速器で粒子を加速・射出する以上、真上や真下には撃てそうもない、と俺は考えた。実際に今までの動きを見ていると、常に正八面体の水平な辺から発射している。ドリルブレードが地中深く刺さっている状態では、転がって撃つこともできなйдらう。

「あ、はい。ダミーバルーンを使った実験から推測すると、よくても二十度前後であると思われます」

二十度……それならなんとかなるかな？

「それなら……上から攻める、というのはどうでしょう？」

「上から？」

「エヴァ用の輸送航空機……ウイングキャリアーと言いましたっけ。あれで目標の上空にエヴァを運び、そこから降下。目標のATフィールドを中和しながら、自由落下のエネルギーを利用して、武器でもって目標を貫通……という作戦なんですけど、どうでしょう？」

要するに、上から落ちる勢いで使徒を串刺しにしましょう、とい

うシンプルな作戦だ。これなら、日本全国から電力を徴収したり、戦略自衛隊から陽電子砲を強奪したりする必要がないから、むやみにネルフの敵を増やすこともないだろう。俺一人でカタがつくし。場がざわつく。誰も彼も困惑の表情を浮かべる。ややあって、数人の出席者から質問が飛んだ。

「正確にコアを突かないと、着地した瞬間に反撃を食らうわよ」

「あの加粒子砲って、使徒の外周部の加速器で加速させてるんでしよう？ならば、コアを外しても、加速器を破損させればこちらの勝ちです。それほど分の悪い賭けとは思いませんが」

「目標を貫通するだけの、大型の武器がないぞ」

「特別な武器は要りません。充分な高さからの自由落下なら、長くて丈夫な棒切れがあれば充分でしょう。刃状のものなら申し分ないですけど」

場に沈黙が降りる。その雰囲気はかなり辛い。俺は逃げたくなかった。

「ええと、俺は思いつきで言ったままでですから。駄目なら駄目で……」

「まあ、検討する価値はあるわね。他に策はなさそうだし」

俺が弁解しようとする、それを遮ってミサトさんが言った。再び技術部に連絡を取り、データの提供を要求する。

レイは……いつの間にも目を覚ましたのか、俺のことをじっと見つめていた。

レイを連れて、本部内の食堂で腹ごしらえをすることにした。

俺がでっち上げた作戦が有効なら、それに決まるだろうし、ダメなら本来の「ヤシマ作戦」が発案されることだろう。どっちみち、これ以上俺ができることはない。

レイは持っていた固形食や栄養剤を取り出そうとしたが、飯はちやんと食べ、と叱り、肉の入っていない味噌ラーメンを買わせた。

ちなみに俺は肉うどんである。

そういえばアニメで、レイが屋台で「ニンニクラーメンチャーシュー抜き」とか注文したシーンがあったよな。ファンの間で妙にウケていた。残念ながらこのメニューにはニンニクラーメンはないけど。

などと考えていたら、レイはテーブルにあったガーリックパウダーの瓶を掴むと、これでもか、とばかりに味噌ラーメンにふりかける。

漂うニンニクの香り。

……そんなに好きか、ニンニクが。つか味噌ラーメンに合うのか？

呆れる俺を尻目に、レイはラーメンをすすり出した。

俺も、うどんに軽く七味唐辛子を振り掛け、食べ始めた。

二人、無言である。

中学生の男女が、顔つき合わせて黙々と麺をすすっている。しかも格好は、身体のラインをそのままシルエットに写すプラグスーツだ。考えると、なんだか妙な構図である。

やがてレイは、どんぶりを両手で持ち上げ、ずずず……とスープを飲み干した。どん、とどんぶりを置くと、そのまま動きを止める。食うの早いなあ。俺はようやく麺を食い終わったところなのに。

「……なぜ、あんな作戦を提案したの？」

不意に問い掛けるレイ。

「ん？ああ、……まあ、せっかく意見を求められたから、ダメもとで言ってみただけだよ」

「でも、あの作戦が採用されたら、またあなたは一人で戦うのね」
伏し目がちに言う。

「それは、まあ……だって、零号機はまだ戦闘に耐えないって言うてたじゃない」

「でも、動くわ」

「動くわ、ってね」

「動けば、戦える。盾くらいにはなれるわ」

レイはいつもの表情だが、その言葉には焦りを感じる。どうしたんだろうか？

「……そんなに、戦いたいの？」

「戦いたい？……そうかもしれない」

「かもしれない、って」

「シンジ君が一人で戦って、一人で傷つくのを考えると、胸が痛くなる」

そう言うと、レイは俯いてしまった。

俺は少しだけ、胸が熱くなる。

「そう……俺を心配してくれたんだよね、ありがとう」

俺がそういうと、レイは顔をあげ、きよとん、とした表情で俺を見た。

「でも今は、零号機は万全じゃないんだ。不完全な状態なら、一刻も早く完全な状態に持っていくのが第一だよ。いつか、本当にレイの力が必要なときに動けなくちゃ、困るだろ？」

「でも……」

「大丈夫。まだあの作戦が採用されるとは限らないし、採用されたとしても、ミサトさんやリツコさんたちが、ちゃんと完璧な作戦に仕立ててくれるさ」

レイの不安をなだめながら、俺は内心嬉しくてしょうがなかった。俺のことを心配してくれたのも嬉しかったが、レイが任務や命令と関係なく、本気で人を心配しているのである。その心の成長を感じると、俺は喜ばずにはいられなかった。

結局、降下作戦が正式に採用された。

武器は、タングステン鋼の百メートルほどの棒に、プログレッシブ・ナイフの予備を括り付けたものだ。

目標上空五千フィート（千五百メートル）の高度から降下し、この即席の槍で使徒を貫くことになる。

『降下開始から地表まで、時間にして13秒ほど。その間の軌道修正は、背中と腹部の小型バーニアで自動的に行われるわ。だけど、姿勢が狂うと計算も狂うから、できるだけ直立状態を保つて。特に逆さまになったりすると、軌道修正は全く働かなくなるから注意してね』

ミサトさんからの通信。俺はすでに初号機に搭乗している。その初号機は、ウイングキャリアーに括られて上昇中である。

充分な高度を取る前に使徒に近づくわけにはいかないの、まず反対方向に離陸し、離れたところでUターンしつつ上昇してゆく。

「了解です。……それにしても、俺なんかが立案した作戦、よく採用しましたね」

『俺なんかが、なんていう言い方はよしなさい。使徒という理解しがたい相手について、一番肌で感じているのはアナたちパイロットなんだから。私は、今までの戦いを見てそう思ったから、アナタの意見を求めたの。この作戦についても、有効でリスクも少ないと判断したから、採用したまでよ』

「それにしたって、中学生の立てた作戦を採用したなんて言ったら、周りからの風当たりも強いでしょうに」

俺は苦笑する。

『まあ、私だって、いつもいつもアナ達に頼り切ってるつもりはないわよ』

それは、人としての素直な決意。

自分の力不足を素直に認め、すぐに今以上の高みを目指す、柔軟な向上心。

漫画やアニメの「葛城ミサト」には、こういう面はあまり見られなかったように思う。

だが、本来のミサトさんは、きっとこういう素直で貪欲な性格な

のだと思う。でなければ、たとえVIPの娘であろうが、20代でこの地位は得られなかったろう。

「そうですね。そうすりゃ俺も楽できるってもんです」

『シンちゃん、それはちよっとナマイキよ』

コンソール越しにクスクスと笑い合った。

『シンジ君、降下ポイントまであと五分よ。準備はいい？』

「はい」

声が硬い。自分でも判った。

『シンジ君って、いざって時には妙に緊張するわよね』

「そりゃ、怖いものは怖いですよ」

戦いの前の緊張と言うヤツには、何度やっても慣れないが、それに加えて今回は千五百メートルもの高所からのノーロープバンジーである。はっきり言ってかなり怖い。それに、まかり間違って、使徒に手が届かない場所に落ちようものなら、一瞬にして加粒子砲の餌食である。陽電子砲で射撃するほうが、逃げ道がある分まだ安全だったのかもしれないなあ……などと詮無いことを考え始めた。

『そうだ。レイ、こっちいらっしやい』

考え込んでいると、モニタにはレイの顔が映し出されていた。

いつもと違い、一目で判る、悲しい、切ない表情。

潤む紅い瞳で、俺の顔をじっと見つめる。

『シンジ君……』

ぐっ、こんな顔されたら、強がるしかないじゃないか。

「大丈夫、レイ。ちゃんと片付けて戻るからさ」

そんな強がりだが、不思議と俺の心までも落ち着かせる。

この子は、俺がどうにかなったら、悲しんでくれる。悲しんでしまっ。

そう思うと、死にたくない、死ねない、という気持ちが強くなる。

後で考えれば、それはあまりにも単純な思考だったが、この時の俺は、これが全てだった。

「また、あとでな」

精一杯の笑顔で、答えた。

『……………ええ』

そしてモニタの映像が、ミサトさんのニヤけ顔に変わる。

『愛しいレイちゃんの励ましで、勇気百倍ねん』

「そーゆー冷やかしはやめてくださいよ。」

でも……………今回は礼を言っときます」

『どーいたしましたして。さあ、そろそろ時間よ』

「はい」

そして、時を待つ。

『降下ポイントまで十秒。カウントダウン開始。八、七、六』

操縦桿を握る手に力がこもる。

決意が、俺とエヴァの一体感を、高める。

『……………三、二、一、ロックホルト・リリース固定具解除！』

そして、十数秒後。

即席の槍によって加速器を破壊され、手も足も出なくなった使徒のコアを、俺はプログレッシブ・ナイフで強引に貫き、ATフィールドで囲みつつ、自爆させた。

ボーリングマシンは、最後の装甲板の手前で、止まっていたという。

第九話 変化

第五使徒を殲滅し、ケイジに戻ってきた。LCLを吐き出してエントリープラグから出ると、整備員から歓声上がる。

凱旋、と言うヤツだ。

悪くないよな、こういうのは。

などと思いながら、方々にお辞儀して返しつつタラップを降りると、ミサトさんとレイが待っていた。

「お疲れ様、シンジ君」

「……お疲れ様」

「どーも」

労ってくれる二人に、俺は笑顔を返した。

「な？大丈夫だっただろ、レイ」

おどけるように言ったが、しかし、レイの反応は思いもよらぬものだった。

いつもの表情……その紅い瞳から、ひと雫、白い頬を伝った。

それはひと雫では終わらず、双眸から、ぽろぽろと止めど無く落ちる。

「れ、レイ？」

「私……泣いている。なぜ？」

「……嬉しいときにも、涙は出るのよ」

ミサトさんが優しい顔で、レイに言った。

「そう……私、嬉しいのね。……ごめんなさい」

「どうして謝るの？」

「こんなとき……どんな顔していいか、判らない……」

俺は、何か言葉を紡ごうとして、一度飲みこんだあと、ゆっくりと言って聞かせた。

「今判らなくても、いつかきくと判る。ゆっくり、考えるといいよ」
LCLに濡れた指で、涙を拭ってあげた。

その仕草に、目を閉じて、少しくすぐったそうにしていたレイは、やがて俺の手を取り、顔を上げ、まっすぐ俺を見つめて。

ゆっくりと、微笑んだ。花が綻ぶように……月明かりのような、優しい笑顔で。

「……わかってるじゃないか」

その笑顔に吸い込まれそうになりながら、俺は、それだけ言うのがやっとだった。

あれだけ騒がしかったケイジが、静まりかえる。とてつもなく優しい空気に、俺たちは包まれたのだった。

「てなことがあったんだって？シンジ」

ケンスケが、興奮気味に詰め寄ってくる。

冒頭のようなシーンが、彼の父親（ネルフ広報部に所属してるらしい）経由で彼に伝わっていたらしいのだ。身も蓋もない言い方をすれば、単なるデマである。そんな気障なキャラじゃないぞ、俺は「かあっ！シンジもキザなことするのう」

「そんな恥ずかしい真似できるかよ。ただのデマだよ、デマ」

二人とも冷やかashiモードに入りそうなので、俺は慌てて否定する。

「シンジって、意外と嘘のつけないタイプだな」

「え？」

ケンスケが、眼鏡の縁をキラリと光らせる。

「いや、何でもなし。そーかあ。デマかあ。それにしてもさ、綾波の笑ったとこって、未だに見たことないんだよな」

「そーいや、そーやのう。最近天然っぽくなつてとっつきやすうなっただけ、無表情だけは相変わらずやからな」

俺と一緒に行動して、クラスのみんなと話すようになってくると、

人付き合いに不慣れな彼女の初々しい反応は、人の目にはその容姿も相まつてとても可愛らしく映る。そんな雰囲気、また他人との垣根を取り払っていくようであった。

ただ、それでも表情はあまり動かない。まあ、短期間でいきなり表情豊かになったとしたら、それはそれで怖い。

「だろ？なあシンジ、ネルフでは、綾波ってどんな感じなんだ？」

「ん？別にいつもと変わらないよ」

「シンジも、綾波の笑顔って見たことないのか？」

これは返答が難しい。見たことがある、と言えば、シンジの前でだけ笑顔を見せるのだ、などとかかわれるのは目に見えているし、かと言って見たことがない、と言えば、レイの鉄面皮的なイメージを強めることになる。

「うーん……まあ、見たことはあるよ」

ちよつと逡巡した挙句、そう答えた。

「ほう、さすがやな」

「やっぱ、笑顔ってのは気を許した相手にしか見せないもんだからなあ」

「ま、一緒にドンパチやってれば、それなりに交流もあるからな」
月並みなごまかし。

「で？どうなんだ？」

「どうって？」

「綾波の笑顔だよ」

「ケンスケ……やな笑顔だなあ」

ニヤニヤ笑うケンスケにジト目を向けるが、効果なし。

「まあまあ、で？どうだったんや？」

「どうって……まあ……綺麗だったな、うん。透き通るような、つつか」

「ほう」

「へえ」

俺の言葉を聞いたとたん、トウジとケンスケがにやあ、と笑う。

「な、何だよ？」

そう言った後、二人の視線が俺の後ろに向けられているのに気がついた。

「だってよ、綾波」

「いつ？」

ケンスケの言葉に、慌てて後ろを振り向くと、そこには耳まで真っ赤にしたレイが、俯いていた。

「おー、赤うなっとなる赤うなっとなる。こんな綾波も初めて見るのう」
トウジが冷やかす。ケンスケは、いつの間にかカメラを取り出し、照れたレイを撮りまくっている。

「やめるよ二人とも……あ」

俺の視線が二人の背後に流れる。背後から迫る殺気に、今度はトウジとケンスケが振り向く番だった。

「あなたたち……」

怒りの籠った声。われらが学級委員長にして乙女の味方、洞木ヒカリ嬢だ。

「女の子いじめるなんてっ！サイテーよっ！」

「ま、待って待っていいんちよ。ワシらは別にいじめてなんぞ……」

「問答無用ッ！」

「イテテテ、耳をつかむなっ！」

二人は、洞木さんに引きずられていった。南無。

その様子を、心の中で手を合わせつつ見送った後、慌てて振り返る。レイはまだ俯いていた。

「レイ、……その、あんまり気にするなよ」

「……気にしてないわ」

「そ、そう」

「……その、嬉しかった、から……」

レイは、そう言って顔を上げると、ちょっと控えめに、微笑んで見せた。

と、周囲のざわつきが、一瞬静かになる。

「あ……綾波さんが笑った……」

「すげえ可愛かったぞ、おい」

「ああ、あんな顔して笑うんだ……」

あちこちからヒソヒソ話が聞こえてきた。それを聞いて困惑するレイ。

「私が笑うと、みんな様子がヘン。私の笑顔って、ヘンなの？」

「い、いや、そういうワケじゃないよ、きっと。普段余り笑わないから、珍しいんじゃないの？」

「そう……笑う必要がなかったから」

「必要がなかった？」

「嬉しいこと、あまりなかったから」

それを聞いて、また憐憫の思いが膨らんでくる。

「でも、シンジ君に誉められると、嬉しい」

「そ、そう……ありがとう」

「なぜ、私にお礼を言うの？」

「いや、俺もなんか嬉しかったから」

「そう」

再び微笑むレイ。

うっ、周囲の視線が……痛い……痛いぞう……

レイの笑顔を見て、ほんわかしたのもつかの間、俺は背中にじっとりと冷や汗をかく。

「さ、さあ、そろそろホームルームが始まるから、席に戻ろう」

「うん」

本当のところ、ケンスケの言った噂話と似たようなやりとりは、確かにあったのだ。レイが笑顔を見せてくれるようになったのは、それからだ。もちろん、ケイジのような衆人環視の下ではない。着替えた後のブリーフィングルーム、ミサトさんとレイ、その他少数のスタッフしか目撃者はいなかったはず。

それがなぜ、あんな噂話になって広がったのか……と考えたとき、

半ばオツサンと化した某作戦部長のニヤケ顔が脳裏に浮かび、ため息が出た。

それはともかく、その一件以来、レイは一段と俺にくつついて歩くようになった。休み時間にも、気がつくとな俺の後ろに佇んでいる。基本的に存在感の希薄な子だから、ちよつと怖い。まあ、それなりに俺に対して好意を持ってくれてるようだし、レイのようなかわい子であれば、これは「喜ぶべき状況」というやつなのだろう。

自宅で、ノート型端末を広げてウェブを見て回っている。

二十世紀末に形成されたインターネットは、セカンドインパクトによって大部分のインフラを破壊され、事実上停止した。その後、地軸の転倒によって極地となったアメリカに替わり、中国、イギリス、フランス、ロシア、日本の各地が中心となってインフラを復活させ、インターネットに似た世界的ネットワークを再構築した。

などというウンチクは、元の世界にいたころプログラマーをやっていた俺の、職業的興味から仕入れた知識であるが、ただのユーザーにはそんな話は全く関係ない。見た目上、俺がいた2001年とまったく同じような仕組みが、そこにあつた。

「SEELE」や「人類補完計画」などというキーワードでサーチをかけることも考えたが、誰でも見られるようなところにまともな情報があるとも思えない。それどころか、考えてみればこの端末の通信記録も、第三新東京市の回線を利用して以上、ネルフの生体スーパーコンピュータ「マギ」によって監視されている可能性は充分にある。下手なことは控えた方が無難だろう。

というわけで、今見ているのは他愛もない芸能情報だったりする。

自宅での過ごし方は、元の世界とあんまり変わらんなあ。

などと考えていると、不意にインタフォンが鳴った。

受話器を取ると、女性の声が聞こえた。

『はあくい、シンちゃん、ミ・サ・ト・よん』

軽い頭痛を覚えながら出迎えると、

「えへへ、今日もご馳走になりましたわ」

などと悪びれもせずと言う。そう、この二十九歳の作戦部長は、

部下の、しかも十四歳の男子の家に、夕飯をたかりに来るのである。

これが初めてではない。最近は、週二日ほどのペースである。

「ったく……今日はビール二缶までですよ」

「ええ〜」

「ええ〜じゃないでしょうっ!」

「やあねえシンちゃん、固いこと言ってるよモテないわよ」

この調子である。俺に「一緒に住もう」と誘ったのは、家事をやらせるためだったんじゃないかと思えてくる。などと考えつつ、無遠慮にリビングの椅子に座るミサトさんにビール缶を差し出す俺も、いい加減お人よしだなあと思う。

「んふふ、ありがと」

「はあ……」

俺は、これ見よがしに盛大な溜め息をついてみた。それが何の効果もないことを確認すると、もう一つ溜め息をついて、キッチンに入った。

「……んで、こういう仕掛けをすればいいと思うんです」

「ふーん。でも切断できないとツラくない？」

「ソニックグレイブってやつありましたよね？ドイツで開発してたやつ。あれの穂先を応用すればどうですか？」

「あれだって、刃状だから切断できるのよ。この武器じゃ刃を付けるわけにはいかないでしょう」

飯を食ってビールをかつくくらいながら、エヴァの新武装の話なぞ

してみたりする。

ミサトさんとこうして話すときは、大体仕事の話ばかりしている。始めは、飯をたかりに来るのを牽制するための嫌がらせのつもりであったが、その効果は余りないようだった。そうしているうちに、エヴァの運用や作戦上の相談ごとをするための、定例ミーティングのようになってしまった。

「……なるほどね。じゃ、あとでレポートに纏めて私にちょうだい。簡単でいいから。リッコにも渡して検討してみるわ」

そう言って、トンカツの最後の一切れを口に放りこむミサトさん。「むぐむぐむぐ……ん、と、ご馳走様。相変わらずシンジ君の料理は最高ねえ」

「はいはい、お粗末様でした、と」

俺も味噌汁の最後の一口を飲み干し、食器をキッチンに運びはじめる。

「まあったくねえ」

そんな俺を見ていたミサトさんが、不意に、溜め息交じりに言う。「何ですか？」

「こんな夜に女を連れこんで、美味しいご飯ご馳走して。フツーなら即オツケーってシチュエーションよ」

「何が即オツケーなんだか。自分の半分も歳のいつてない子供に何を期待してるんですか」

オッサン臭くからかう二十九歳独身女に、俺はいろんな意味で溜息をついた。黙ってりゃ美人なのにねえ。

「うっさいわねっ。まったく、冷静でつまんない。マセた中学生もいたもんだわ」

「今時、みんなこんなもんじゃないですか？」

「自分のビールをストックしてる中学生が普通なの？何だか嫌過ぎるわ、それ……」

「失礼ですね……はいお茶」

「ありがとう」

二人して、ずらずと煎茶をすすりながら、和む。

「ところでシンジ君」

「はい？」

ミサトさんは、さっきの「エヴァ運用ミーティング」以上の真剣な眼差しである。

「レイのことなんだけど」

「レイが、何か？」

ミサトさんは一瞬言いよどんで、続ける。

「あのね、レイについて知ってること、聞いたこと、なんでもいいから教えてほしいの」

「何ascaそりゃ？チルドレンの監督責任者って、ミサトさんなんですよ？？」

そう問い返すと、少し悲しそうな顔になった。

「レイは違うのよ。あの子に関する責任者は、碇司令。彼女に関しては、最低限の健康状態とエヴァとのシンクロ関係の情報以外は私には上がってこないのよ」

「はあ……」

まあ知ってはいたが。しかし、ミサトさんは俺が思っていたより不満なようだ。

「あの子に関する過去の情報は、マジにもほとんどなかったわ。プロテクトされてるとかじゃないのよ。まるで、始めからそんなもの存在しないみたい」

「ふーん。なんでそれを知りたいと思うんです？」

「それは……その、作戦指揮の参考に、よ」

実際にはそれだけじゃないのが、表情からわかる。基本的に嘘の下手な人らしい。

「なら、そう言って、司令に訊くのが筋でしょ。俺の知ってることなんて、彼女の本の趣味とか好きな紅茶の銘柄とか、そんな話くらいですよ」

もちろん「シンジが知っているはずのない情報」も持っているが、

言ったところで怪しまれるだけだろう。

「そう……シンジ君ならレイといい感じだから、何か知ってると思っただけだなあ」

少しだけニヤケ顔になるミサトさん。

「そういうんじゃないですけど……そうですね。そう思うのなら、レイという話してあげてくれませんか？」

「へ？」

俺の申し出に、ミサトさんは意外そうな顔で俺を見つめる。

「これは推測ですけどね……彼女はこれまで、人と接する機会が極端に少なかったんじゃないかと思うんですよ。だから感情の表し方が判らないし、そもそも自分の感情もよく判らないんじゃないかとだから、あの子には、何気ない人との会話が大切だと思うんです」

「ふーん、なるほど、だから学校でも、彼女を連れまわしてるわけね」

「あ、いや、あれは、彼女の方からついてくるってのもあるんですけどね。まあとにかく、いろいろ話してみてください。はじめはとっつきづらいかも知れませんが」

「うーん……そうねえ」

「まあ、司令の秘蔵っ子ともなればなかなか距離感難しいかもしれませんが、部下としてでも子供としてでもいいんで、普通に接してあげてください。そうすればきっと、彼女も心を開いて、いろいろ話してくれるかも知れませんが」

しばし考え込んで、

「……わかったわ。努力してみる。それにしても、シンジ君にそんなに心配してもらって、レイがちよっと羨ましいわね」

またニヤケ顔に戻る。

「まあ、同僚だし、それに何か他人のような気がしないんですよ、彼女は」

異父兄妹みたいなもんだからなあ……と心でつぶやく。

「ふーん……あ、そろそろ帰るわ。お邪魔したわね」

「そうですね？それじゃまた……」
そして、ミサトさんは帰っていった。

ミサトさんが、レイに興味を持ち始めた。

アニメや漫画ではなかった事だ。アニメのミサトは、シンジやアスカにちよっかいを出す一方、レイはいつも敬遠していた感がある。単純にエヴァのパイロットとして、部下として、綾波レイと言う人物に興味を持ったのか。それとも、加持リョウジも来ていないのに、早くもネルフの秘密を掴むために動きはじめたのか。

前者ならいい傾向だが、後者ならば危険だ。ミサトさんは、ネルフの幹部なのに一人だけ真相を教えられていない。トラウマ故の視野狭窄から、ゲンドウにいいように利用されているのだろうか、早い時期に真実に近づけば、下手すれば殺されるのではないか。

どうしたものか……

何にせよ、確定情報をもっと欲しいな。

やはり一度、ゲンドウと話をしなきゃいけない。改めて決意した。

第十話 誰がために命を捧ぐ

「ジェット・アローン、ですか」

ミサトさんの執務室。パンフを読む俺と、椅子にだらーっと体を預けてコーヒーを飲むミサトさんがいる。

「そ。略してJ.A。重工共だかが開発した、対使徒用の機動兵器なんですって」

アニメにも確かに登場した、ネルフとは無関係の組織が開発した兵器である。その公式発表会が一週間後にあるということで、ネルフにその招待状とパンフレットが送付されてきたのだった。

外部からの動力供給がなくなるとも百五十時間以上稼動し、遠隔操作が可能。操作には訓練を重ねたオペレータが当たることができ、当然ながら精神汚染などの問題もない……と長所だけ並べれば、エヴァンゲリオンへの対抗意識がひしひしと感じられてくる。まあ、十歳の子供しか操縦できず、外装の受ける衝撃が、痛覚としてパイロットにフィードバックされる、などという兵器もはっきり言ってまともではないし、安全な代用品ができるのなら、素晴らしいことだろう。

しかし、このJ.Aというヤツは、エヴァに輪をかけてしょうもない代物だった。

ただでさえ不安定な二足歩行型の上に、重心が上半身に偏っている。バランスが極めて悪く、遠隔操作のために、機敏な動作は期待できない。その上、自慢の長時間自律稼動のための動力は、原子炉と蒸気タービンを内蔵することで賄っているのだ。ガンダムの世界じゃあるまいし、『俺』がいた二〇〇一年の地球と大差ない原子力技術で、たかだか十メートルちよつとの構造物の中に原子炉を押し込んでいるのだ。

小型の原子力発電所を二足歩行をさせ、あまつさえ殴り合いをさせようというのである。正気の沙汰とは思えない。

「はあ……なんつーか、凄いですね。いろんな意味で……」

この限りなくお間抜けな設計には溜め息しか出てこない。

「信じられないわよね、まったく。こっちゃん必死だったのに。こんな危ないモンに注ぎ込む金があるんなら、こっちに回してほしいわ」

ミサトさんは、憎々しげにぼやく。

「あーあ、もうちょっとまともなモノ作ってくれればなあ。俺もちよつとは楽になれるかも知れないのに」

何の気なしに言った俺のその台詞に、ミサトさんは顔を顰めた。

「それはそれで、エヴァの出番がなくなっちゃうかも知れないわよ？」

なんだろう。俺が好き好んでヒーローやってるとでも思ってるのかな。

「俺は別に、エヴァだろうがJ Aだろうが、何だっでもいいですよ。

それに、本当にエヴァに匹敵する強さなら、素人に毛が生えた程度の俺より、ちゃんとした訓練を受けたプロの大人が戦った方がマシでしょ？」

それを聞いたミサトさんは、少しだけ険しい顔をしたが、やがてふう、と息を吐き、

「そーよね。シンジ君はそういう人よね。……でも、やる気なさそうな割には、ずいふんと体を張るじゃない？」

「今のところ、俺がやるのが一番効率がいいってだけですよ」

「それだけ？」

ミサトさんの追及に、俺は少し言いよんどんで、

「……知ってる誰かが傷つくことで、罪悪感に苛まれるよりは、自分がどうにかなった方がマシですから」

そう答えた。

「そういう考えはよくないわ。これからは零号機も出られるし、もうすぐ式号機もドイツから来るから。これからの戦いは、チームワークが重要になってくるのよ。今までみたいに、へたに自己犠牲の精神を発揮されたら、レイやもう一人にも影響するんだからね」

予想通りに窘められた。面倒だから話題を逸らそう。

「わかってますよ……ところで、その発表会って、ネルフからは誰か出席するんですか？」

「ええ。E計画担当博士に作戦部長、それにエヴァンゲリオン初号機パイロットよ」

「へ？俺も？」

「そうよん」

「いいんですか？ただでさえ、子供をパイロットにしてるって、ネルフへの風当たりがキツいんでしょ？」

「しょうがないじゃない。司令が連れて行けって言っただから。あ、初号機も持っていくからね」

「はあ」

アニメでは確か、ゲンドウが加持リョウジを使って、JAの制御プログラムを書き換えて暴走を演出した。エヴァの代用となりうるものの評判を落とすためだ。

初号機は恐らく、暴走したJAを一時的に足止めするための備えだろう。……てことは、やっぱ、やるんだらうなあ。

あんなもん、ほっといても学者やマスコミの失笑を買うだけだと思っただけだ。

説明会は、JA開発担当者トリツコさんの嫌味合戦が繰り広げられたり、ネルフへ向けられる陰湿な悪意にミサトさんがキレかかったりしたが、概ね滞りなく終わった。

で、いよいよJAのデモンストレーションが始まる。

なんとというか……こうして実物を見ると、冗談としか思えないデザインである。

巨大で不恰好なロボットが、サブマシンガンのような火器を持つて的を撃ちぬいたり、エヴァそっくりの風船を叩き割ったりしてい

る。動きは鈍重だ。百八十度転回に五秒近くかかっている。第三使徒あたりに周りを走られたら、追い切れなくて転ぶなあ、ありゃ。

「アレで使徒をどうこうしようって言うのかしらねえ。ATフィールド以前の問題だわ」

リッコさんが言う。

「まったく。あれ一台作る金で、戦闘機やら戦車を大量に配備した方がいいっすね」

「そうね、その方が困くらいには役に立つもんね」

俺とミサトさんもうなずく。

その間も、不毛なデモは続く。

『……以上で、本日予定してありましたデモンストレーションは全て終了です』

おや？結局何も起こらなかったな。

騒動はないに越したことはないが、それなら何故、俺やエヴァを……？と、疑問に思った瞬間、予想外のアナウンスが会場に響いた。『しかし、本日はネルフ様のご厚意により、エヴァンゲリオン初号機との、実戦形式のデモンストレーションを急遽行うこととなりました』

「……はあ？」

「ちょ、ちょっと、どういふことよ？」

「どうもごつも。そういふことよ」

困惑する俺とミサトさんに、リッコさんはしかし、悪戯っぽい笑みを浮かべてそう言った。

「リッコあんた、知ってたの？」

「それはそうよ。これを司令に進言したのは、私だもの」

え、リッコさんが？

「何のためにそんな……」

「これからの戦いに、あんなの出しゃばられちゃ迷惑でしょう？

格の違いを見せてあげるのよ」

おっと、この人こんなに攻撃的なキャラだったっけ？

「なに？シンジ君、自信ないとも言うつもり？」

「いや、負けはしないと思いますけど……原子炉と殴り合いなんてしたくないですよ」

体全体で「嫌だ」と表現するも効果なく、リツコさんは少しだけ考えて、やがて言った。

「まあ、その辺は丁寧に扱ってあげてね。手足は壊してもいいそうだから」

ダメだこりゃ。やるしかないか……

「ちよつとリツコ、なんで私に一言もないわけ？シンジ君の扱いは私の管轄よ」

「私が話すことでもないでしょ。文句は司令に言ってね。そんなことより、今はちゃんと指揮しなさいよ」

悔しそくに歯噛みするミサトさん。あーあ、今夜あたり荒れそうだなあ。

『シンジ君っ、こうなったら構わないから、ギッタングリタンにしてやりなさいっ！』

指揮になっていない指揮を受け、初号機がJ Aと対峙する。

今回は外部電源がないため、内部電源の持つ五分間でケリをつけなくてはならない。

つーてもまあ、コレに五分もかかるとは思えないけど、さ。

さっさと終わらそう。

『はじめー！』

ドンッ！

試合開始の合図と同時に地面を蹴り、俺の乗る初号機は、最大戦

速でJ Aに突進する。

身構えるJ A。

しかし、俺は相手の目前で進路を変え、相手の背後に回り、相手の右腕を掴む。……やっぱ全然反応できないんでやんの。

グシャッ！

蛇腹パイプ状の腕を一息に握りつぶした。

J Aは握り潰された右腕を全く意に介さず、上半身をひねって、左腕で殴りかかってくる。流石に、関節の構造は人とは違うようで、左腕は妙な方向に曲がってたりするが……

左肘でブロックする。お、結構重い。パワーはあるようだ。だが俺は、殴ってきた腕を悠々と掴む。やはり遅い。

メキメキメキッ！

そのまま左腕も握りつぶす。両腕を失ったJ Aは、大慌てで距離をとった。

「もう、やめましょうよう」

両腕を失ってもまだやるか？ できるだけ衝撃を与えないように戦うのも、しんどいんだけどなあ……

『まだよ。ちゃんと動きを止めるまで気を抜かないで』

「って言っても……」

と、J Aは重心を低くとり、少し前傾姿勢になった。

って、まさか……

ダン、ダン、ダン、ダン！

テンポの遅い足音があたりに響き渡る。なんと、J Aが初号機に向けて突進しだしたのだ。

『た、たいあたりい〜！？』

ミサトさんが素っ頓狂な声を上げる。

原子炉で体当たり！？ 正気かよッ！？

俺はできるだけ衝撃を吸収できるように、全身でJ Aを抱きとめる。轟音が一带に響き渡る。お、重い……

なおもJ Aは、走り続けようと足掻く。

「み、ミサトさんっ！コイツのオペレーター、止めてください！」

『今、リツコが説得してる……え、何？制御不能！？』

「なにいいいいい！！？」

こんなところで暴走だと。例の陰謀か？たとえ陰謀だとしても、アニメのように勝手に停止するとは限らないか……

とりあえず、動きを止めなければ。

J Aを抱えながらプログレッシブ・ナイフを取り出し、いまだ地面を蹴り続ける脚に突き立てる。

程なくして、走る原子炉はその可動部分を失った。

『ソイツ、制御棒の制御ができなくなってるわ。そのまま放っておくと良くて炉心溶融、悪くすると爆発するわよ』

ンなこと言われたって、どうすりゃいいんだ。

『もう時間がないわ、シンジ君、ソイツから離れて、ATフィールドを最大出力で展開するのよ。ATフィールドなら放射線も遮断できるわ』

「……それじゃ、俺は助かってても、そちらが……」

『いずれそうなるわ。アナタだけでも生きなさい！』

俺は何も答えられなかった。どうすればいいんだ！

数瞬考えて、思いついたのは、単純で頭の悪い対処方法だった。

俺はダルマ状態のJ Aを抱きかかえ、周囲に内向きのATフィールドを張る。爆発も放射性物質も、エヴァとATフィールドで封じ込めるのだ。最悪、爆発による飛散さえ封じ込めれば、ホテルにいる人達はそれほど被曝せずに避難できるだろう。

『シンジ君！？シンジ君、やめなさい！！』

モニタの向こうで、ミサトさんが叫ぶ。反論しようとしたとき、全てのモニタがブラックアウトした。

「しまった！」

活動限界だ。内部電源で動いていたのを忘れてた！

「……何やってんだ、俺はっ！」

俺は、悔しさの余り、操縦桿に拳を叩きつけた。
結局、誰も助けられず、俺も死ぬわけだ。間抜けな最期だなあ……
まさかこんなどうでもいいキャラで死ぬとは……
「こいつは……悔いの残る死に方だな……レイ、ごめん……」
俺は、目を閉じた。

『……シンジ君？シンジ君、大丈夫？』
ん？

何も起こらない。予備電源で動く通信機から、ミサトさんの涙声
が聞こえてきた。

「あ、あれ？一体……何が？」

『突然、JAが停止信号を受け付けて……原子炉は停止したわ』

ミサトさんの声に替わって、冷静なりツコさんの声が聞こえた。

「……ほ、本当ですか？」

『ええ』

「……はあああああ」

俺は安堵のため、深い深い溜め息をついた。

エヴァから降りた俺を出迎えたのは……ミサトさんのビンタだっ
た。

「アンタねえっ！自己犠牲はやめなさいって言ったでしょ！」

張られた頬を押さえて呆然とする俺の肩を掴み、ミサトさんは激
昂する。

「そんな形で生かされたってねえ、こっちは嬉しくもなんともない
のよー！」

「……俺だって、みんなを見殺しにして、まともに生きられるわけ

ないでしょう?」

どちらも間違っている。頭で理解しつつ、それでも反論せずには
いられなかった。

「…っ」

さらに何かを続けようとしたミサトさんだったが、それを飲み込
み、どこかへ去っていった。

リッコさんは何も言わず、無表情でこちらを睨みつけるだけだっ
た。

帰った後、ミサトさんから一部始終を聞かされたレイにも、力い
っぱいはたかれたのは、言うまでもない。

第十一話 ドイツから来た少女

俺とミサトさんは、太平洋上を飛行する輸送機に揺られている。ドイツから日本へ輸送中のエヴァンゲリオン弐号機と、その専属パイロットを出迎えるためである。

「わざわざ護衛を付けて運んでくるって言うてるのに、こんな中途半端な位置まで出迎えなんて、司令は何を考えているのかしら」

ぼーっと外を眺めていたミサトさんは、そのまま誰にもなく呟く。

「さあ……」

「やっぱり、何か理由があるのかしらね」

「理由？」

思わずオウム返しに聞き返すと、ミサトさんはこちらに視線を向けて続けた。

「だからね、弐号機や、それを護衛する艦隊に、私やシンジ君を必要とするような事態が起こる。それを司令が予測してるのかな……」

「少く、驚いた。」

アニメの展開から考えても、恐らくミサトさんの言う通りだろう。彼女ならそれぐらいの推察もできるだろう。ただ、それを俺に漏らした、という事に、俺は驚いていた。

「何よ、ハトが豆鉄砲食らったような顔しちゃって」

「え、あ、いや……ミサトさんが珍しく理論的にものを考えてたんで、びつくりしました」

「……失礼ね、それじゃ私がバカみたいじゃないの」

「どっちかって言うと、直感で動くタイプだと思ってたもんで」

「フオローになってないわよ。……否定はしないけど」

さも可笑しそうに、クスクスと笑うミサトさん。そのわざとらしさが、未だ彼女の意識の大部分が思考の底に浸っていることを窺わ

せた。

眼下に艦隊が見えてきた。国連海軍所属、太平洋艦隊。戦艦、空母、駆逐艦、その他もろもろ含めて30隻近くの大艦隊だ。

「ふーん……なかなか壮観ですねえ」

これだけの艦隊が、たかだか荷物一機を輸送するために動員されている。エヴァの重要性について、詳細を知らされていない国連軍の兵士達は、さぞかし自分の仕事と存在意義に疑問を感じていることだろう。同情を禁じえない。

「ほとんどが、セカンドインパクト以前の老朽艦よ」

「モノを大切に使うのはいいことじゃないですか」

いささかピント外れの答えに、ミサトさんは苦笑を漏らした。

「へロウ、ミサト！」

へりから降りると、タラップの上から声が聞こえた。声が聞こえた方向を向くと、女の子が仁王立ちしている。

輝くブロンド・ヘアをたなびかせたその少女は、14歳にしてはメリハリの効いたスタイルをしていた。顔は、欧米系らしく彫りの深い顔に、日本人らしい、くりっとした大きな目をしている。そしてサファイア・ブルーの瞳。そこら辺のアイドルではちよっと太刀打ちできないくらいにの美少女であった。

「アスカ、久しぶり！」

ミサトさんが手を振って答える。

……少女の服装は、黄色い薄手のワンピースである。そんな格好で、海風吹きすさぶ甲板上に仁王立ちしたら……

ぶわあっ。

お約束というか何というか、少女のスカートが思いっきりめくれあがった。

「……っ！」

彼女は顔を赤く染め上げると、凄い勢いで、しかし音もなく俺の近くに歩み寄った。そして。

「うわっ」

少女の右手が飛んできた。そこまでは予測できたから、難なくよけることができた……が、初弾をかわして油断したのがまずかった。べきっ！

「あがつ！」

少女はビンタの勢いを殺さず、ローキックを放ったのだ。第二弾は脛に命中し、俺は余りの痛みに、脛を押さえてしゃがみこむ。

「いつっ……何すんだよいきなり……」

「ふん！見物料よ。これでも安いくらいだわ」

そう言い放つと、少女はミサトさんの方に向き直った。

「げ、元気そうね、アスカ」

「ええ。この通りね。ところで、サードチルドレンって、もしかしてコイツ？」

「そう、碇シンジ君よ。……シンジ君、大丈夫？」

「……ああ、大丈夫です」

ミサトさんは手を貸そうとしたが、俺はそれを断って自力でなんとか立ち上がる。

「紹介するわね。この子が……」

「エヴァンゲリオン式号機パイロット、セカンドチルドレン、惣流・アスカ・ラングレーよ」

ミサトさんの紹介を遮って、アスカが胸を張りつつ自己紹介する。そして、俺を品定めするようにじろじろと眺めると……

「……何だかサエないヤツねえ」

いきなり失礼なことを言う。

だがその目は、見下しているのとも、ライバル意識とも、ましてや冗談を言っているのとも違う。

「フンッ！ちよっとぐらい実戦経験があるからって、いい気になっ
てんじゃないわよ。アタシは何年もエヴァのパイロットとして訓練

してきたエリート。ぽつと出のアンタなんか、いつまでもデカい面させとかないんだから！」

そこにあるのは、憎悪。

思えば、こんな風に人にはつきりと憎まれたことはない。憎まれたことを認識したことがない、と言うべきか。

これも、人に深く関わらないように、生きてきたからなのだろう。それは幸運だったのだろうか、それとも不幸だったのだろうか。

「……あんまり突つかかるなよ。戦う相手は俺じゃないぞ」

感傷を押し殺し、おどけるように言ってみせた。

「うっさいわね、わかってるわよっ！」

アスカはそう言い捨てると、踵を返して立ち去った。

「うーん……嫌われちゃいましたねえ」

「まあ、これからもしよっちゅう顔合わせる事になるんだし……気長に付き合ったら？」

ミサトさんが人事のように言う。

「あの……ミサトさん、俺たちを指揮する立場だって事、忘れてません？」

俺のツッコミに、作戦部長は難しい顔をして黙ってしまった。

艦内の食堂で腹ごしらえをした後、ミサトさんは艦隊司令に用事があるからと、どこかへ行ってしまった。俺はすることもなく、ぼーっとコーヒーをすすりつつ、先ほど出会った少女のことを考えていた。

惣流・アスカ・ラングレー。

13歳で大学を卒業した天才少女。何事も一番でなければ気の済まない極度の負けず嫌い。人類を守るエヴァンゲリオンのパイロット

トであること、それを誰よりも誇りとする少女。妄執のあまり、シンジにシンクロ率を抜かれ、使徒の精神攻撃によってエヴァにシンクロできなくなったとき、全てを拒絶して心を壊してしまった。

それが、アニメに出てきた「アスカ」というキャラクター。

さつき出会ったアスカが同じ過去を背負っているのかどうか、確たることは言えないが、さつきの憎しみをこめた眼差しから推測するに、やはりエヴァにそれなりの執着があるのだろう。

客観的に見れば、今の俺は、アニメの碇シンジよりもパイロットとしては優秀と言える。シンクロ率は言うに及ばず、戦闘についても、3体の使徒を全て単独で殲滅し、作戦立案にまで参加している。もし彼女がこれまでの戦闘記録を読んでいたなら、それは彼女の危機感を大いに煽ることになっただろう。

彼女にとつて、自らの唯一の存在意義を覆しかねない存在。それが、サードCHILDREN、碇シンジなのだ。

だが、俺はそこで思考を打ち切ることにした。彼女の本当の心情が、アニメのものと同じという確証はない。確証のない話を元にして彼女という人物を捉えたところで、それは都合の言い妄想と変わらない。

俺は俺として、彼女に接しなければならぬ。余計な先入観は、邪魔になるだけだろう。

「碇シンジくんかい？」

不意に呼びかけられ、その方向に視線を向けると、長髪を後ろで結った、不精ヒゲの男が立っていた。そういえば、この男もここで初登場だったか。

「あなたは？」

「加持リョウジ。セカンドCHILDRENのボディーガードさ」

口の片端を吊り上げてニヒルな笑いを浮かべたその男は、自己紹

介すると、俺の向かいに座った。

「一人かい？」

「ええ」

「保護者はどうした？」

「艦隊司令に話付けてくる、って肩いからせてどっかいったよ。多分、旗艦じゃないですか？」

すると加持さんは、さもおかしそうにクスクスと笑う。

「相変わらずみたいだな、葛城も」

「ミサトさんをご存知なんですか？」

「ああ……昔ちよつとな」

「もしかして、ミサトさんの元カレとか」

「ほう」

よく考えると、根拠薄弱な一方的極まりない決め付けであったが、言われた男は、面白い、といった感じの顔になった。

「なかなか鋭いね、シンジ君」

……まあ、アニメではそうだったから、言ってみただけなんだが。

「冗談で言っただけなんですかね」

肩を竦めて見せる。

そして、コーヒーをすすった後、少し考えて、言った。

「惣流さんとは、よく話すんですか？」

「ん？まあな。長くボディガードやってるからな」

「……どうも俺、彼女に恨まれてるようなんですけど……今日初対面だし、原因が皆目見当つかないんですけどね。僕はできれば仲良くやっていきたいんですけど、なんか、知りませんか？」

「恨まれてる？そうか……」

加持さんは顎をなでながら、少し悲しそうなお目をして思案している。

「何かあるんですね？」

「ふむ……まあ、アスカはエヴァのパイロットであることにプライドを持つてるからな。それも、いつもナンバーワンでないと気の済

まない夕子だ。　すでに3体もの使徒を独力で倒してるサードチルドレンがいれば、尻に火もつくだろうな」

「けど、単なるライバル意識には見えませんでしたけど」

「それは……俺からはちよつと言えんが、まあ察してくれ」

加持さんの目の、悲しみの色が濃くなる。それは、エヴァに執着せざるを得ないような何か、彼女にある、ということだろう。

「なるほど……^{チルドレン}適格者というのはみんな、そんな風に育てられるもんなんですか？」

それを聞いた加持さんは、怪訝そうな顔をする。

「どういうことだい？」

「あ、えーと、レイ……ファーストチルドレンも、エヴァに執着するように育てられたみたいですからね。惣流さんもそうなのかな、って思っただけです」

「君はどうなんだい？」

「俺はひねくれ者ですから」

それを聞いた加持さんは、くつくくつ、と笑う。

「何か、おかしいこと言いました？」

「くつくくつ……いや、すまん。ま、アスカと仲良くしてやってくれよ。これまでも、あまり同年代の友達はいないようだったからな」

長年、少女にとって数少ない理解者だったのだろうポディーガーは、頭を下げた。

「そりゃもちろん、そのつもりですよ」

その時、

「あ、加持さん！」

少女の声が聞こえた。パタパタと走って寄って来ると、加持さんの腕にまとわりつく。

「ようアスカ、飯かい？」

「何言ってるんですかあ、加持さんを探してたんですよ」

さっきとはまるで違う、媚びるような口調で加持さんに甘えるア

スカ。

「一緒にランチしませんか？」

「悪いね、俺はちよつと用事があるんだ。代わりといつちやなんだが、シンジ君と親交を深めておいたらどうだい？」

すると、俺から明らかにワザと視線を外していた少女は、その視線をこつちに向け……思いつきり睨んできた。少しビビる俺。その隙に、加持さんは自分の腕をさつ、と脱出させ、そのまま背を向けた。

「じゃ、失礼」

「あ、加持さあん」

アスカが呼びとめるのに片手を上げるだけで応え、加持さんは去っていった。目当ての男に立ち去られたアスカは、こつちを再び睨みつけ、「ふんっ」と踵を返すと、出口の方へ歩き出し……すぐに歩みを止めて、振り向いた。

「サード！ちよつと付き合いなさい！」

空母「オセロー」。

その広大な飛行甲板の大部分を占有して横たわるのは、赤いエヴァンゲリオンだった。

「これが、エヴァンゲリオン式号機よっ！」

式号機の胸部装甲の上に仁王立ちで、誇らしげに言うアスカ。……だから、高いところで仁王立ちすると見えるっつてば。

「純粹に戦闘用に作られた、初めての制式タイププロダクションのエヴァンゲリオンよ」

それにも構わず、アスカのプレゼンテーションは続く。

「所詮、零号機や初号機は試作機プロトタイプと実験機テストタイプ。式号機とはデキがちがうのよ。ポッと出のアンタなんか簡単にシンクロできるのがいい証拠だわっ！」

フツー、プロダクションタイプってのは使いやすいように作るもんだがなあ。

とは言うものの、実際、零号機や初号機と式号機以降は、明らかにモノが違う。あのと碇ユイから聞いたところによると、彼女が開発・研究していたのは零号機、初号機だけで、式号機は基礎理論のみ共有しただけの、全くの別物らしい。日本とドイツで、別々の「E計画」が進んでいたということだ。

式号機は、セカンドインパクトを起こした「光の巨人」アダムのクローン。それに対し、零号機と初号機は、箱根の地下、ジオフロントに埋まっていた第二使徒リリスのクローンである。そう考えれば、式号機はアダムベース・エヴァンゲリオンの試作機と言えなくもない。

「ちよつとアンタっ！聞いてるの!？」

怒鳴り声で、思索の海から引っ張り上げられた。

「ん、ああ、聞いてるよ」

「だったら、なんか言いなさいよ！」

「ああ、……式号機って赤いんだねえ」

特に言うべきこともなかったので、思いつくことをそのまま言ったのだが、彼女のお気には召さなかったらしい。顔がさらに険しくなる。

「……っ、アンタねえっ！バカにしてるの!？」

ドカーン！

突然、空母を衝撃が襲った。

「つきやあつ！」

不安定なエヴァの胸部に立っていたアスカはバランスを失い、そのまま落下した。4、5メートルの高さである。

「危ねえっ！」

どたんっ！

間一髪で、アスカの落下点に駆け込み、受け止める……が、衝撃を支え切れず、そのまま倒れこんでしまった。

「つつう……惣流さん、大丈夫？怪我はない？」

そう言っつて視線を上に向けた俺は……予想以上に少女の顔が間近にあったため、一瞬固まってしまう。

む、かわいいなあ……

だが、その顔の持ち主はすぐに、がば、と体を起こすと、恐るべき俊敏さで立ちあがった。

「フン、恩を売ったなんて、思わないことね」

そっぽを向いて言う。少し顔が赤い。さすがに照れるか。

「そっ、それより、さっきのは何？」

アスカは船縁へ向かって駆け出す。俺も後を追った。

そこで見たのは、艦隊の船が、轟音と共に次々と沈んでゆく光景だった。

第十二話 海中の祈り

突然、水柱が上がった。ほんの少し遅れて、どおん、という低い音が響いてきた。そして、駆逐艦が一隻、真つ二つになって沈んでいく。次いで二隻目、三隻目。巨大な何かが泳ぎ回り、周囲の軍艦に手当たり次第体当たりを敢行しているらしいことが判った。

「使徒……か？」

「あれが使徒？本物の？」

俺の眩きに、興奮気味に問い直すアスカ。

「こりゃ、ミサトさんに知らせないと」

と言いつつ、俺はアニメでの展開に思いを馳せる。そして、

「……チャーンズ」

などという眩きを聞きつけ、その記憶が現実のものになることを確信した。

「サードっ、行くわよ」

「……行くって、エヴァのところ？」

「そうよっ！アレが使徒なら、エヴァじゃないと倒せないんでしょ？さっさと行くわよっ」

「あ、ちよっと持ってきたいものがあるから、先にエヴァのところに行つてて」

「はあ？ちよ、ちよっと」

俺は、へりに置きっぱなしの荷物を取るため、駆け出した。後ろでアスカがなんか喚いてるが、気にしない。

「お待たせっ……着替えるの早いね、惣流さん」

船縁で別れてから、ものの10分足らずで式号機の元へ辿りついたのだが、アスカはすでに深紅のプラグスーツに着替えていた。

「何やってんのよ、アンタも式号機に乗るのよ。ホラ、さっさとこれ着なさいっ!」

眉毛をキリキリ吊り上げながら、自分が着てるのと同じ女物のスーツを俺に突き出す。

「いらぬよ。自分のあるから」

「はあ?」

持ってきた小ぶりのスポーツバッグを掲げて見せる。

俺はこの事態に備えて、自分のプラグスーツを持ってきていたのだった。

「……アンタ、アタシを差し置いて式号機に乗る気だったんじゃないでしょうね?」

「万ーのための予備ってやつだよ。予備なりに、準備はしとくもんさ」

「じゃ、なんでわざわざここに持ってきたわけ?」

「惣流さんのことだから、『アタシの華麗な操縦をみせつけてやるっ!』なんて考えてるんじゃないか、なんて思ってたさ」

凶星を突かれたのが気味悪かったのか、怪訝そうな顔を向けるアスカ。

「まさか、惣流さんのスーツを着ろって言われるとは思わなかったけどね」

その台詞に、彼女は何故か顔を赤くする。

俺は、華奢な体つきで身長も低めだから、サイズ的にはアスカのでも着られる。が、いかんせん身体ラインに合わせて作られるプラグスーツのデザインは、性別を選ぶ。ついでに言えばスタイルもかなり選ぶ。そういう意味では、14歳とは思えない、整ったメリハリのあるスタイルを持つアスカのプラグスーツ姿は、素晴らしい。

「……何ニヤニヤしてんのよ」

はっ。何を考えてるんだ俺は。

「と、とにかく着替えるからさ、先に乗っててよ」

「……ふん、早くしなさいよ」

そう行つて、アスカはタラップを駆け上がった。いった。

「ちゃちゃつと着替え終わつてタラップを上ると、アスカはエントリープラグのハッチの横で、腰に手を当てて見下ろしてきた。

「遅いつ！」

「乗らないの？」

「アンタが先に乗るのよ」

「は？」

プラグの中は狭い。ただ入るだけなら2、3人入つても問題ないが、パイロット・シートに座するには、一番先に乗らないと入れ替わりが大変である。

「どういふこと？」

「いいからさっさと乗れっ！」

「バシッ！」

困惑する俺は、プラグの中に叩き落された。

「あたた……何すんだよ……お、おい」

後から乗りこんできたアスカによつて、強引にシートに座らされる。

「起動させてみなさいよ」

「ええ？」

「アニメにもなかつた展開。何を考えてるんだ？」

「アンタ、初めてエヴァに乗っていきなりシンクロ率80%も叩き出したそうじゃない。他人の機体でも、起動させるくらい何てことないでしょ？」

「酷く険を感じさせるアスカのニヤつき。

恐らく俺では、式号機を起動させることはできない。エヴァのパイロットが専属制になっているのは、エヴァとパイロットの相性があるからだ。突き詰めれば、コアに込められた魂との相性である。

初号機のコアに、母親である碓ユイの魂が込められているから、俺が操縦することが可能なのだ。アニメの通りならば、弐号機のコアにはアスカの母親の魂が込められているだろう。だからこそアスカがシンクロできるのだ。もっとも本人は気づいていないだろうが。

しかし、外から微かに聞こえる爆音はまだ途切れない。被害が広がる前に、早く何とかしないと。俺は早々に説得を諦め、起動シーケンスを開始した。

「……基本言語を日本語に設定。LC注入開始」

ま、適当なところで泣きを入れれば替わってくれるだろう。LCがプラグ内に満たされる。続いて神経接続を開始する……と、そこで、モニタに「思考ノイズ発生」の赤文字が現れた。

「……惣流さん、もしかしてドイツ語で考えてる？」

ジト目で見つめるが、アスカは意地悪い顔で、ドイツ語らしい言葉をお口にすする。エントリープラグに、正規のパイロット以外の人間が乗った場合、その人間の思考がパイロットとエヴァの神経接続に影響を与える。特に思考言語が違ってしまつと、起動も不可能になる程の大きなノイズとなる。

アスカは、それを故意にやっているのだ。器用と言えば器用だが、これには流石に腹が立ってきた。

「……お前な、次々に船が沈められるって時に、せこい嫌がらせしてんじゃねえよ。ガキかお前は」

言われたアスカは目を見開いた。次いでその表情が怒りに染まつてゆく。

「オマエのくだらない意地のせいで、助けが間に合わず死んでいく人間がいるんだぞ。判ってるのか？」

プライドを大いに傷つけられたであろう少女は、ギリギリと歯を軋ませる。それでも何も言わず、俺を押しつけてシートに座つた。そして、起動シーケンスを再開する。

それ以上の口論が無駄であることを、聡明な彼女の理性は理解したのだらう。だが、その目は怒りに燃えていた。

『起動を中止しろ！許可なくソイツを使うんじゃない！』

式号機が起動したところで通信が入る。旗艦からのようだ。始めは知らない男の声、しかも英語だったが、すぐに聞きなれた声が聞こえた。

『アスカ、聞こえる？いいからそのまま立ち上げて！』

「ミサトさん？」

『シンジ君も乗ってるの？』

「はい」

「んなことよりっ！ミサト、電源用意しといて！」

焦ったようにアスカが叫ぶ。

『「オーヴァー・ザ・レインボウ」の甲板に用意してあるわ』

「オツケイ。そっちまで移動するわね」

通信が切れる。

「いくわよ、アスカ」

アスカの呟きが聞こえ……そして、深紅のエヴァンゲリオンは、

「オセロー」の飛行甲板に立ちあがった。

細身の手足をしならせ、式号機が空高く舞う。機体の差かパイロットの腕か、その跳躍力は、俺の駆る初号機のそれをゆうに超えていた。そして自由落下に入る。その落下点は…海面だ。

「アスカ、海に落ちるぞっ！」

「黙って見てなさいよ！……せーのっ！」

バキーン！

不意に、甲高い音を立てて式号機は再び飛び上がった。足下、海面スレスレにオレンジ色の光が飛び散ったのがかろうじて見えた。

「ATフィールドか……こんな使い方があったなんて」

着水寸前、足下に一瞬だけ、内向きのATフィールドを張ったのだろう。俺はその発想と操縦能力に舌を巻いた。

と、そういえばアニメでは、艦隊の船を踏み台にして跳び回

つていたような気がする。さっきの一言が効いて、気を使ってるんだらうか。

式号機はそのまま、飛び石を跳ぶように「オーヴァー・ザ・レインボウ」に近づき、その手前でひときわ高く跳びあがった。

「エヴァ式号機、着艦しまーすっ！」

外部スピーカを使い、叫ぶアスカ。

ガキーン！

ズズン……

着艦するエヴァ。着艦寸前にATフィールドを使って落下速度を殺したおかげで、予測したよりもはるかに小さな衝撃で済んだ。

「……すごいじゃないか、惣流さん」

「あつたりまえよっ！誰に言ってるの！」

言いながら、アンビリカルケーブルのプラグを、式号機の腰にあるソケットに挿し込む。サイドモニタに映る、活動限界までの残り時間表示がクリアされ、外部電源に切り替わったことを示した。

『アスカ、今の式号機は、B型装備よ。水中戦はできないわ』

ミサトさんからの通信。

「水に落ちなきゃいいんでしょ」

そう言って、肩のウェポンラックからプログレッシブ・ナイフを取り出す。初号機のそれと違い、刃を出し入れできる大型のカッターナイフのようなデザインだ。

周囲に気を配っていた俺は、海面の盛り上がりが迫ってくるのを発見した。

「来たよ、惣流さん、4時の方向！」

それを聞いたアスカは式号機を振り向かせ、使徒を待ち構える。やがて海面の盛り上がりは水柱と化し、巨大な水音とともに弾けた。海面から跳びあがったソレは、なんと空母を覆い尽くすほど巨大な、エイに似た形のモノだった。

「でかい！」

「予想どおりよっ！」

何の予想だ。

俺の心のツッコミには構わず、甲板に仁王立ちした弐号機を跳び越さんとする使徒に、力いっぱいナイフを突き立てた。ナイフの刃は使徒の腹を薙ぐが、如何せん短すぎる。うっすらとした切り傷はすぐに復元してしまふ。そして、勢いを失った使徒は、エヴァと空母にそのまま覆い被さってきた。

「うっっ」

歯を食いしばり、その重さがもたらすフィードバックに耐えるアスカ。やばい。このままじゃエヴァもつぶされるし空母も沈められる。

だが、妙案を考えつく前に、弐号機は船縁から足を踏み外した。

「きゃあああぁっ！」

『アスカ！』

そのまま、使徒ごと海中に落下した。

猛スピードで泳ぎ回る使徒にしがみついたまま、翻弄されるエヴァ弐号機。縦横無尽に襲う慣性力に頭をシェイクされ、何かを考えられる余裕を完全に失った。

『もうケーブルがないわ、ショックに備えて！』

朦朧とした意識でミサトさんの指示を聞き、ほとんど反射的に身を強張らせた。

そして、ほとんど爆発音のような音。

「うわっ！」

「くっっ！」

ケーブルが延びきり、時速百キロ近い速度が、一瞬にしてゼロになる。俺は必死でインテリアにしがみつき、アスカは体にシートベルトが食い込む痛みを耐える。

「しまった！」

使徒が手から放れ、エヴァから距離を取り、こっちに向かって方向転換した。

「ちよつと！動きなさいよっ！」

アスカが回避行動をとろうとするが、水中用装備でないエヴァはじたばたと動くだけで、ただ泳ぐこともままならない。そうこうしてる間に、使徒はみるみる近づいてくる。

そして、俺たちの目前まで迫ると、がばあ、と上下に割れ、生え並ぶ鋭い歯を見せた。

「く、くちいゝゝゝ？」

そして、エヴァンゲリオン弐号機は、第六使徒の体内への進入を果たした。

「……………つて、食われてるんじゃないのよっ……………」

弐号機は、右脇腹を牙に貫かれている。その痛みのフィードバックに、アスカの顔が歪んでいた。それは、恐らく俺も同じだろう。

「ちよつと、アンタ……………邪魔、しないでよ」

俺は咄嗟に、アスカの手の上から操縦桿を握って神経接続を行い、フィードバックを半分肩代わりしていた。

「強がつてる場合じゃないだろ……………痛みで失神でもされちゃ、困るんだよっ……………。とにかく今は、なんとか、使徒の口をあけてやらなくちゃ……………」

「でも、またコイツを放したら……………どうしようもないわよ。どうやって、倒すの」

「使徒を倒すには、コアを破壊するのが一番早い……………そして、コアは恐らく、あれだ」

エヴァの頭上方向　使徒の口の奥　を視線で指す。そこには確かに、赤く光る球体が埋め込まれていた。

『アスカ？目標を放さないで！今から、アンビリカルケーブルを巻き上げるわ』

ミサトさんからの通信。って、これはまずい！

「……ちよつと待つてください！今、使徒に噛みつかれてるんです。腹に牙が、深く刺さっています。こんな状態で、引きずられたら……シャレになりませんよっ！」

痛みを耐えながら、抗議の声をぶつける。

『うっ、でも……』

「ミサトさん、コアを、口の中に発見、しました。こいつを、ブチ壊せば終わり、です。それを、待つて下さい」

途切れ途切れだが、何とか考えを伝える。

「ちよつと、サード。いい加減なこと、言わないでよ。B型装備で、どう、するつてのよ」

アスカの抗議の声。確かに、水中で身体能力のほとんどを奪われているが、エヴァの潜在能力はこんなもんじゃないはずだ。俺はそれに賭けることにした。

「大丈夫、惣流さん。思いを、込めれば……必死でエヴァに、願いを捧げれば……エヴァはきつと、応えて、くれる」

恐らく弐号機のコアにあるのは、アスカの母親の魂だろう。娘の「生きる意志」には、きつと呼応してくれるはず。

「惣流さんなら、できる。エリート、なんだろ。俺も、サポートする、から」

アスカは俺の顔を見据えながら、その表情を疑いから決意へと変化させる。

「わかつたわよ……アタシに、エヴァに乗るアタシに、不可能なんて、ないんだから」

その言葉に安心した俺は、瞑目し、エヴァの中にいるモノに呼びかける。

この少女を、護ってくれ。

何かが応えた。それを感じ、俺は推測を確信に変えた。

「開け、開け、開け、開け」

アスカの呪文のような呟きが聞こえてくる。俺はその声に乗せて、意識を集中させた。

「開け、開け、開け、開け」

「開け、開け、開け、開け」

その瞬間、エヴァの身体に力がみなぎるのを、俺は感じた。

「ひらけええええええええええつっ！」

俺とアスカの叫びが一つになる。

先ほどまで、水圧と使徒の力に負け、ほとんど動かなかった弐号機。それが今、圧倒的な腕力をもって、ギリギリと使徒の口をこじ開ける。

ある程度開いたところで、下あごに右足を掛け、一気に口を全開させた。

「おおりゃあああああああああぁあつっ！！！」

アスカの気合一閃、弐号機は掛けた右足をそのままふんばり、使徒の口のさらに奥へ跳びこむ。

腕を伸ばし、奥の光球を両手で掴み、力いっぱい握りつぶした。

ずどおおおおおおおおおおおおおおおおおおんんん！！

突然の大爆発。ショックで一瞬意識が飛んだ。

『シン……ザザッ』

ノイズ交じりにミサトさんの声が聞こえた気がした。意識を取り戻したとき、弐号機は空を飛んでいた。

だが、それは錯覚で、相変わらず重力の呪縛からは逃れられてお

らず。フリーフォール独特の浮遊感の後、轟音と共に、深紅のエヴァは「オーヴァー・ザ・レインボウ」の甲板の上に落下した。

「……大丈夫？惣流さん」

「何てことないわよ……」

と言いつつ、頭を押さえつつうめくアスカ。二人してよろめきながら、エントリープラグから這い出し、甲板に降り立った。周囲から、兵士たちの歓声が上がる。

「……どうやら無事に終わったみたいだね。お疲れ様」

「アンタもね」

そう言っ……少しだけだが、アスカは初めて俺に笑顔を向けた。つられて、俺も笑顔になる。

「今まで、アンタはあんなのと独りで戦ってたのよね……人は見かけによらないもんだわ」

「ひでえ言い方。……でもな、別に独りで戦ってたわけじゃないんだよ」

その言葉に、不思議そうな顔を向けるアスカ。

「パイロットとして前線に立ったのは俺だけでも、使徒の能力を分析する人、作戦を立てる人、エヴァを整備する人……それに、普段の訓練のサポートや武装の開発をする人、たくさんの方が戦ってる。俺だけじゃ、何もできないよ」

「……ずいぶん、シユシヨーな心がけね」

やや不機嫌そうな顔で、彼女はため息をついた。だが、すぐに顔を上げると、俺に言い放つ。

「けどねっ、アタシが来たからには、アンタなんかすぐにお払い箱にしてやるんだから」

あくまでも強気な少女に、俺は苦笑を浮かべるしかなかった。

「まあとにかく、これからは一緒に戦う仲間だ。よろしく頼むよ、

惣流さん」

そう言っただけ俺は右手を差し出したが、アスカはちょっと嫌そうな顔をして、

「その、惣流さん、って呼び方、やめてくれる？なんか気持ち悪い」
「気持ち悪いって……」

あんまりな言い方に、トホホとなる俺。

「アスカ、でいいわよ。アタシもアタのことシンジって呼ぶから」
「判ったよ、アスカ」

「よろしく、シンジ」

今度こそ、がっちり握手を交わす。がっちり……って。

「いててててて、痛いってば」

アスカはギリギリと、俺の右手を握り締めた。そして、ぱっ、と振り払うと、

「ふん、情けないわねっ。しっかりしなさいよ！」

そう言っただけ、くるりと踵を返すと、立ち去った。

「……やれやれ」

溜め息をつき、俺は新たな同僚が去った方向を、穏やかな気持ちで眺めた。

ミサトさんに乗せた小型ヘリが飛んでくる音を、ぼつと聞きながら。

第十三話 レンアイとプライド

今日も、俺はレイを連れ立って学校へ行く。

『俺』にとつては2度目となる中学校生活も、だいぶ慣れてきた。気がね無く馬鹿を言い合える親友もできたし、学校に行くのが楽しみですらある。一度目はいじめられっこ街道一直線だったから、今こうして楽しめているのが、純粹に嬉しい。『シンジ』にとつても同様だろう。第二新東京市での学校生活に明るい思い出はなかった。

「シンジ、綾波、おはようさん」

トウジが後ろから追いついてきた。

「うーっす、トウジ」

「……おはよう」

「二人とも、今朝は珍しく遅いのう、どないしたん？」

俺と綾波が登校路でトウジと会うことは珍しい。トウジはいつも遅刻ギリギリで来るからだ。今日会えたのは、俺たちがいつもより遅いからである。

「いやあ、俺が寝坊しちゃってさ」

「なんや、綾波とヘンなこととつたんやないやろな」

「ニヤニヤと冷やかしモードに入るトウジ。」

「……シンジ君は、昨日まで船旅だったから、疲れていたの」

「フォローを入れるレイ。」

「船旅？なんやそれ？」

「んー、まあ仕事でね。でっかい軍艦で三泊四日の太平洋クルージングだよ」

「ほー、昨日まで休んだのはそのせいかいな。ケンスケが羨ましがりそうやな」

「ははは、そうだな」

「ところでシンジ、そのケンスケが言つとつたんやけどな。今日、転校生がくるらしいで。それもガイジンの、ものごつつう別嬪な女

子っちゅう話や」

これは多分、アスカのことだな。やっぱりウチに転入するんだ。

「さすがケンスケ、情報早いねえ」

「って、シンジ知つとったかいな。ちゅうことはネルフ関係者なんか？」

「まあね。もう会ったし」

「ほんまかつ？」

期待に満ちた目で俺を見るトウジ。

「で、どうなんや、その転校生は」

「どうって……まあ確かに、ルックスはかなりのもんだと思うよ」とすると、彼の顔は訝しがる表情に変わった。

「……なんや、含みのある言い方やな」

「まあ、会ってみりゃ判るだろ」

「……シンジ君」

不意に呼びかけられる。振り返ると、レイが何だか不機嫌そうにしていた。

「どうしたの？」

「急がないと、遅刻するわ」

レイの言葉に、トウジは時計を見てギョっとなる。

「ああつ、アカン。あと3分やつ！」

そして3人は走り出す。その日の始まりは、こんな感じだった。

朝のショート・ホームルーム。

担任に紹介されて教室に入ってきた少女は、ブロンド・ヘアをなびかせて、大きく「Asuka Langley Soryu」と筆記体で板書した。

「ドイツから引越してきました、惣流・アスカ・ラングレーです。ヨロシク！」

めいつぱいの笑顔で挨拶する美少女転校生。主に男子から、どよめきが起こった。

なんともまあ、外面のよいことで。

それにしても、こうして見ると、やっぱりアスカってカワイイよなあ。太平洋ではツンケンした顔ばかり見てた気がするけど、笑顔の方が絶対にイイな。愛想笑いとわかつちやいても。って、二十二歳の『俺』がこんなこと考えてるのもあんまり良くないかね。まあ『シンジ』なら憧れても無理もないだろうけど。

などと、やくたいもない考えを打ち切ると、席を選ぶように促されたアスカが、こちらへ歩いてきた。俺の隣の空席を選んで座ると、こちらを向いて、

「よろしくね、シンジ！」

眩しいほどの笑顔で言う。

「あ、ああ、よろしく」

途端に、周囲の男子から殺気が放たれた。

「オイ、なんか碇と知りあいみたいだぞ」

「っーか、ヤケに親しくないか？」

「綾波がいるくせに……」

「二股掛けるつもりか……あの野郎」

ヒソヒソと交わされる怨念交じりの会話。アスカはすました顔で座っているが、こちらに視線を向け、周囲に気づかれぬように、ニヤリ、と微笑んだ。

このやろっ。

シヨート・ホームルームが終わるまで、俺は針の筵に座らされることになった。

昼休みの屋上。俺、トウジ、ケンスケ、レイの4人が昼食をとる

ために集まった。いつもは洞木さんがこのメンバーに加わるが、今日はアスカを購買に案内したりしている。

俺が少し遅れて屋上に来るなり、トウジはいきなり俺の頭を抱え込んだ。

「のう、シンジ。しょくじきに答ええよ」

「な、なんだよ？」

「オマエ、あの転校生とどないな関係なんや？」

凄みのある声と関西弁。結構威圧感がある。いつものやつかみや冷やかしても違う雰囲気、俺は少し戸惑った。

「どないな関係って、同僚だよ、同僚。彼女もエヴァのパイロットだって言ってただろ？」

「知り合ったばかりの同僚の割には妙に親しそうだったけどなあ。

ファーストネーム呼び捨てにしてるし。正直に言った方が身の為だぞ」

横からケンスケの追求が入る。こっちは完璧に面白がっている。トウジの腕が首にかかった。頸動脈に入る。

「呼び捨てなのは、彼女がそうしろって言ったから、倣ってるだけだつて」

「ほなら、オマエと転校生の間には何も無いんやな？誓うな？」

首を締める腕に力が籠る。その拍子に頸動脈を外れ、チョーク気味になる。

「ち、誓うよ。だから、放せつてば」

「いい加減……意識が朦朧としてきた……」

「鈴原君、シンジ君が死んでしまうわ」

レイの制止によって、ようやく俺の首は解放された。

「はあ、それ聞いて安心したわ」

「げほっ、げほげほ……安心？」

安堵しつつ呟いたトウジの言葉に、俺は驚く。

「まさかトウジ、アスカのことを……」

言つと、トウジの顔が一瞬で赤く染まった。

「あつ、アホなこと言うな！わ、ワシはそんなん……」

動揺しまくっている。これは意外な展開。漫画やアニメでは、トウジは洞木さんといい雰囲気だったはずだ。このトウジも、当然気持ちは洞木さんに向いていると思っただけだ。まあ、恋愛は理屈じゃないし、中学生だしなあ。アニメでは、トウジは初対面でアスカのきつい性格を目の当たりにしてたせいで、自動的に恋愛対象から外れたんだろう。

と考えると、アスカがトウジに本性を見せた時が問題だな。クラスに慣れるまでは、本来のあの激しい性格は表に出さないだろう。「アスカって実はかなり性格キツいぜ」。今はまだ猫かぶってるけどな」

「何言うとるんや！あないに別嬪なのに、明るいしさっぱりしとし……」

「おいおい、トウジ……」

ケンスケまで呆れ顔である。

恋は盲目か……ある意味、トウジらしいけど。

「あ、いたいた、シンジー！」

不意に、扉の方から声が聞こえた。

「お、ウワサをすればなんとやら……」

アスカと洞木さんが駆けよってきた。

「やっぱりここにいた。せつかくだからアスカも一緒に昼ご飯食べようと思って」

「さすが委員長、気が利くねえ」

感心しきりのケンスケ。

「よろしくね」

アスカが微笑む。天使のような、という表現がハマってしまうような笑顔に、固まるトウジと、カメラを持ってきていないのを悔やむケンスケ。

「おお、よよよよろしゅう。惣流……さん」

「なんか、さんづけで呼ばれるとくすぐったいわ。クラスメイトな

「んだし、呼び捨てでいいわよ」

「え、ええんか？」

「うん。その代わりにアンタ達のこと呼び捨てにしていいでしょ？ええと、鈴原、だっけ？」

「お、おう。構わんで。……惣流」

「ぷっ、何がガチになつてるんだよ、トウジ」

「チャチャを入れるケンスケ。」

「や、やかましい」

「そんな様子を見て、洞木さんは表情を曇らせている。」

「で、アンタが相田よね。よろしく」

「ああ、よろしくな」

「それで……アンタがファーストチルドレンの綾波レイね」

「少しだけ視線を鋭くし、レイを睨むアスカ。」

「ええ」

「ふーん。ま、よろしくね」

「……よろしく」

その後は特に何事もなく、表面的には楽しい談笑と食事が続いた。……しかし、不自然な程俺に友好的なアスカ、俺がアスカと話すたびに睨んでくるトウジ、トウジとアスカが会話するたびに悲しげな顔をする洞木さん、なぜだかいつにもまして喋らないレイ。こんな状況の中で、俺には飯の味などわかるうはずもなかった。

ケンスケはというと……美少女転校生のルックスを、いろんなアングルからこっそりチェックしていた。

「シンジ……ワシはオマエを信じてええんやろうな？」

「昼食を終えて教室に戻りながら、トウジが俺に耳打ちしてきた。」

「トウジらしくないなあ……人のことウジウジ気にしてないで、自

分の方を振り向かせてやる、くらいの気概を持ちなよ」

「え、いや、ワシは別に……」

「あっそ、じゃあ俺がアスカとどうなろうと、トウジにゃ関係ないわな」

「なんやとツ!？」

「なんで怒る？」

「シンジ、あんまりトウジを苛めるなよ。トウジもな、そこまであからさまな態度取っついて、なんとも思っていない、は通用しないと思っぜ」

ケンスケが助け舟を出す。

「いや、……しかしのう」

慣れない感情に、険しい顔で考え込むんでしまっトウジ。

「はいはい。大いに悩め青少年……ってね」

肩を竦めて言う俺に、ケンスケは訝しげな視線を送ってきた。

「シンジ、オマエ時々、妙にオツサン臭いよな」

「……ほっとけ」

「シンジ。今日はシンクロテストでしょ。一緒にいこ」

授業が終わると、アスカは俺を誘ってきた。その妙に親しげな声色に、俺は不気味なものを感じる。だが、それ以上にクラスの男子連中 特にトウジ からの視線に恐怖を感じた。

それをやり過ぎすべく、レイに助け舟を求める。

「あ、ああ……そだね。レイも行くこっ」

「ええ」

しかしそれは迂闊に過ぎた。レイも、タイプは違えど、アスカに比肩し得る美少女である。彼女が立ち上がると、周囲の視線はさらに鋭く突き刺さってきた。当然と言えば当然だ。

そして俺は、それだけで殺されそうなほどの敵意を背に受け、傍

から見れば「両手に花」状態で教室を出てゆくのだった。

学校から駅へ向かう道を、アスカは先頭にたつてずんずんと進んでゆく。その後ろに俺、少し遅れてレイが続く。

「……アスカあ」

「何よ？」

「学校で、あからさまに態度変えるのはやめてくんないかな？」

「何言つてんのよ。このアタシが仲良くしてやってんのよ。ありがたいと思いなさいよ」

にべもなくそう言い放つアスカ。しかしその目は、悪戯を楽しむ目だ。

「別に俺なんかじゃなくてもさ、アスカと仲良くなりたいたい野郎なんていっぱいいるだろうよ」

「アンタバカア？そんな下心丸出しのヤツと、仲良くなりたくはないわいよ」

「その割にゃ、随分と外面いいじゃない。あーいつのつて疲れない？」

そう言つと彼女は足を止め、こっちを振り返り、

「よけーなお、せ、わ、よっー！」

「あだだだだだ、ゴメンゴメンゴメン」

耳を引つ張る。これ、マジで痛いんだけど。

「フンツ……それにしてもファースト、アンタも黙ってないで何か喋りなさいよ」

矛先が、少し後ろを歩いていたレイに向けられた。

「別に……何も喋ることはないわ」

「何よそれ、ム力つくわね……アンタ、碇司令のお気に入りなんですって？大した実績もないのに何でかしらね。もしかして、御曹司の許婚つてヤツ？」

口調がだんだん陰湿になってゆく。さすがにちょっとムカつ腹が立ってきた。

「そついう言い方は止めるよな」

「何よ、やっぱり自分のカノジヨをかばうワケ？」

「別に、レイと俺はそういうんじゃないよ。それはともかくな、そういう低レベルな話でカラむのは、みっともないって言ってるんだよ」

「低レベルですって!？」

即効で激昂する瞬間湯沸し機アスカ。

「……あのなあ、エースパイロットを自負するんなら、もうちょっと冷静になれよ。戦いでそうポンポン熱くなってるたら、命がいくつあっても足りないぞ。それぐらい戦闘訓練を受けてきたなら判るだろ」

「エースパイロット」という単語に反応し、アスカは齒噛みしながら、握り締めた拳を緩めた。それを確認し、俺は続ける。

「それに、レイに実績がないってのは本気で言ってる？」

「……なんでよ、今までの第三から第五までの使徒はアンタが一人で倒したんでしょ？第六はアタシが倒したんだし」

いつの間にか、第六使徒戦はアスカ一人の手柄になっている。…

…まあいいけど。

「レイは『プロトタイプのパイロット』だぜ。エヴァのシンクロシステムを開発する上で、誰が実験台になったと思ってるんだ？」

「あ……」

蒼い瞳に驚きが浮かぶ。

「エヴァの開発に関わってるんだから、当然俺たちより多くの機密に触れているはずだし、司令たちとの付き合いだって長いだろ。そういうのを一々やつかんでたら、ストレスで胃に穴が開いちまうぞ」

「あ、アタシは別にやつかんでなんか！」

「んじゃ、何だ?……まあ、何でもいいけどさ。下らない対抗意識に気を取られてないで、もうちょっと自分や周りを注意深く見てたほうがいいと思うぞ。……俺たちは、本当に使徒さえ倒していれば

いいのか、それすらも怪しいんだからな」

「……どういうことよ？」

「自分で考えな」

あとは、一言も会話がなく、本部へと歩を進める。

レイの表情が少し固いのが気になった。

ちよつと言いすぎたかな。

「お疲れ様、三人とも。今日のテストの結果はこんな感じよ」

シンクロテスト後のミーティングルーム、リツコさんが差し出したシートには、テスト中のシンクロ率変動を示す三本の折れ線グラフが描かれていた。

紫の線が俺。シンクロ開始当初の変動を除けば、75～80%の間に収まっている。

「シンジ君は相変わらず安定してるわね。でも、もうちょっと上を狙えないかしら？」

「はあ、やってみないと判りませんけど……」

「そう。じゃ次回は、最高記録を目指してみてね」

「はい」

紫の線に絡むように、赤い線が65～85%の間を大きく上下している。これはアスカだ。

「アスカはさすがね。ドイツでの最高値よりずっと高いじゃない。でも、平均値でいくとシンジ君より低いわね……もうちょっと安定させることを心がけてみて」

「……はい」

そして、二人の線より少し低いところ、60%前後のところを、ほとんど起伏のない黄色い線が描かれている。これがレイだ。

「レイは……まあこんなところかしらね。ついこの間まで起動しな

かったことを考えると、この辺で安定してるのはいい兆候だわ」

レイに対する評価を聞いて、アスカが怪訝そうな顔をする。

「何か質問は？」

「はい。ファーストのシンクロ率が妙に低い気がするんですけど。そのままでもいいんですかあ？」

横目でレイを見ながら、白々しく言うアスカ。リッコさんはそれを見て、しょうがないわね、という風な溜め息をつき、言う。

「零号機は扱いが難しいの。それでも、集中力と精神の安定性が抜群のレイだから、何とか起動レベルを保っていられるのよ。今はこのレベルを維持して、少しずつ底上げしてくしかないわ」

「何よそんなの、アタシだって……」

レイを評価する言葉に気がでないアスカは、つい抗議の言葉を口にした。

「アスカには無理ね」

「ちよつとリッコ」

にべもなく叩き落すようなリッコさんの言葉に、アスカの性格を知るミサトさんが窘める。叩き落されたアスカは……物凄い形相で拳を握り締めていた。

「ま、まあ今日はこれくらいにしましよ。上がっていいわよん」

アスカの様子を見て、ミサトさんは慌てて締めた。

更衣室で着替えていると、隣の女子更衣室から「ドガン！」という、ロツカーを殴りつけたような音が聞こえてきた。これは、アスカだよな、たぶん。血気盛んなのはいいが、今からこの調子だと、アニメのように心折れた時の反動が怖い。なんとか、余裕を持たせてあげないと。

俺は……俺には何ができるんだろうか。

第十四話 ミッション・インポッシブル 前編

第七の使徒が現れた。

どこからか太平洋を泳いできたそれは、一直線に日本列島、第三新東京市を目指していた。

ネルフは、エヴァによる水際での迎撃・殲滅を決定する。

「沖合いで発見できたのはラッキーでしたね」

エヴァごと地下のリニアトレインに揺られながら、無線でミサトさんと話す。向こうも、指揮車に揺られているのだろう。目的地は同じ、使徒の上陸予想地点だ。

『そうね……今回は街に被害を出さなくて済みそうだわ』

実際、これまでの戦闘で、要塞都市として作られた第三新東京市の迎撃システムも甚大な被害を受けた。復旧も遅れており、今はまだ実戦で使えるレベルではないという。一般の居住区は、有事には地下に引っ込むようになっていたため比較的被害が少ないが、無視できるものでもない。だから今回は、都市に近づけないように戦うことが重要であった。

『上陸直前で一気に叩くわよ。地上に出たらすぐにフォーメーションをとって、目標が現れたらすぐに、初号機・弐号機で交互に波状攻撃。零号機はポジットロンドライフルで後方から援護して。わかった？』

『了解』

『オツケー！』

「わかりました」

ミサトさんの指示に、三者三様に答えた。

『せっかくアタシの日本デビュー戦なんだから、アタシ一人にまか

せてくれればいいのに……」

指揮車との通信が切れると、アスカのボヤキが聞こえてきた。

「戦力出し惜しみして万が一があったらコトだしね。安全第一ってことじゃないかな」

俺としては、一人でないとだけでも、ずいぶんと気楽である。

「うっさいわねっ！くれぐれも足ひっぱんじやないわよ、ボケナス！」

「ボケナスって……」

実際、あまり聞かない貶し文句に苦笑しつつ、レイを映すモニタに視線を移した。

「レイ？」

「……なに？」

こちらへ向けられた赤い双眸は、少しだけ強張って見えた。

「緊張してる？」

「いいえ、問題無いわ」

いつもながらそっけない答えだが、やはりどことなく緊張して見える。あるいは興奮しているのか。

「そう？あんまり無茶するなよ」

「私は大丈夫。それよりもシンジ君こそ、無茶はしないで」

「わかってるよ」

なんだか妙な会話になってる気がする……と思っアスカを見ると、なにやら苦虫を噛みつぶしたような顔になっていた。自重しよう。

記憶によれば、今回の使徒はかなりやっかいであったはず。

コアを二つ持ち、二つに分裂する使徒。脅威の回復能力を持ち、コアをただ破壊してもすぐに復活する。倒す方法はただ一つ、二つのコアを寸分違わず同時に破壊する

という話を、まさか戦闘前に誰かに話すわけにはいかないだろうなあ。本来は誰も知っていないはずのない話なのだから。

アニメ版では一度敗北し、N2爆雷によって足止めを行った後、その「倒す方法」を編み出した。

一度撤退するってのは別にいいんだが、足止めの手段は何とかならないものか。さすがに半径数キロのクレーターができてしまうような爆弾をばこぼこ使って欲しくない。自然破壊もいいとこだし、人が住んでいないとも限らないのだから。

とはいえ、斬っても撃つても直ぐに回復してしまう相手を、どうやって足止めするか……：そういえば、N2爆雷を食らって、どうして数日間も動けなくなっただろう？

などとつらつらと考えてみるが、いい方法は思いつかない。知ってることが多くても、そこから判ることというのは意外に少ないものだ。

ま、なるようになるか。漫画と同じとも限らないな。

あっさりと考えることを放棄した。

トンネルを抜けて、リニアトレインが停止した。

眼前に広がる大海原。当然ながらここは海岸である。だが、その光景は海水浴場のような賑々しいものではなく、自然の造形に彩られた静かな美景でもない。この辺はセカンドインパクト前までは結構大きい都市だったらしく、浅瀬のところどころから顔を出すビルの残骸がなんとも寒々しい。

それでもいずれ、このヒトの痕跡も植物や水棲生物の住処となり、自然の一部となっていくんだろうか。唐突にそんなことを考えてしまっ。

3機のエヴァはトレインから降り、それぞれの得物を持って、海に向かってフォーメーションをとる。

初号機はパレットライフルを持ち、脛には新兵器「PSTンファアー」を固定してある。PSTンファアーは、以前から提案していた格闘戦用武装だ。見た目は少し細身のトンファアーだが、打撃部分から微量の陽電子スプレーを放出できる。これによって接触部分を対消滅・プラズマ化しながら目標を切断するのである。この陽電子スプレーは神経接続でコントロールできるので、普通のトンファアーとしても使用できる。

式号機はソニック・グレイブを携えている。プログレッシブ・ナイフと同じ、高熱、高速振動で切断する刃を持つ薙刀である。これもつい先日実戦配備された。戦闘技術が高く敏捷性に優れた式号機とそのパイロットには、この大型の武器は鈍重すぎるように見えるが、アスカの豪快な気質にはぴったりの武器とも思える。

この二機より少し後方に控える零号機は、ポジトロン・ライフルを構えた。スケールサイズでもロケットランチャーほどのサイズがある。ヤシマ作戦で使われるはずだった戦自研の陽電子砲と原理は一緒だが、バッテリーパックで駆動する設計になっており、連射も利く。ATフィールドを破るほどの出力は期待できないが、エヴァアの制式武装では最強の飛び道具とっていい。

『アタシが先にいくわ。しっかり援護すんのよ』
アスカからの通信。

「了解」

俺は、使徒上陸予想ポイントへの射線上から、式号機をはずすように距離を取る。

レイは俺と反対方向に動き、しっかりと射線を確保した。

と、海面に不自然な漣が立った。

『来たわよ！』

ミサトさんの合図と同時に、式号機が走り出す。その向こうに、まるで水牛の角の置物のような使徒のフォルムが、海面から飛び出した。

初号機と零号機で使徒に十字砲火を浴びせる。どちらも空しくA
Tフィールドに弾かれるが、動きを止めることには成功した。

その一瞬を突くように、式号機はビルの残骸を踏み台にして、跳
び上がった。

同時に俺も、次の攻撃に備えて走り出す。

『おりやあっ！』

ズババババババっ！

体長の二倍ほどの高さから振り下ろされたソニック・グレイブの
刃に、使徒は成す術もなく、きれいに真っ二つに叩き斬られた。
すごい。

式号機の華麗な動きに、一瞬だけ目を奪われた。速く、無駄がな
い。機体のスペック差云々ではなく、パイロットがその動きを正確
にイメージできるか、というところに差があるのだろうと思う。い
くらエヴァ操縦者としての適性が高くとも、一朝一夕で身につくも
のではないだろう。彼女がエリート、という話もなんとなく納得で
きてしまう。

『ナイス、アスカっ！』

ミサトさんの嬉しそうな声。だが、まだ終わっていない。縦に並
んでいた二つの光球が、斬られる寸前に刃を避けるように左右に動
いたのが見えたのだ。俺は一度立ち止まり、身構える。

『どう？戦いは常に、無駄なく美しく、よ』

得意気に振り向こうとするアスカ。

「まだだっ！」

俺が叫ぶと同時に、使徒の断片がぴくり、と蠢く。その気配を察
したのか、アスカも再び使徒に注意を向けた。俺は再び走り出す。

『何よこれっ！』

使徒の断片は、ずるり、と脱皮するように変形し、左右それぞれ
が分断前と同じ姿へと変貌した。二体になった使徒が式号機に飛び
掛る。反応が遅れる式号機。

間に合うかっ？

「おらあつ！」

走るスピードを殺さず、跳び蹴りを放つ。近い方の一体を海に叩き落した。もう一体の攻撃は止められなかったが、式号機が何とか受け流すことに成功した。

「アスカっ、そっちは頼むぞっ！」

『アンタが指図すんじゃないわよっ！』

アスカの強がりには耳を貸さず、海に落ちた使徒を追いかけつつ、脛のホルダーからトンファーを外し、構える。そんな初号機に逆襲すべく、猛然と海から飛び出す使徒。

凄い迫力だ。

掴み掛かってくる長い腕を左のトンファーで弾き飛ばし、右の方は陽電子の放出を開始した。周囲の空気が反応し、発光する。それをそのままコアにぶつける。

バシユウツ！

派手な音とは裏腹に、ほとんど抵抗を感じることなく、使徒の胸をコアごと薙いだ。一瞬動きの止まる使徒を、すかさず二度、三度と切り刻む。しかし。

『ちよつと、どうなってるのよコレ!?!』

すぐに切断面が接合してもとの姿に戻ってしまった。

『キリがないわよ、これじゃっ!』

力はそこそこだが動きが遅いし、普通なら楽勝な相手だ。だが、いくら傷つけてもすぐに癒え、しかも疲れ知らずでは、こちらが一方的に疲弊していくばかりである。

『キヤアツ!』

「アスカ!?!」

使徒を張り倒した向こうに、転倒した式号機が見えた。そして、少し離れているが、襲い掛からんとする使徒。俺は助けに駆けつけようとしたが、もう一体が行く手を阻む。

クソっ、面倒くさい!

「行かせてくれないなら……!」

俺は目の前の使徒の長い腕を切り落とし、右のトンファーを捨てて貫手を放つ。右手がコアに突き刺さったのを確認して、左のトンファーも手放し、そのまま掴んで持ち上げた。

「……オマエが行ってこおいっ！」

弐号機に渾身の一撃を放とうと腕を振り上げる使徒に向かって、彼の半身を思いっきり投げつけた。

「ごがしゃあっ！」

二体の使徒は、ダンゴ状態になって倒れる。先ほど切り落とした腕は、恐ろしい勢いで主人のもとへ滑っていき、吸収される。直後、腕が瞬時に再生された。ほとんどダメージは見受けられない。だが、どう絡まったのか、二体ともうまく動けないようだ。

転倒していた弐号機はようやく立ち上がると、グレイブを振りかざす。

『弐号機、いったん離れなさい！零号機、援護して！』

ミサトさんの指示が飛ぶ。

『……くっ！』

アスカは憎々しげに呻き声を漏らし、その場から距離を取った。直後に光条が迸る。零号機のポジトロン・ライフルだ。ATフィールドは初号機と弐号機によって中和されている。放たれたビームは障害なく二体の使徒へと突き刺さり、直径五メートルほどの孔を穿った。だが、それも空しく、ずぶずぶと孔の周囲の肉が膨らみ、ゆっくりと孔をふさいだ。

ん？

陽電子ビームによって穿たれた孔の回復が、妙に遅い。さっきは、いくら斬ってもすぐに戻ったのに。

『そういうこと……零号機、ガンガン撃つよ！目標に回復する時間を与えないように！初号機と弐号機は、そのままATフィールドの中和を続けて！』

何かに気がついたらしいミサトさんが指示を出した。……そうかなるほど。

間髪入れず、ライフルが幾度も火を噴いた。使徒の身体は回復も間に合わず、次々に穿たれ、削られて、だんだんとその体積を縮めてゆく。

二十発も叩き込んだらどうか。やがて、攻撃が止んだ。

『零号機、ポジトロン・ライフル、バッテリー残量ゼロ』

レイが静かに状況を伝えた。もはや原型を留めていない使徒は、びくびくと不気味に蠢いているが、取り立てて大きな動きを見せない。

ポジトロン・ライフルの効果が高かったのは、使徒の構成物質を大量に破壊・消滅させることができたからだろう。初号機と弐号機は、使徒の身体を切り落とした。ダメージは大きいように見えるが、実際に「破壊できた」部分はごくわずかだ。あの使徒はどうやら、一度本体から離れた破片でも、その物質組成が無事ならば体組織として再構成できるようだ。

だが、ポジトロン・ライフルによって大量に破壊された体組織の再生には、時間がかかるらしい。あるものを再利用すればすぐに回復できるが、ないものを作り出すのは容易ではない。そういうことなのだろう。

『……死んだの？』

アスカの問い。それに答えたのは、ミサトさんだった。

『いいえ、まだ生きてるわ。ただ、しばらくは動けないはずよ。みんな、一度帰還しなさい』

『どうしてよ？今がチャンスじゃないの』

『そのまま攻撃しても状況は同じよ。今、技術部でソイツの弱点を分析しているわ。作戦を立て直すから、いったん戻りなさいって言うてるの』

アスカは悔しそうに歯噛みしたあと、

『……了解』

とだけ呟いた。

リッコさんの話では、使徒が回復して行動を再開するまでに、6日ほどかかる見込みらしい。奇しくも、漫画と同じだけの時間を稼げたわけだ。ただ、漫画では初号機、弐号機共に叩きのめされたために、修理に追われて相手が動き出すまでこちらも動けなかった。

対してこちらは、エヴァ3機とも健在で、すぐにも出られる状態にある。これならば、あの使徒の攻略法　二つのコアを同時に破壊する　を編み出し次第、相手が動けないうちに止めを刺すことも可能だろう。

と、ここで俺は気がついた。

ああ、これで「ユニゾン特訓」の必要性がなくなってしまったんだ。

「ユニゾン特訓」とは、第七使徒を殲滅すべく、シンジとアスカを体内時計レベルまで一致させ完璧に同調させるのを目的とした特訓である。その内容は、エヴァの修理が終わるまでの6日間、シンジとアスカが一緒に生活し、二人で踊るダンスをマスターすること。まあ、特訓の有効性はともかくとしても、これがきっかけでシンジとアスカの仲が親密になったのは疑いない。

ここでも、この特訓を利用して、彼女の凝り固まった態度を少しでも解してあげたいと思っていたのだが……うーん。ちょっと迂闊だったかな。

「あれ？レイ」

控え室で物思いに耽っていたのだが、ふと顔を上げると、入り口のところにじつと佇んでいるレイに気がついた。

「どうしたの？そんなところに突っ立って」

「シンジ君、あの人のことを考えていたの？」

「あの人？……ああ、アスカか。……まあ、別にそれだけってわけでもないけどな」

そう言うと、レイはゆっくりと近寄ってきて、俺の隣に座った。

「式号機パイロットは、パイロットに向いていない」

「なんで、そう思うの？」

「冷静な判断ができなず、独断先行する……これでは、シンジ君や私の方も危ないわ」

少し俯いて、レイは言う。相変わらず抑揚のない声だが、こんな話し方をするときは大抵怒っているのだ。

「まあ、今回はそうだったけどね……彼女は少し焦ってるだけだよ」

「何に、焦ると言うの？」

「アスカは多分、ずっと一人だったんだ。ドイツでは、たった一人の適格者として持て囃されていたんだろう。もしかしたら、大人達が意図してそういう風に接していたのかもしれない。なのにここに来て、自分の立場を脅かす人間が二人もいるんだから、やっぱり焦るだろ」

「……よく、わからないわ」

人との触れ合いを求めることを覚え、明確な感情を意識し始めたばかりの少女にとって、立場への執着や嫉妬心といったものはピンとこないかもしれない。

「でもさ、レイにも覚えがあるんじゃないかな？……俺が、碇司令の息子が、現れたときに」

そこまで言うと、レイは気まずそうに沈黙した。正直言って、大した確信があったわけでもないが、どうやら凶星であったらしい。

「でも……私にとっては、それだけが絆だったから。あの人は私と違って人とよく話すし、たくさん絆を持っているように見える」

「アスカは、それが絆だと思ってないのかもしれない」

レイは少しだけ悲しそうな顔をした。

「それで、どうするの？」

「うーん、どうしようかな。俺としては一緒に戦ってほしいと思うけど、今の気持ちのままエヴァに乗り続けてたら、彼女はどんどん傷ついていく。……機会を見て、いろいろ話してみるさ。それで彼女がどういう選択をするか、それ次第だね」

「……そう」

そこまで話したところで、チルドレンを呼び出す館内放送がかかった。

「……さて、行くか」

俺が促すとレイも無言で立ち上がり、二人、発令所に向かった。

第十五話 ミッション・インポッシブル 後編

技術部による使徒の分析結果と、それを元にした作戦案がまとまったらしく、俺たちは発令所に集められた。

第七使徒との第一次会戦から、すでに日付が変わっている。俺は、三時間ほど仮眠をとったので割と元気であったが、アスカは眠れなかったのか、目の下に隈を作り、どんよりとした雰囲気を漂わせ、持ち前の美貌がなんとも煤けて見える。レイはいつもと変わらない。この辺はさすがと言うべきか。

「あの使徒は二体で一体。お互いを補完しあってるような関係らしいわ。片方がどんなに傷ついても、もう片方のコアさえ生きていれば復活できる。これを殲滅する方法は、二つのコアに対する同時加重攻撃だけ」

ミサトさんは、やはり徹夜で作戦をまとめていたのだろう、髪はボサボサで少し眠そうであったが、アスカほどの疲れは感じられない。気力の充実度の差だろうか。

「幸い、使徒は活動不能で、こっちはほとんど無傷。今なら簡単に止めを刺すことができるわ」

予想通りの展開である。だが、問題はここからだった。

「で、止めを刺しに出撃してもらおうわけけど……式号機がフォワードよ。出撃したらすぐに目標に接近して、コアを同時に叩き潰してちょうだい。初号機は式号機の傍についてバックアップ。零号機は、不測の事態に備えて少し後方で待機。わかった？」

そこまで聞いたとき、俯いていたアスカの肩がびくり、と反応した。

「……いわよ」

「え、何？アスカ」

俯いたまま呟くアスカに、ミサトさんが問い直す。

「ふざけんじやないわよっ！」

「ちょ、ちょっとアスカ、どうしたのよ」

「何がフォワードよっ！？子供のお使いみたいな任務じゃない！テキトーに戦果上げさせて、煽てところつてのがミエミエなのよっ！」

突然激昂した部下に、うろたえる作戦部長。

「お使いなんかじゃないわ。私たちの使命は使徒の殲滅なんだから、これも立派な任務よ。それに、使徒が動けないってのも計算上の判断に過ぎないの。危険で気が抜けないことには変わりないのよ」

噛んで含めるように言い聞かせるミサトさんは、自身何かを抑えているのか、わずかに声を震わせていた。

「……私がやります」

そこに割り込んだのは、レイだった。

「レイ？」

「ちょっとアンタ、何勝手な事言ってるのよっ！？」

思わぬ横やりに食ってかかるアスカ。

「あなた、やりたくないんでしょう？だから私が……」

「ぐっ、うっさいわねっ！アンタに代わって欲しくなんかないわよっ！」

無視される形になったミサトさんの肩が、ぴくりと震えた。ミサ

トさんも、大人とはいえあまり穏やかなタイプではない。

「おい、二人とも……」

と止めるのも間に合わず。

「……ええ〜いつ！うるさいっ！いい？これは作戦なの。アナタたちの我侭を聞いている場合じゃないのよっ！」

徹夜明けの作戦部長はついにキレた。

『さっきも言ったけど、近づく時は慎重にね』

ミサトさんの指示。

『わかってるわよ』

口調は軽いが、声は低い。未だ憤懣やるかたないといった感じだ。返事とは裏腹に、弐号機は無造作に使徒に近づいてゆく。初号機はパレットライフルを抱えて少し後に続く。零号機はポジトロンライフルを構え、後方に佇んでいる。

やがて、弐号機は手の届く距離まで近づいた。撤退した時の使徒は、肉が殆ど削げてしまい、コアが殆ど剥き出しの状態だったが、今は周囲に回復中の肉が結構な厚さで張っている。

『フン……』

それを見下ろす弐号機。コアの距離と腕の長さを目測し、貫手を放とうと構える。その時。

コアに張りついていた肉が急激に形を変え、ガムかスライムのごとく、弐号機の足にずりりと絡みついた。

『きゃあっ！』

足を引っ張られて転ぶ弐号機。俺はとっさに、その伸びた肉めがけてパレットライフルを撃ちこんだ。使徒の肉は命中した部分でちぎれ、残った部分は弐号機の足首から離れて使徒のコアに吸収される。

そして……見上げると、それまでの動きが嘘のように、みるみる回復してゆく使徒がいた。

事態は、最悪の方向に転がりだしたのだ。

『ちょっとリツコっ！あと5日は動かないんじゃないのっ！？』
発令所でミサトさんが喚いているのが聞こえる。

「責任追及は後でやってくださいっ！」

と吐き捨てておいて、俺はトンファーを構えた。

『ミサト！どーすんのよ！？』

立ち上がりながら、アスカが叫ぶ。

『……もう一度、前と同じ方法で足止めして』

二体の使徒は、零号機に狙われているのを見るや否や、互いに距離をとるように動き、一斉に飛びかかってきた。

「つくそっ！」

使徒の攻撃を受け流し、二度、三度と斬りつけるが、相変わらず異様な回復力を見せつける使徒。零号機からの援護射撃は、なかなか飛んでこなかった。

『どうしたの、レイ！』

焦るミサトさん。だが、零号機は撃てない。

『……味方に当たります』

使徒が初号機と弐号機を挟みこむようにプレッシャーをかけてくるために、敵味方入り混じっての混戦となっているのだ。この状態で遠距離からの射撃は危険すぎる。

「こいつらも、学習してるって、ことかっ！」

『使徒のクセに、ナマイキなのよっ！』

徐々に防戦一方となる。特に弐号機は、プログレッシブ・ナイフ一本で応戦しているのだから大変だ。

『ええいつ！この！この！このーっ！』

弐号機は、振り下ろされる使徒の長い腕をかわし、ナイフでコアをメッタ刺しする。しかし、それも徒勞である。俺は俺で、幾度となく使徒を叩き、斬りつけているが、やはり致命傷を与える事はできずにいた。今の俺たちでは、五体満足の使徒を仕留めるのは極めて難しい。かといって、そう易々と逃がしてくれることはなさそうだ。

『シンジ君、アスカ、その使徒は、コアを同時に叩かないと倒せないわ』

ミサトさんからの通信。何も今更、こんな殴り合いの真っ最中に言うことでもないだろうが。

『その話なら聞いたわよっ！』

イラついたように言葉を叩きつけるアスカ。ナイフで相手の攻撃

を裁きながら対応するのだから、それでも誉められるべきだろう。

『だから、初号機と弐号機が動きを同調させて攻撃して!』

『んなこと簡単にできるなら、始めっからやってるわよっ!』

アスカの言葉に、普段の猫かぶりは感じられない。そんな余裕はないのだろう。

『ハア、ハア、ハア』

アスカの荒い息遣いが聞こえてくる。俺もしんどい。なにか、手はないか……

『ハア、ハア……シンジ、アンタ、そっちの使徒の動きを止められる? 10秒でいいわ』

10秒? 何か考えがあるのか……

「わかった。やってみるよ」

『え……』

俺は余裕もなかったのでそれ以上言葉を交わさず、使徒の攻撃を裁きながら隙を伺う。使徒は長い両腕を、泣いた子供のようにぐるんぐるんと振り回してきた。ただその速度は異様に速い。人間の子供サイズと同じくらいの回転数なのだから、その数十倍の回転半径を持つ腕の先端速度と、そこから得られる衝撃はかなりのものだろう。

トンファーで、左右から連続で振り下ろされる腕を弾く、弾く、弾く。

「っだあ、鬱陶しいっ!」

一瞬の間を突き、トンファーの陽電子を放出させて使徒の左腕を根元からぶった切った。

「もらったっ!」

そのまま懐に潜りこむ。しかし。

「うぐっ!?!」

使徒の残った右手で、左のトンファーを叩き落された。

そのまま、初号機の首を掴んで、締める。すぐに復活した左手も添えて初号機を持ち上げた。ネック・ハンギング・ツリーというや

つだ。

首を締められる圧迫感が俺にフィードバックする。なぜか息も詰まった。

「ぐ、ぐ、ぐ……」

朦朧とする俺の視界の隅に、黄色い影がよぎる。刹那、首への圧迫感が弱まった。

「レイっ！」

いつの間にか接近していた零号機が、使徒の左腕をナイフで切りつけたのだ。しかし、すぐに復活する左腕に、逆に零号機が薙ぎ払われる。

『きゃあっ！』

「レイ！？ちくしょうっ！」

俺は、今だ初号機の首を掴んでいた右腕を掴み返し、そのまま使徒の後ろへと回った。

さらに、後ろから使徒の左腕を掴み、羽交い締めにする。

「アスカッ！止めたぞ！」

見ると、弐号機も相手を掴み、動きを止めていた。

『合図するまで、止めてなさいよ……』

言い放つと、弐号機はなんと……使徒を持ち上げていた。そして

『今よ！離れて！』

言うが早いか、使徒をブン投げた。

俺は慌てて横っ跳びで逃げる。

があああん！

激突する2体の使徒。そのまま折り重なるように倒れる。

そう。アスカは、先の戦いで俺がやったのと同じ事を、やってのけたのだ。

いや、それだけでは終わらなかった。

『おおりゃああああああっ！』

周囲の空気が、ごう、と唸りを上げる程の突進。そして、アスカは一息にナイフを突き出した。

どしゅうつうつうっ！

……呆れることに。

式号機は、ナイフとその腕で、手前の使徒のコアを貫通し、後ろのコアまで刃を刺し込ませていた。

そのまま力なく崩れ落ちる使徒。

だが、碎けかけたコアの亀裂から光が一瞬漏れるのを、俺は見逃さなかった。

「自爆するぞっ！フィールド全開っ！」

あたりは白い光に包まれ、ついで煙が視界をふさいだ。

煙が晴れる。後には、直径500メートルほどのクレーターと、三体のエヴァだけが残った。

『……作戦終了よ。お疲れ様』

ミサトさんの安堵したような、それでいてどこか悔しそうな声が、LCLを震わせた。

「ふう、やれやれ。今回は大変だったねー」

シャワーを浴び終わった俺は食堂に行くと、レイとアスカがいた。二人は微妙に離れた席で、黙々と食事を取っていた。俺はその光景に嘆息しつつも、二人の丁度中間あたりの席に腰を下ろす。何か話そうかとも思ったが、取りたてて話す事も思い浮かばず、俺も黙ってうどんを啜り始めた。

少しすると、アスカが話しかけてきた。

「……ねえ、シンジ。どうして、アタシの言うことに何も言わず従ったの？」

「へ？」

俺は質問の意図を測りかねた。

「最後、使徒の動きを止めろ、って言ったときのことよ」

「……あーっと、別に、俺に策があったわけじゃないし……かといつて、アスカの考えをじっくり聞く時間もなかったしな」

「なんで、そんなにすんなりと信用したの？」

「信用、なんて……そんなに仰々しい話でもないんじゃない？それに、俺としてはアスカが俺を信用してくれた方が嬉しいけどな」

「アタシが？」

「違うの？ 俺なら何とかすると思って、指示を出してきたもんだと思っただけだよ」

何やら考え込んでしまうアスカ。その様子を見て、俺は苦笑しつつ言った。

「アスカは、人に頼ったり頼られたりってことに慣れてないんだな」とすると、アスカは驚いたような顔を俺に向けた。

「アタシは……アタシは人に頼ったりしない……」

「そういうワケにもいかないだろ。たった三人で、あんな化物と戦わなきゃならないんだからさ」

「でもっ！……」

「アスカ」

俺はアスカの目を見据えた。

「アスカは、独りで戦えるって、本気で思ってる？」

「アタシが、弱いつて言うの？」

「いくらエヴァの操縦技術が高かったって、一人じゃエヴァは動かせないよ。前にも言っただろ？」

「屁理屈よ、そんなの！」

「事実さ。そして、自分が誰に、何に頼ってるか……そいつを意識

してなきや、自分が誰かの操り人形になっても、気づけない」

人形、という言葉に、ぴくりと反応するアスカ。アニメでは、アスカの幼少期のトラウマに関わるキーワードだ。

「……アタシが、人形だっというの？」

「さあな。でも、エヴァのパイロットなんて所詮捨て駒さ。そうでなきや、俺たちみたいなガキに人類の存亡を任せるわけがない」

「何言ってるのよ！エヴァのパイロットは、選りすぐられたエリートなのよ！」

「そんな風に思いこまされてるアスカ、命令に従ってエヴァに乗ること以外に価値観を持たなかったレイ、そして、三歳のころから、ここに来るまでひたすら孤独を味わわされた俺……まともじゃないよ、どう考えたって」

沈黙が辺りを支配する。見ると、レイも箸を休めてこちらをみている。少し顔が青い。

しばしあつて、アスカが口を開いた。

「じゃあ、なんでアンタは、そこまで判っててエヴァに乗ってるのよ」

「とりあえず今は、自分の居場所を守るため、だな」

「それも利用されてるかもしれないじゃない」

「そうかもな。というか、十中八九そうだろう。だから、そのデメリットが大きくなったら、逃げるさ」

それを聞き、アスカは半秒ほど呆けたような顔をすると、はあ、とため息を吐いた。

「……アンタと話していると、なんだか全てがどうでもいいって気になってくるわ」

「そりゃいいことだ。それくらい気を抜いてた方が楽でいいぞ」

「はいはい、わかったわよ」

右手を俺に向かってひらひらと振りながら、アスカは去っていった。

「シンジ君」

替わって話しかけてきたのはレイだ。いつもと同じ表情だが、少しだけ視線が厳しい。

「今の話……」

「ん、ああ。レイはもしかしたら嫌な気分になったかも知れないな。ごめん」

謝罪する俺に、しかしレイはかぶりを振った。

「シンジ君が悪いわけじゃない。あなたの言うとおりだと思う。私も利用されている……でも、その頸木から外れたら、私はきつと、どうしたらいいかわからない」

「こころもち、縋るような視線を俺に向けるレイ。」

「それは俺に聞くことじゃないだろ、レイ」

「え……」

それが、以前レイに感じた違和感の正体なのだと、俺は突然悟った。俺にくつついて、俺の視点、俺の価値観だけでモノを考えさせていれば、レイにとってはゲンドウが俺に替わるだけだ。

「わからなくても、自分で考えるんだよ。レイにとって何が大切か、自分が何者になりたいのか……司令も、俺も、関係なくね」

レイはしばし考えた後、無言のまま、席を立った。

やれやれ。

あまり説教じみたことは、慣れないので疲れる。とはいえ、本編のシンジとアスカは、お互いに本音を語らなかつたからこそどんどん拗れていったんだろうし、喋らないよりはいいのかもしれない。

不意に、元の世界の『俺』を思い出す。向こうで、『俺』がこれだけ喋っていれば、どんな風になってただろうか。

そんなことを考えながら、俺はうどんをすすった。

うどんは延びきっていて、不味かった。

第十六話 リフォーム 前編

中学校からそれほど遠くない、繁華街にあるゲームセンター。俺、トウジ、ケンスケの3人が揃って遊んでいた。学校帰りのため、俺とケンスケは制服、トウジはいつもの黒ジャージだ。

それは、極ごく日常的な風景。だが、ネルフでの訓練が続いた後は、こんな風景でも現実感が酷く希薄なものに感じられる。果たして、これが正常なのか、生死を常に意識しているネルフでの訓練生活の方が正常なのか、時々判らなくなるのだ。

こんな環境で小さい頃から育てば、おかしくもなるよな……俺はそんな事を考え、「こんな環境で育った」二人の少女に思いを馳せる。

「何やシンジ、元気ないのう」

ケンスケがシューティングゲームに興じている傍らで物思いに耽っている、トウジがニヤニヤしながら話し掛けてきた。

「惣流に冷たくされて、落ち込んでるんじゃないか？」

などと、画面に目を向けたままケンスケが茶化すので、俺は大げさに鼻で笑った。

「は、何言ってるんだよ。トウジじゃあるまいし」

「そりゃどついう意味じゃ！」

「そのまんまの意味だよ」

怒るトウジに笑う俺。

実際のところ、ケンスケが言うほどアスカに冷たくされてる訳じゃない。ただ、以前のように不自然にベタベタしてくることがなくなっただけだ。そして、俺以外に対する態度にも変化が見られる。

「ワシは、あないな乱暴な女は好かん」

猫かぶりは相変わらずだが、洞木さんやトウジ、ケンスケといったあたりに対しては、だんだんといつもの姿を見せるようになってきた。いつもの、と言っても、ネルフでのような追い詰められた感

じでもない。言ってみれば、どこにでもいるタカビー女、といったところだ。

「よつく言うよ。『オマエ、あの転校生とどないな関係なんや?』とか言つて凄んでたくせにさ」

「やかましいっ! あのとときのワシはどうかしてたんじゃ。あないな性格ブス、もう知らんわ!」

ただ、トウジにだけは普通よりも辛くあたる。それが、今のトウジのアスカ評に繋がっているのだが……理由あつての態度だとは、彼は気づかない。

「うっ」

不意に殺気を感じ、俺は身構えた。

「どあ〜れ〜が〜性格ブスですつてえ〜?」

そこには金髪の鬼がいた。

「なっ! そそそそ惣流!?!」

「い〜い度胸してんじゃな〜い、このジャージ男お」

「い、いや、今は、その、は、話せばわかるっ!」

「問答無用っ!」

足下には、スタボロのジャージ姿の少年が横たわっている。

俺まで数発被弾してるのはなぜだろう?

「アンタも笑つて聞いてたんだから同罪よ」

「さいですか……」

レイと洞木さんもやってきた。3人で買い物帰り、俺たちを見かけたのだという。洞木さんは、地に伏すトウジを見つけて目を剥いた。

「ちょ、ちょっとアスカ、何やってるの!?!」

誰がやったか確かめず、いきなりアスカに食つて掛かるあたり、

洞木さんも人をよく見てる。

そんな洞木さんを見て、アスカは楽しそうに言った。

「なによヒカリ、そんなにこのバカが心配なら、ついててあげたら

「？」

「え……でも」

「イーのイーの。アタシたちは、シンジと帰るからさらっと無視される俺の意志。」

「ホラ、シンジ、ファースト、行くわよ！」

そう言っつて、くるりと踵を返した。

うーん、アスカらしいと言っつか、なんと言っつか。

「え、えと、その……あ、ほら、鈴原、しっかりして」

トウジに肩を貸して立たせる洞木さんを見届け、俺はアスカとレイを追いかけた。

ん？何か忘れてるような……まあいいか。

「まあったく、ヒカリもじれったいのよね」

先頭を歩くアスカは、前を向いたまま、誰にもなくしゃべった。

「せっかく、このアタシがワザワザ嫌な女演じてやってるのにさ」

そう。アスカがトウジに辛くあたっているのは、トウジに想いを寄せる洞木さんのためなのだった。もっとも

「演じてやったつて……素を見せただけじゃねーの？」

「何か言っただあ？」

「……いや、別に」

彼女がこうやって、無理せず素の自分を見せるようになったのは、そこに俺がいたからではないだろう。おそらく洞木さんが原因ではないかと思う。

いつもニコニコしながら、裏でみんなを一段見下していたアスカ

だったが、クラス委員という立場からいろいろ世話を焼いてくれる洞木さんには始めから一目置いていた。あの真面目な少女は、考えてみれば不思議なキャラクターである。ペアルックを見ただけで「フケツ」とか言うような、よく言えば純粹、悪く言えば潔癖な少女であるが、一方でやたらと世話焼きだったり、意外なリーダーシップを発揮したりする。

アスカにとっては、こういうある種の母性的な部分に、何か引かかるものがあったのだろうか。

洞木さんの方は、始めこそトウジのこともあって、あまり友好的な態度ではなかった（男子のこういう態度については、だいたい女子の方が感づきやすいものらしい）が、ある時期を境に急に親しくなった。そういえば、アスカがトウジにやたら乱暴に振舞うようになったのも、同じ頃だ。何か女同士で手打ちがあったのかもしい。

「ちょっとシンジ、何ニヤニヤしてんのよ」

アスカが訝しげな顔で俺を見ている。

「あ、いや、何でもない」

「気持ち悪いやつねえ」

「……まあ、それは置いといて、トウジももうアスカにどうこうって気持ちはないだろうし、もうちょっと手加減してあげたら？」

「うーん……なんか、アイツの変な日本語で悪口言われると、殴らずにいられない、っていうか……」

「おいおい」

「他傷行為……」

「は？」

ぼそり、とつぶやいたレイに、二人とも振り向く。

「自閉症、精神分裂症などの症状のひとつ……他傷行為を抑えられなくなるのが頻発する……式号機パイロット、あなた、精神科に行ってみたほうがいいわ」

アスカの形のいい眉が、ひくひくと震える。

「ファースト……アンタ、ケンカ売ってるの？」

「ちよ、ストップストップ！」

慌てて止めに入った。言っていることは酷いが、レイに悪意はない。純粹に心配しているのだ……と、思う。

「相変わらず仲悪いんだな……あ、でも、今日は珍しく一緒に買い物してたんじゃない」

「ヒカリがどうしてもって言うからよっ！」

「はあ……そうスカ」

「んなことよりっ！」

アスカは、左手を腰に当てて、右手でびしっ、と俺を指差してきた。

「な、何だよ」

「今日もアンタんち行くわよ！」

「またかよ……」

アスカは、ときどき俺の家に遊びにくる。それだけなら別に構わないが、夕飯をたかって、稀に泊まっていくことすらある。いくら中学生とはいえ、男の一人暮らしの部屋にほいほいと泊まるか？な
どと思うが、理由を聞くと納得してしまうのだ。

「あんなところに寝てたら、体にカビ生えちゃうわよっ！」

アスカは、結局ミサトさんの家に住むことになったのだ。ミサトさんが強引に引き取ったと聞いた。そして、相変わらず散らかし癖は直らないらしい。

「今日もミサトは徹夜らしいしね。あんな部屋に一人でいるなんてゴメンだわ」

「アスカも少しは掃除くらいしてあげればいいのに」

「嫌よ、めんどくさい」

ミサトさんが帰れない日は大抵、アスカは俺や洞木さんの家に泊まりこむ。中学生にしては問題のある行為だと思うが、その理由を誰よりも痛感しているのは、他ならぬ保護者本人なので、何も言わ

れることがないのだった。そもそもネルフの作戦部長に、子供の面倒を見る余裕なんてあるわけがないのだ。

寂しいからって、ペットみたいに人を預かるのはやめてくださいよ。面倒見ることもできないクセに

何度ミサトさんにそう言おうと思ったことが。当事者じゃないから、あんまりキツイことも言えないけど。

ふと、後ろから妙な視線を感じて振り返る。深紅の瞳が、俺とアス力を等分に見つめていた。レイも誘おうかと声をかけようとして、ひとつ妙案を思いついた。

「なあ、アス力、たまには趣向を変えない？」

怪訝そうな表情になって立ち止まるアス力。俺はアス力を見て、次いでレイを見た。

「レイの家、行ってみないか？」

第三新東京市の中心部から少し離れた一角に、「再開発指定地区」と呼ばれるエリアがある。古くは団地の建ち並ぶ住宅地だったらしいが、市中心部の要塞都市機構に組み入れるために「再開発」を始められ、住民は全て立退かされた。だが、本格的に新都市の建築が始まったところで、使徒の襲来によってそれどころではなくなり、放棄された。そんな街に、レイの住まいがある。

古くなつたマンションと、建築途中で放棄された建物のなり損ないが建ち並ぶ。さび付いた重機と、遠くに聞こえる工事の音が、うら寂しさをより強く演出している。人の気配はない。

「ファースト、アンタ、寂しいところに住んでるのね」

道を歩きながら、アス力が漏らす。俺も初めて来たが、漫画やアニメである程度知っていたので、さほど驚くことはなかった。そう言えば、漫画のシンジは、もっと早い時期にレイの家に行ってたんだよな。確かそのとき、シンジが勝手にレイの部屋に入って、風呂

から裸で出てきたレイに驚いて、二人して転んで、レイの胸に手をつけて……

「ちよっとシンジい、また何かニヤニヤしてるわよ。ホント大丈夫？」

「あ、え……」

「……妄想癖？シンジ君も、精神科へ……」

「れ、レイ、違うよ」

「何でもいいわよ。いつまでもこんなホコリっぽいところに突っ立ってたくないわ。ファースト、さっさと案内しなさいよ」

「……こっちよ」

そう言っつて、さっさと行ってしまふ少女二人。俺も慌てて追いかけた。

「何よ、これ……」

絶句するアスカ。無理もない。知っていた俺も、実際に見て言葉を失った。

打ちつぱなしで十分に表面処理されず、ザラついたコンクリート壁。フローリングもカーペットもないコンクリート剥き出しの床には、所々ベトベトしたものがこびりついている。置いてあるものは、簡素なパイプベッドと小さなタンス、2ドアの冷蔵庫。そして、血まみれの包帯が詰め込まれた、ダンボール箱。レイの生活空間にあるものは、それだけだった。

しばし呆然としたアスカは、我に返ると、レイに食ってかかった。「アンタ、何でこんなとこに住めるのよ？」

レイはきよとんとした顔で、答える。

「別に、問題ないわ」

「問題あるわよっ！アンタ寂しくないの？大体誰よ！こんなとこに住まわせたのは！」

「……碇司令」

その名を聞いて、アスカは、はっ、と目を見開いた。次いで、怒りの表情へと変わっていった。レイの両肩を、ぐっつと掴む。

「ファースト、アンタ、今すぐここから引越すのよ。ミサトに言えば、きつと引き取ってくれるわよ。アタシと住むのが嫌なら、シンジのアパートにも空き部屋あったわよね？とにかく……」

「別に、引越す必要はないわ」

「アンタバカア？こんなとこ住んでるから、そんなに無愛想なのよアンタはっ！こんな、こんな寂しいところに住んでちゃだめよ！絶対だ！」

徐々に語気を荒げるアスカ。様子がおかしい。

「おい、アスカ、どうしたんだよ」

「うっさい！シンジは黙ってて！」

俺を押しつけ、必死の形相で説得するアスカに、しかしレイはかぶりを振った。

「私は、ここにいる」

「何でよっ！？」

「……司令が、選んでくれた場所だから」

「ちよっ……アンタ、ホントにバカね！こんなボロボロの部屋あてがわれて、恩感じてるんじゃないわよっ！」

それを聞いて、レイの目にも怒りがこもる。

「あー、ちよつと待ってっの！二人とも」

俺は慌てて、二人の間に入った。そしてレイに話し掛ける。

「レイ、ひとつ聞くけどさ、ここにいたいっていうのは、命令だからっ」

その言葉に、レイは少しだけ訝しげな顔をしつつも、

「いいえ。そんな命令は受けてない。引越す必要があれば言えと言っていた」

「そんならっ！」

尚も喚こうとするアスカを手で制し、俺は言った。

「んじゃ、ここに残りたい、つてのはレイの意思なんだね？」

「！……そう、そうかもしれない」

俺の言わんとすることに、レイも気づいたようだ。

「だとさ。それならそれでいいんじゃないか？アスカ」

「わかんないわよ！」

「いくら寂しくても、レイにとっては大切な場所なんだろう。生活が変わるのもいろいろ面倒だし、引越すなんて無理にさせるもんじゃないよ」

「……でも」

「ん？」

レイは立ち上がって、灰色の壁に歩み寄り、手を添える。

「最近、この壁が冷たいって、思うの」

そう言っつて、本当に冷たいものに触れるような顔をした。

「ホラ見なさい！だから引越しなさいって言っつてんのよ！」

「いや……そういうことなら、引越すよりもいい方法があるよ」

「はあ？」

アスカは、もう何がなんだか判らない、といった顔で俺を見る。

「とりあえず、と……」

俺はカバンからノート型端末を取り出し、ウェブブラウザを起動させた。そのウィンドウには、検索サイトの煌びやかなページが踊っている。

「……何をするの？」

「んー？ちよつと待ってな」

画面を覗き込んでくる二人の少女を尻目に、検索ワード欄に文字を入力する。

「へえ〜。壁紙ついているんな柄があるのねえ」

検索サイトで、近くにある工務店を探し、そこに三人で出向いた。俺は、どうせなら今の部屋に壁紙やカーペットをひいて、きれいな部屋にしよう、と提案したのである。部屋を選ぶより簡単だし、自分好みで自由に決められるのがいい。金がかかるだろうけど、幸い、エヴァパイロットとしての給料のおかげで、結構な貯金もある。ちなみに、アスカは俺の給料の額を聞いて、ミサトさんと副司令に掛け合っただけで強引に同額の給料を認めさせた。レイについては俺がアスカと俺に認めてレイには認めないのか、と、これも強引に副司令にねじ込んだ。ゲンドウがすんなり認めたのが、意外といえば意外だったが……。

「ええ、ええ。このご予算でしたら、かなり上質なものををご用意できますよ。なんでしたら、お客様がデザインされたものを特注で作りますこともできます」

中学生ばかりという客に、店員は始め怪しむような視線を向けてきたが、ネルフのIDを見せた途端、VIP待遇に変わった。この街でのネルフの権威は、計り知れないものがある。

「ええつとお〜。あ、これなんか可愛くていいわあ」

レイそっちのけで、アスカはカタログをとつかえひっかえ物色している。

「あ、こっちもいいわね。ミサトに言っただけで変えさせようかしら」

はしゃぐアスカを尻目に、俺はレイと一緒に壁紙のカタログを眺めている。

「どう、レイ。気に入ったのはあった？」

「これ」

「ん？」

レイが指したのは、ほんのりピンク掛かったクリーム色の、無地の壁紙だった。飾り気のない。でも、この色に囲まれたらきっと暖かな気分ですらあがるだろう、そんな色だった。

「お目が高いですねお客様。それは環境ホルモンを出さない特殊な

加工をしております、また汚れにも強く……」

営業の長い宣伝文句に耳も貸さず、レイはその色に見入っている。

「他のも見てみる？」

「ううん、これがいい」

「そう。じゃ、これにします。次はカーペットの方選びたいんですけど」

「あ、はい。畏まりました」

壁紙とカーペットの銘柄を決めた後、工務店の作業員を連れてレイの部屋へ戻った。

作業員は、部屋を見て目を丸くし、次いでレイに同情の視線を向けた。そして、部屋の寸法を一通りの測り終わると、

「工事は明後日になるよ。最高の仕上がりにしてみせるからな、期待してくれよ」

男臭い笑みを見せて、帰っていった。

「今日は、いろいろありがとう……」

三人で簡単な食事をとったあと、俺とアスカは一先ず帰ることにした。

「いいって。それより、工事が終わったらまた来るからさ」

「うん」

「壁紙もいいけどねえ、アンタ少しモノを買いなさいよ。不便じゃなきゃいいってもんじゃないでしょうが」

アスカがごちる。

「……よく、わからない」

「まあまあ。そういうのは本人が必要だと思わなきゃ、邪魔なだけだろ？」

「そうだけど」

「そんじゃ、今度みんなで購入物にでも行くかうか」

「なんか奢りなさいよ」

「……なんでそうなるんだよ」

「アンタバカア？女の子誘うんだから当たり前でしょ」

「ああもう、わかったわかった」

話を打ち切り、レイに向き直る。

「ま、そーゆーことだから。また明日」

「それじゃ……」

「……ねえシンジ、アンタさ、司令が嫌いなんじゃなかったの？」

帰り道、アスカはそんなことを言い出した。

「ん、まあ、そうだな。話したっけ？」

「アンタの普段の様子見てれば判るわよ……それじゃどうして、アイツがあそこにいたって言ったとき、何も言わなかったの？」

アスカはあの時、あんなところにレイが押し込まれているのは、司令のネグレクトの類かと疑ったようだ。まあ、普通はそう思うだろう。だから、司令に隔意を抱く俺が、あの状況をあっさり認めることが、アスカには不思議だったらしい。

「うーん……何となくね。レイを急にあの場所から引き離すのは、よくないように思えたんだ」

「なんでよ？」

説明が難しい。なんとなく、で動いちゃったからなあ。

「何ていうかさ、レイって、すぐ過去が希薄な感じがしない？」

「……あんまり漠然とした日本語使われても、わかんないわよ」

「うーん。そうだなあ、端的に言えば、思い出が少ない、ってことかな」

平易な言葉いいなおすと、アスカは少し考え込んで、言った。

「思い出が少ない……判る気がするわ。それじゃアンタ、その少な

い思い出を大切にさせてやろう、みたいな理由だったワケ？」

「んー……まあ、そういうことになるのかなあ」

俺自身よく判っていないので、返事も曖昧になる。

「はあ……アンタねえ」

嘆息しつつ、アスカは俺を睨んだ。

「前々から思ってたけど、人の事を子供扱いすんのやめなさいよね。ム力つくのよ、そういうの」

「えっ、そう、かな」

彼女の言葉に、ドキリとする俺。

「自覚がないのが一番タチ悪いわ」

「……ごめん」

謝った。

「あの天然ボケはともかく、この天才美少女アスカ様に対して、失礼もいとこだわ」

その言い草に、俺は思わず噴出してしまふ。

「な〜に笑ってんのよ、反省してないわねっ！」

謝ってはみたものの、やっぱり子供にしか見えないよなあ。

そのままわいわいと騒ぎながら歩いてしたが、ふっ、とアスカが神妙な顔をして黙った。

「どうしたの？」

「……ファースト、あの子、あのままなのかしら」

「ずいぶん、レイのことに気に掛けるじゃない？」

「なっ、アタシは、別に……」

慌てて否定しようとするが、それを途中で止めてしまった。

「どうしたの？」

「……あのね、あの子の部屋、……ママの部屋に似てた気がしたのよ」

「ママの部屋？」

それは、もしかして。

だが、アスカは頭を振って、

「……ゴメン、今の、忘れて」

話を打ち切った。

「あ、ああ……」

しかし、彼女の顔から憂いは消えない。その脳裏に浮かぶものと、レイを重ねて見ているのだろう、というのは想像できた。だから、俺は努めて微笑みながら、言う。

「大丈夫だよ、レイは」

楽観的な俺の言葉を聞き、アスカは不思議そうな顔をした。

「洞木さんや、ケンスケや、トウジや……アスカが、いるから。エヴァより大切なものを、みんなという時間の中で、見つけられる。そんな気がするんだ」

アスカもね。心の中で、付け足す。

「そうかもね……そうだと、いいわね」

それが聞こえたのか聞こえなかったのか、アスカが呟く。

「そんな時間を、アタシたちは、守らなくちゃならないのよね」
呟きはただ、夜空に吸い込まれていった。

第十七話 リフォーム 後編

アスカをミサトさんの部屋まで送った後、俺は一人で自宅に戻った。時計を見ると、もう二十三時を回っていた。ひとつため息をついて、朝淹れたコーヒーの余りをコンロにかける。カップ一杯分とちよつとのコーヒーはすぐに温まり、香りをほのかに放出しはじめた。その香りに刺激され、眠気にボヤけた俺の頭は、ほんの少しだけクリアになる。

今夜はミサトさんは帰らないらしい。そんな日は決まって、アスカは洞木さんの家か俺の部屋に泊まりに来ようとする。俺の意思などお構いなしに、だ。だが、今日は素直に部屋まで送られた。一人で考えたいことがあるから、と言っていた。

誤解して欲しくないが、彼女が俺の部屋に泊まると言っても、やましいことは何一つない。信じてもらえないかも知れない。俺が第三者だったら信じないだろう。が、実際、夕飯を振舞って、少し世間話をして、ゴロゴロしながらTVを見て、アスカがソファで寝入るのを確認すると、毛布をかけてやって、俺は寝室に引っ込んで眠る。それがいつものパターンだった。

それはともかくとして、今日、彼女が素直に自室に戻ったのが少し不思議だった。レイの部屋を見たのが、原因だろうか？

アスカが俺の部屋を訪れる度、それをアスカは、声高に宣言していた。レイの前では特にそうだ。彼女が、俺に対する恋愛感情の類は欠片も抱いているとは思っていない。彼女は未だ加持さんに淡い恋心を抱いているようだし、俺のことは口うるさい生意気な同僚、くらいにしか思っていないはずだ。となれば、ことさら俺の部屋に来たがる理由は、レイへの嫌がらせに他ならないだろう、そう思った。事実、アスカがそう告げると、レイは決まって悲しそうな顔をしていた。

そんな風にレイを嫌うアスカに、何かしらの変化があれば、と淡い期待を抱きつつ、レイの部屋に連れて行ったわけだが、その効果はあったのだろうか？ ファーストチルドレン、ネルフ幹部の覚えめでたい零号機パイロット、命令なら何でも聞く人形女、そういう記号での認識が、少しでも変わってくれば、とも思う。そういう無理解から生じるレッテルはアスカにとっても気分のいいものではないだろう。何しろレッテルを貼るのも彼女自身だ。レイに対する評価と見せかけて、その実は彼女の劣等感の投影に過ぎない。そんなものとは関係ない綾波レイという人物を素直に見られれば、無駄に劣等感を刺激しなくても済むはずだ。

コンロの上のコーヒースーバが、シュワシュワと微かな音を立て始めた。まだ少しぬるいが、俺は火を止め、カップにコーヒを注ぐ。砂糖とミルクを入れようと手を伸ばしたが、なんとなくその手を引っ込めた。

「……俺のやってることも、突き詰めれば同じか」

一人ごちながらコーヒをすすする。一日置いたモカは、酷く酸っぱかった。

翌日の学校。レイはネルフでの実験のため欠席していた。

空席に目を向けつつ、アスカが話し掛けてきた。

「ファースト、今日休みなんだ」

「ん、ああ、聞いてない？今日は……」

欠席に理由をアスカに教えようとすると、彼女はそれを遮った。

「知ってるわよ。実験でしょ。……でもさ、アタシたちは呼ばないで、アイツだけ、ってのはどういふつもりかしら」

その様子を見て、俺は少し可笑しくなった。妬みとか懷疑以外のものが感じられたからだ。

「さあねえ。俺もいちいち上の意向を伺ってる訳じゃないし、基本的には下りてきた命令に従っただけだからなあ」

「何よそれ。くたびれたサラリーマンみたいなこと言って。アンタ心配じゃないの?」

「今までだって何度かあつたる?今更心配したってしょうがないじゃないか」

「……もういいわよ。フン」

それだけ言うと、アスカは席を立った。

レイだけが対象となる実験、となれば、アニメの内容から推測すれば、エヴァのオートパイロットシステムであるダミーシステムの開発か、さもなければゲンドウの計画の根幹に関わるような実験だろう。あるいは、単に身体の「メンテナンス」かもしれないが。正直なところ、どんなことをされているか考えると心が重くなってくる。だからといって、今の俺にはどうすることもできない。拒否するようレイに言ったところで無駄だろう。むしろ危険かもしれない。策を考えるのだけど……思いつかない。少しイラつくのを抑えていた。

さらに翌日。

レイは登校してきたが、午前の授業が終わると、部屋のリフォーム工事の立会いのために早退した。

「アスカ」

「なによ?」

「今日、レイの部屋、見に行くだろ?」

「ん、うん…そうねえ」

歯切れが悪い。いろいろ考えたせいで、顔を合わせづらいのかもしれない。そう訊いても、本人は否定するだろうけど。だから、俺

は別の話をすることにした。

「レイは、さ。アスカのことを羨ましがってるよ」

「いきなり何よ」

「多分アスカだけってわけじゃないんだろうけど。弐号機パイロットは、たくさんの絆を持っている。レイはそう言っていたよ」

「絆……？」

アスカの眉が、ひそめられる。

「多分ね、他人に積極的に関われる、関わろうとするアスカが羨ましいんだと思う。レイは……あんな風だから。口下手だし、よく人と話しながら、黙り込むだろう？あれって困ってるんだよ。何を話せばいいんだろう、ってさ」

「よく見てらっしゃること」

「そんなんじゃない。俺も人付き合いがうまい方じゃないからね……解る気がするんだ」

そう言うと、アスカは大きいため息をついた。

「……はあ……ンで？シンジ様はアタシにどうしろとおっしゃるの……で？」

「そう尖るなよ。俺はレイとアスカに仲良くして欲しいだけさ。少なくとも、普通に話して欲しい。レイのためだけじゃなくて、アスカのためにも言ってるんだよ」

「なんでアタシのためなのよ」

「エヴァのパイロットなんて特殊な立場にいる人間で、たった二人の女子だろ？女子同士でないと相談しづらい悩みとかだって、あるんじゃないか。それに……」

「それに？」

勢いで話していたが、俺はここにきて躊躇した。これを言ってしまうば、アスカにも危険が及ぶかも知れない……だが、何も知らず壊されるよりはマシではないだろうか？そう思った。後になって考えたら、酷く欺瞞的な考えではあったが。

「レイは、俺たちの中で間違いなく、一番エヴァを知っている。い

るいろ情報が得られるんじゃないか？」

アス力は驚いたような顔をして、それから胡散臭そうな顔をした。

「へー……見違えたわね」

工事の済んだレイの部屋は、外の荒涼とした世界から切り離されたように、暖かな雰囲気醸していた。

淡い暖色系の壁紙に、濃いブラウンのフローリング・カーペット。どちらもレイが選んだものだ。カタログで選んでいたときは、この組み合わせはどうか、と思ったのだが、今こうやって実物を見ると、レイのセンスが正しかったと強く感じる。絶妙な色合いだった。

「素敵な色ね、綾波さん……」

「何や、綾波のイメージと違うのう」

「いや、いいよ。綾波のまた違う一面が垣間見える。暖かな色調の中に佇む綾波の、涼しげな蒼髪……絵になるねえ」

つれてきたいつものメンバーは、それぞれ感動したり驚いたり写真撮ったりしている。

接着剤の微かな匂いが、その部屋の幼さを物語る。それは、こころもち照れたような表情で佇む、レイの心の匂いにも思えた。

「この壁紙、誰が選んだの？」

「私」

洞木さんの問いに、おずおずと答えたのはレイ本人だった。

「綾波さんが？自分で？」

「うん。シンジ君にも手伝ってもらった」

「そう……綾波さんってセンスいいのね」

壁紙の色がよほど気に入ったのか、洞木さんはしきりに感動して部屋を見渡している。

「でもなあ……ちょっと物が少なすぎないか？これまでもここに暮らしてたんだろ？」

ケンスケが、ファインダーから目を外して言う。

「別に、必要ないから」

「……そ、そうか？」

少し鼻白むケンスケと、苦笑する洞木さん、トウジ。

そして、これまで沈黙していたアスカが、口を開いた。

「あんったねえ……どーしてそう無愛想なのよ？」

「アスカ？」

洞木さんが心配そうな顔で、アスカとレイの顔を交互に見る。

「そんなんじゃ、ケンカ売ってるようにも聞こえるわよ」

その辛らつな指摘に、黙り込むレイ。

「お、おい、惣流、言い過ぎちゃうか」

「そうだよ、俺は別に気にしてないよ。慣れてるからさ」

トウジとケンスケが泡を食って止めに入るが、止まりそうにない。

「どう……言えはいいの？」

尋ねるレイに、

「アンタバカア？それぐらい自分で考えなさいよっ！」

答えるアスカ。

「あなたの方が、ケンカを売っているように聞こえるわ」

ツッコむレイ。

「……ぬぁんですってえ〜？」

「アスカっ！？ストップ！」

瞬間沸騰したアスカを、洞木さんは慌てて止める。

「なぜあなたのように乱暴に喋る人が、人と関わりつつづけることができるの？」

「綾波さん！」

火に油を注ぐレイ。洞木さんは泣きつ面に蜂だ。

片や、怒りの形相をその顔に浮かべ、今まさに挑みかからんとす

るアスカ。片や、無表情の中に鋭い眼光を放ち、静かに立つレイ。

トウジもケンスケも震え上がっている。というか俺もだ。

「……レイ……アンタとは一度、とことん話し合わないといけない

……」

「ようね……」

「そう……わたしも惣流さんには言いたいことがあった……でもここでは駄目」

「そうね。機密だなんだって余計な縛りがない場所の方がいいわ……ヒカリ、離してくれる？」

「えっ、あ……」

未だアスカの腰につかまっていた洞木さんは、慌ててその手を離した。

「ふうっ。……アンタたち、悪いわね。アタシとレイは、これからネルフ本部に行くわ」

「ごめんなさい、みんな。また、来てくれる？」

「お、おう」

カクカクと応答する一同。

そして、二人は出て行くこととする。

「あ、俺も……」

慌てて俺がついていこうとすると、

「アンタは来るんじゃないっ！」

「シンジ君、今日は来ないで」

声をそろえて止められてしまった。

「あ、ああ、そうか？」

戸惑いつつ返すと、二人は再び踵を返した。

「それじゃ」

あとには、呆然と佇む四人が残された。

「えーっと、……なんやったんや、いつたい」

「ふ、ふええ、怖かったよう……」

洞木さんは、今更ながら涙目になっている。

「あ、いいんちょ、大丈夫かいな……しかしあの二人、仲悪いにも程があるわ」

「うーん……」

おとといのアレで、少しでも好転することを期待してたんだが……
……なんとなく悪化したような……

「あー、でも、そうでもないんじゃないか？」

そう言ったのは、ケンスケだった。

「あ？どういこうしちゃ？」

「だってさ、今まではホントに険悪っていうか、お互いけん制して
るような雰囲気だったじゃないか。今日のはお互い率直っていうか
……何と言つか、ちょっと違う気がするんだよなあ」

「うーん……」

トウジは考え込む。

「それに……気づいたか？」

「あん？」

「あの二人、名前で呼び合ってたの、俺は初めて見たぜ」

あ……

「そう言えば、綾波さんもアスカも、『ファースト』とか『式号機
パイロット』とか呼び合ってたもんね」

洞木さんも、得心がいった、という顔をした。

「あん？そうだったかのう」

「……バカ鈴原……」

一人ボケをかますトウジに、一同は頭を抱えた。

次の日。

レイモアスカも普通どおり登校してきたが、二人とも妙にスッキリした表情だった。和解したのか、とも思ったが、相変わらず、二人とも積極的に話そうとはしない。何も変わっていないように見えた。ただ、お互いを名前で呼んでいるのを除いては。

放課後になると、アスカが話し掛けてきた。

「シンジ、今日、アンタん家行ってもいいでしょ？」

「ん、ああ……別にいいけど」

「そう。っと、そうだ……」

何かを思い出したアスカは、くる、と身体を捻った。その方向には、レイがいた。

「レイ、アンタも行くでしょ？シンジン家」

驚いた。

アスカが、レイを誘ったのである。それも、俺の家へ行くのに。

「え……その」

戸惑うレイに、アスカはさらに身を乗り出す。

「行くでしょ？」

「……うん」

「よろしいつ。そんじゃ、帰るわよ！」

そして、アスカは元気よく席を立った。呆然と見送る俺。

「シンジ君、行かないの？」

後ろから声を掛けてきたのは、カバンを両手で持ったレイだった。

「……あ、ああ、行くよ、うん」

俺は戸惑いつつ、カバンを抱えて席を立った。

アスカとレイが何やら話すのを後ろから眺めつつ、俺は戸惑いが喜びに変わるのを感じた。ただ一つ、不安を残して。

明日からまた、他の男子から恨みを買っただろうなあ

第十八話 種

「おはよーさん」

「うーす」

トウジのいつものようにハイテンションな挨拶に、俺は省エネな挨拶を返す。昨日の実験が遅くまでかかったため、寝不足気味だ。

「なんや、今日は元気がないのう。また惣流にイビられたんか？」

「人聞きの悪いこと言わないでよ！そいつが辛気臭いのはいつものことですよ」

教室の反対側の隅から、アスカがでかい声でツツコミを入れてきた。

「げ、地獄耳……」

その方向を見ると、アスカの他にレイ、洞木さん、他に数人の女子が談笑していた。アスカとレイが同じ会話の輪に入っているのも、最近あたりまえの構図になってきた。

アスカとレイのあの一件から二週間が経った。レイの世間知らずで危なっかしいところは、アスカの姉御肌なところに妙にマッチしていたらしく、二人のわだかまりが解けた後は、アスカが洞木さんとともに世話を焼く様子を見せるようになった。レイの、「碇シンジを護衛する」という任務はまだ続いているようで、よく俺にくっついて回っているが、アスカとともに行動することも多い。口数で言えば俺という時よりも随分多くおしゃべりしているようだ。俺としては多少寂しさを感じるが、これがあたりまえの状況なのだろう、とも思う。

「それにしても、惣流も綾波もずいぶんクラスに馴染んできたなあ」

「あ、ケンスケもそう思うか」

後ろからの声に、俺は答えた。

特にアスカだ。レイの「おせっかいなお姉さん役」を演じているうちに、以前のような不自然な振る舞いは影を潜め、徐々に誰にで

も素を見せるようになった。高飛車で、乱暴で、闊達で、明るい。そんなアス力を敬遠する人間もいたが、好ましい変化と受け止めた人間も多かった。良くも悪くも、アスカとレイの漫才のような会話は周囲との壁を無くし、彼女らが「普通の友人」を得るのに大いに役に立った。

そんなことを考えながら彼女たちを眺めている俺がよほどニヤついていたのか、ケンスケが少しからかうように聞いてきた。

「随分と嬉しそうだな」

「まあ、そりゃね、知り合いが孤立してカリカリしてるよりは、あややって笑顔を見せてる方がいいだろ」

「ふーん」

答えた俺に、なぜかケンスケはニヤリ笑いを浮かべ、近づいてきて声を潜めた。

「……で、どっちなんだ、シンジ」

「あ？」

言葉の意味がわからず振り返る俺に、さらにケンスケは声を潜め、言った。

「だから、惣流と綾波、どっちが本命なんだって訊いてるんだよ」

「本命ってお前」

すぐにそういうところに話が飛んでしまうことに、俺は苦笑した。

『俺』が中学生のときにも覚えがある。

「けどな、シンジ」

トウジまで参加してきた。

「お前、他のクラスの男子からは二股かけてると思われとる。二人とも人気あるからのう。センス、随分恨み買つとるで」

「そうそう。せめて、どっちかに態度はつきりさせといた方が、むやみに敵を増やすこともなくていいと思うぜ」

「そりゃ、確かに二人と一緒に行動することは多いけどさ、別にどっちかと付き合ってるってわけでもないよ。気がある奴は直接彼女らに告白でもすれいいじゃないか」

二人とも、ラブレターの類は多く受け取っているようだが、直接誘われたり、告白されたりということは、ほとんどないらしい。

「実際にコクって、俺の名前を出されて断られたっていうんならともかく、直接言う勇氣がないからって、俺を恨んでごまかすのは筋違いだろうよ」

そうまくしたてて、無然として見せた。今度はケンスケの方が苦笑した。

「まあ、そうマジになるなよ。あいつらだって本気で惚れてるなんてのは意外と少ないんじゃないかな。アイドルのファンみたいなもので、遠くで離し立てたり、スキヤンドルの相手に嫉妬して見せるのが楽しいのさ」

ケンスケはときどき、妙に達観したような言い方をする。

「そんなもんかねえ。ま、何にしる、俺にはアスカにもレイにも、恋愛感情の類はないよ。断言していい」

「ふーん、つまんねーの」

「ま、センスは意外と硬派やからのう」

「……お前らも、本人の前で人をダシにするのはやめてくれ」
ため息を一つついた。

「修学旅行ねえ、日本の学校にも意外とナイスな習慣があるじゃない」

目を輝かせて、今日配られた「修学旅行のしおり」をペラペラと捲りながらシミジミ語るのは、アスカである。

「行き先が沖縄ってのも素敵ねー、懐かしいわ、ああ、早く行きたい」

「へえ、アスカ、沖縄に行った事あるんだ」

そう訊ねると、アスカは嫌そうな顔をして答えた。

「二年くらい前にね。だけど、そのときは訓練訓練で、基地から外

に出してもらえなかったわ。帰りの飛行機であの綺麗な海を見たときの悔しかったことと言ったら……ああ、思い出しただけでも腹が立つっ」

「ハハ、大変だったんだな……」

「でも、今度こそは遊び倒すわよ！そういえば、スクーバもやるのよね。水着新調しなくちゃ。加持さんを選んでもらおうっ」と

そんなアスカを見ながら、俺はまたもアニメのストーリーに思いを馳せる。そして、気の毒に、と同情を深くするのだった。

「ええ〜っ、修学旅行に言っちゃダメ〜っ!?!」

ネルフ本部のブリーフィングルーム、テストの終わった俺たちを待っていたのは、ミサトさんからの無情な命令であった。

修学旅行期間の、第三新東京での待機命令。

「しょうがないでしょう？あなたたちが全員出払ってる間に、使徒が現れたらどうするのよ」

「んもうつ、いっつもいっつも待機待機タイキタイキ！たまにはこっちから打って出てみたらどうなのよっ」

「それができたら苦労しないわよ……」
苦笑しながらなだめるミサトさん。

「シンジもっ！アンタからも何か言っつてやんなさいよ！」

と、アスカはひとしきり喚くと、俺に振ってきた。まあ、無駄だと思っけどな。

「えーっと、修学旅行の行き先は沖縄ですし、いざとなったら沖縄の国連軍基地から高速機で飛ばしてもらえば、一時間ちよつとで第三まで戻って来れるんじゃないですか？」

「シンジにしてはナイスアイデア！ミサト、それで行きましょ」

冗談で言ってみた案に、アスカが乗ってきた。が、ミサトさんはただ頭を抱え、

「シンジ君まで馬鹿なこと言わないの。国連軍はネルフの小間使いじゃないのよ。悪いけど今回はあきらめてちょうだい」

「……もういいわよ！」

諦めたのか、アスカはどかどかとブリーフィングルームから出て行った。

「ありやあ……ずいぶん楽しみにしてからなあ、アスカ」

そう言うときミサトさんは罰が悪そうな顔をした。

「あなたたちには、申し訳ないと思ってるのよ」

「謝られてもしようがないですよ。まあ、沖縄で遊んでる間に人類が滅亡しちゃっても困りますしね……レイ？」

妙に重い雰囲気を感じて振り向くと、物凄く悲しそうな顔をしたレイがいた。

「……もう、よろしいですか？一尉」

いつもより抑揚のない声。

「……え、あ、ああ、いいわよ。今日は解散」

うるたえつつミサトさんが解散を宣言すると、レイはとぼとぼと出て行った。後ろから見ていただけでも痛々しい。

「レイも随分と感情表現豊かになったわねえ……」

とは上司の弁である。

「あー、じゃ、俺も上がりますね」

そういつて退出しようとする時、ミサトさんに呼び止められた。

「あ、シンジ君、……いつもありがとうね、アスカのこと」

少し寂しげな表情になって、言った。以前より頻度は減ったが、アスカが家に帰らず俺の部屋に泊まることは度々あった。そのことを言ってるのだろう。

「別に礼を言われるようなことはしてませんよ。単に友達とつるんでるだけです。それより、男の一人暮らしの部屋にホイホイと外泊を許すような保護者ってのはどうかと思いますよ」

「その辺は、信じてるわよ」

俺は皮肉のつもりで言ったが、ミサトさんは笑って切り返した。

「信じられてもね……」

「それとも、もしかしてレイだけじゃなくアスカにも手を出す気？」

「どっちにも手なんか出してませんよ」

「あら、そうなの」

ミサトさんは、ニヤニヤと笑みを浮かべてとぼけている。監視や念入りの身体検査をしていて、そんなことがないことは判っているくせに。

「俺に礼を言うくらいなら、ちゃんとアスカの保護者をやってくださいよ。自分で買って出たんでしょ？」

「んーまあ、ちよつち、忙しくてねー」

アスカが俺に部屋にくるようになって、逆にミサトさんが顔を出すことが少なくなった。アスカを避けているんじゃないかとも思える。

俺はひとつため息をつき、言った。

「まあ、いいですけど。アスカだって中学生の女の子なんですから。いざって時には、ちゃんとケアしてあげてくださいよ」

そう言って、俺は踵を返した。

「……そういうシンジ君は何者なのよ……」

そのかすかな呟きを、俺は聞こえないフリをした。

クラスの連中が修学旅行へと旅立った次の日、浅間山火口の直下に幼生態の使徒が発見され、アニメと同じように、直ちに作戦が組まれた。エヴァでマグマの中に潜っての、使徒捕獲作戦である。

気が付くと、白い天井が見えた。

風邪を引いて熱が出ているときにように、全身がひどくだるい。

見慣れない場所、静寂、思うように動かない体。なぜか寂しさが湧き上がった。

誰かに会いたい、そう思った瞬間、横から声が聞こえた。

「あ、シンジ、気が付いたの？」

声の方向に首を向けると、アスカとレイがいた。

「……アスカ、ここは、どこ？」

「病院よ。まったく、無茶するんだから」

苦笑しながら言うアスカと、すこし怒ったような顔をしているレイ。

「病院、なんで……」

「何アンタ、寝ぼけてんの？」

言われて、俺は急いで記憶を手繰り寄せる。

マグマに潜行する式号機、捕獲後撤収中の使徒の羽化・活動開始、外装の冷却液を利用した、熱膨張による使徒殲滅、断末魔の足掻きによって切断される式号機の命綱（降下ワイヤ）、沈み行く式号機、そして……

「……ああ、そうか。通常装備で火口に飛び込んだんだっけ、俺」

そのあとのことはよく覚えていないが、全身を包む灼熱と、それに耐えながら無我夢中で式号機を掴もうとした情景は、微かに記憶に残っていた。

「初号機の手には式号機が引っかかったあと、ミサトがすぐにシンクロカットしたからよかったものの、ヘタするとショック死してたわよ、アンタ」

そりゃそうか。エヴァの感覚はパイロットへと伝わる。全身を火で焼かれるような負荷が神経にかかっていたのだろう。そうでなくとも、通常装備のエヴァでは外の熱はすぐにプラグ内に伝わる。頭まで熱い風呂に浸かり続けるようなものだ。このたるさは、おそらく熱中症によるものだろう。

もっとスマートな解決方法がないかいろいろ模索したが、使徒が

発見されたあとの状況進行が目まぐるしく、結局俺が干渉する余地がなかった。それならそれで、と、元のシナリオどおりの展開をなぞることにしたのだが、マグマの熱によるフィードバックや熱中症を甘く見ていた。予測しなかったわけではないが、アニメではそういう描写がなかったことが油断につながったのかもしれない。

「…そっか」

「ほら、レイ、アンタも言いたいことあるんでしょ」

少し後ろに立って黙っていたレイを、アスカは引っ張ってベッドの傍に立たせた。

「シンジ君、無茶、しないで」

「ごめん、レイ。また、心配かけちゃったな」

それきり、レイは俯いて黙ってしまった。その沈黙に耐え切れなくなっただのか、アスカが声を上げた。

「ま、アンタはここでもう少し休んでなさい。アタシは民宿にもどって、温泉を満喫してくるわ」

「へいへい、せいぜい楽しんできてくれ。ミサトさんによるしくな」手を上げて、アスカは病室から出て行った。後にはレイと俺が残された。

「レイは、温泉に行かないの？」

レイは無言で、椅子に腰掛け、俺の手を握った。

「……どうしたの？」

「苦しいの」

俺の問いに、俯いたまま、ぼつり、と答えた。

その切なげな表情は、何と言うか、ものすごくくるものがあった。触れると消えてしまいそうな儚さがあったが、心を揺さぶる確かな存在感があった。これまでになく、俺はドキドキしていた。

「大丈夫。大丈夫だよ、レイ。俺は大丈夫」

握られているのと反対の手で、俺はレイの頬を軽くなぜた。

「こんな無茶しなくても、普通に楽しく暮らせるようになるために、頑張ろうな」

レイを宥めるために言った言葉に、彼女はしかし、顔をこわばらせた。

彼女の今の境遇に対して、なんと残酷な皮肉を言ってしまったのか。後になってそのことに思い至って、俺は頭を抱えることになる。

第十九話 溶融

今日も今日とて、アスカが俺の部屋に来てテレビを眺めていた。レイのことを慮る様子を見せても、この辺の無遠慮さは変わらないう。まあ、たまにはレイも一緒に泊まりに来る事もあるし、以前ほど妬くようなしぐさは見せなくなった。だから、今更そういうことを気にするのバカらしいと思っっているのかも知れない。最近のレイは、いろんな仲間と話をしたり、本やメディアで知識を集めるのが楽しくてしょうがないらしい。今日もしばらくトウジたちと一緒に騒いだあと、読みかけの本があるからと帰ってしまった。

「アスカ、風呂どうするー？」

「んー、このドラマ見終わってから入る」

「あいよ」

使った湯船に蓋をして、パジャマ代わりのスウェットを着てリビングへ出る。アスカはいつものように、ソファの真中に陣取って熱心にテレビを見ている。しまっていたはずのお菓子を勝手につまんでいた。これじゃ、同居してるのと変わらんなあ、と心の中で苦笑する。

こここのところしばらく、平穏とは言われないが順調に日々を過ごしている。

電力系統のダウンによってネルフの機能が完全に沈黙した折に現れた第九使徒に対しては、ゲンドウ指揮のもと、非常用ディーゼルによるエヴァの起動が行われ、使徒が侵入を試していた射出口の下からのATフィールド中和・射撃により殲滅できた。

衛星軌道上から落下してきた第十使徒は、エヴァ三機がかりで地上で受け止め、コアへの直接攻撃で殲滅した。これもアニメ通りである。どう算出したのか、成功率0.00001%といわれた無謀

な作戦であったが、俺としても他にやりようが思い浮かばなかった。まあ、恐怖はあったが、あまり失敗を危惧することはなかった。やることはシンプルだし、アニメとはいえ成功した模様を見ているのだ。人間、成功のイメージを明確に持っているのと強い。何より、三人がちゃんと連携できれば、大抵の敵には負けないだろう。

第十一使徒はよく判らないうちに殲滅された。俺たちチルドレンは、模擬体を使った連動実験中にいきなりプラグごと射出され、地底湖まで強制緊急脱出と相成った。素っ裸だったので助けを待ち、ようやく発令所まで戻ったときには既に殲滅された後だった。アニメのとおりであれば、マギに寄生した使徒をリッコさん達が対策プログラムを組んで撃退したのだろう。

使徒戦がシナリオどおり進む傍ら、日常生活もそれなりに楽しんでいる。学校では相変わらずバカばかりやっている。そういえば、アスカは俺たちに付き合っただけで中国武術の道場に通い始めた。もともと空手とマーシャルアーツベースの格闘訓練は受けているらしいが、俺やレイの訓練時の動きを見て興味を持ったらしい。だが、エヴァ武装としてPSTノンファーを勧めたら「いらない」と即答された。何かみみっちい感じがするそうだ。あの機能性と渋さが解らないのだろうか。

アスカもレイも、出会った頃に比べれば、表情にだいぶ余裕が出てきたと思う。もちろん、レイにとつての司令、アスカにとつての「エヴァパイロットの称号」が、それぞれ最も価値があるものであるという認識には変わりない。これはもう、洗脳でもしない限り急に転換するのは無理だろう。だが、それ以外の価値観を知る事はできる。自分が目を向け、手を伸ばせば、手に入るものはたくさんあるんだ。

こうして日々が大過なく過ぎる一方で、情報収集の方は遅々として進まない。人類補完計画、ゲンドウの真意、そして何より『俺』

自身や元の世界との関わりだ。どれも手がかりすら掴めない。ゲンドウは相変わらず話を拒むし、リッコさんにはどこまで踏み込めばいいか判断がつかず、攻めあぐねている。

ただ、感覚的にだが判ってきた事もある。意外だったのは、レイが感情に対して極度に無知・鈍感であるのは、意図的にそうされたわけではなさそうだと、ということだ。レイによれば、ゲンドウは彼なりにレイを育てる努力　本を読み聞かせたり、言葉遣いなどの躰をしたり　をしていたようだし、リッコさんも多少冷たいがその意に従っているようだ。よく考えれば、単にダミープラグの材料やサードインパクトの鍵とすることが目的ならば、学校に通わせる必要すらない。あんな廃墟に一人暮らしさせるでもなく、素直に研究室にでもつないでおけばいいのだ。そうでないところを見ると、普通に子育てを試みたものの、ネルフ本部という外界の情報から隔絶された環境と、普通のコミュニケーションと言うものが極度に苦手な父親の性格が災いしたのではないか。

そう考えれば、ゲンドウが自分の目的に向かって盲目的に突き進んでいるわけでもないのかもしれない。少なくとも、子供の育て方について一貫性を欠く程度には、葛藤があるのだろう。

いずれにせよ、アニメのストーリーによれば、この辺から雰囲気暗転してゆくことになるはずだ。その中で、皆を支えながら、自身が自己をしつかり持ちつづけなくてはいけない。仮に大勢を曲げる事ができなくとも、土壇場でサードインパクトに前向きな干渉を与えられる程度である必要があるのだ。そのためには俺とレイ、アスカが連携して戦える状況を崩さないようにしなくてはいけないし、ミサトさんやリッコさん、ゲンドウの振る舞いにも注意しなくては。

「……シンジ！」

突然アスカの大声が聞こえてきて、俺は顔を上げた。

「ん、どうした？」

「どうしたじゃないわよ。何度も呼んでるのに、シカトたあいい度胸してるじゃない」

「いつのまにか、思考に没頭してしまっていたらしい。」

「悪い、ちよつと考え事してた。で、何？」

「もう…アンタもジュース飲む？って聞いてるのよ」

「そう言つと、アスカはペットボトルを掲げて俺に見せた。ペットボトルごと持ち出してたのか。」

「あー、飲む。つーか、ボトルごと出してたらぬるくなるだろうが」「男がいちいち細かい事気にしてんじゃないわよ。そんなに言うならついでに冷蔵庫入れときなさい」

「そう言つてペットボトルを差し出してくる。ったく、誰の家だよここは。」

「愚痴の代わりに一つため息をついてから、ボトルを受け取ってコップに注ぎ、残りを冷蔵庫にしまう。」

「そつえばさ、シンジ」

「ん？」

「あさつての相互交換実験つて、何をやるの？」

「ん、何か、現存のエヴァでパイロットを入れ替えてもきちんとシンクロするかどうかの実験みたいだよ。パーソナルパターンが近いとかで、取りあえず俺を零号機、レイを初号機に乗せて実験するみたい」

「アタシは？」

「よく判らんけど、アスカは普通のシンクロテストをやるつて聞いてるよ」

「そう言つと、アスカは少し嫌そうな顔をした。」

「何よそれ、アタシだけ仲間外れ？」

「仲間外れつてことはないだろうけど、式号機は特別だつてアスカも言つてたじゃないか。だからじゃない？」

「そう言つてはみたものの、おそらく実状は違つたろう。おそらく、

俺が零号機で実験することすらもオマケに過ぎず、レイが初号機にシンクロできるかどうかメインとなるはずだ。何となれば、これはダミーシステム。レイの素体を利用したエヴァオートパイロットの自動操縦システム。の基礎実験となるはずだからだ。

「んー……」

なおも不満そうな声を上げる。アスカにしてみれば、俺とレイが特別扱いで、自分がぞんざいに扱われているように感じているのだろう。

「ま、零号機も初号機も、本来は戦闘用の機体じゃないから、いつでもどっちかが戦えなくなるかも知れないってことで優先してるだけだと思うよ。アスカもそのうち初号機か零号機で実験することもあるんじゃない？」

適当な理由をつけてみる。

「んじゃ、アンタかレイが弐号機に乗る事もあるっての？」

「よく知らんけど、そうじゃないかなーと」

「それはそれで複雑な気分ね……」

そう言っつて、アスカは抱えていたクッションにあごを埋めた。

「でも、アンタ大丈夫なの？」

「何が？」

「何がって、零号機って今まで何度か暴走してるんでしょ？制御が難しいってリッコも言っつてたじゃない」

「そういえば、アニメじゃ、確か互換実験で零号機が暴走するんだよな。」

「んー、まあ大丈夫じゃないか？外部電源外して実験するって言うてたし、暴走しても施設はぶっ壊れるかも知れんけど、俺はエヴァの中にいる限り安全だし」

「人ごとみたいに言うのね……」

「もしかして、心配してくれてる？」

とからかうように言っつと、つまらなそうにため息をつく。

「心配すんのはアタシじゃないわよ」

「アスカが言わんとすることに、俺もすぐ思い当たる。
「あー……うん、気をつける」

「シンクロ率、3.8%で固定……起動ボーダーに達しません！」

「マヤ、落ち着いて、もう一度108からやり直しなさい」

うるたえる伊吹さんの後ろで、リッコさんが険しい顔をしている。レイが初号機に乗った状態での起動実験。アニメでは確か成功したはずだ。しかし、蓋をあけてみると意外な結果が待っていた。

「だめです。今度は初号機側から拒絶されました！」

モニタの中で、レイが苦しそうに顔を歪めている。

「リッコさん、レイは大丈夫なんですか？」

俺が口出しするべき状況ではないが、つい口を挟んでしまう。リッコさんは暫し考えたあと、ゲンドウへ目配せした。ゲンドウの表情は遠すぎて伺い知ることができないが、これまた数秒の沈黙のあと、重苦しく宣言した。

「実験を中止しろ」

搭乗用キャットウォークまで走っていくと、ちょうどレイがプラグから出てきた。

「レイ！大丈夫か!？」

一頻りLCLを吐き出すと、レイはこちらへ振り向き、「大丈夫」とだけ答えた。少し残念そうな表情だったが、思ったより落ち着いているようだ。

「……もう、初号機は応えてくれない。拒絶されてしまった」

「そうか……」

寂しげな顔で言うレイ。俺はそれにかける言葉を持たなかった。

この結果は俺にとっても予想外だった。たしかアニメでは、レイと初号機では成功し、シンジと零号機では暴走、という結果に終わったはずだ。レイが初号機にシンク口できなくなったのは、一度ダミープラグを使用した後だったと思う。なぜ、今この状況で……

『サードチルドレンは、速やかに第四ケイジに移動し、零号機搭乗の準備をして下さい。繰り返します……』

館内放送が響き渡った。初号機の失敗で実験中止、ということにはならなかったらしい。俺と零号機のシンク口実験なんて、何の意味があるって言うんだ……

「シンジ君」

渋谷第四ケイジへ向かおうとすると、レイが呼び止めた。

「何？」

「……気をつけて。零号機もシンジ君を拒むと思う。もしそうでなければ、シンジ君の方から拒絶して。でなければ……危険、だから」
言葉を選びながら、俺に忠告するレイ。拒絶しなければ危険？

「どういう事？」

だが、レイはそれきり口を噤んでしまった。

「……よく解らないけど、とりあえずシンク口を拒絶すればいいんだね？」

俺の確認にうなずくレイ。俺は、ありがと、と一言礼を言って、零号機の元へと向かった。

これが零号機か……

エントリープラグ内のインテリアにはそれ程大差はない。若干、パネルの材質が異なるくらいだ。オペレーティング・システムも一緒に更新してあるのだろう、操作系にも違いが感じられなかった。

『いい？いつもよりゆっくり、落ち着いてシンク口してね』

伊吹さんからの通信。俺はそれに「はい」とだけ答えると、精神集中のため目を閉じた。

少しして、LCLに電荷がかかったことを肌で感じる。と同時に、ミルクのような、幼く甘いイメージを想起させる香りが鼻腔をくすぐった。アニメでシンジが「綾波の臭い」と称していたのはこの香りだろうか。なるほど、何となく判らないでもない。

そういえば、零号機の事ってアニメではあんまり語られてなかったなあ。初号機には碇ユイ、弐号機にはアスカの母親の魂なり精神なりが宿っている。ならば、零号機には？アニメのとおりなら、レイには母親はいない。強いていえば、肉体的には碇ユイ、精神的にはリツコさんが、その母親になるのだろうか……

そんなことを考えていると、神経接続が完了し、シンクロが開始された。

ぞくり

なにかに全身を舐め上げられるような、底知れぬ不快感が突然襲ってきた。

「う……あ？」

『シンジ君？どうしたの？』

声も上げられない。全身の筋肉が萎縮していた。怖い。生命の危機からくる恐怖ではない。目の前に圧倒的な存在感があり、そのあまりの巨大さに、自分が見えなくなる。

『シンジ君！？気をしっかり持って！』

遠くでリツコさんの怒鳴り声が聞こえる。

零号機を拒絶しろ、レイの忠告が頭の隅で思い起こされたが、冗談じゃない。自分に向かって落ちてきた月を、自分の細腕なんかで跳ね返せるもんか！

それはまるで触手のように俺に絡みつき、俺の存在に絡みつき、

自分の中に、自分でないものが入ってくる。自分の中身が、外に漏れ出す。侵される。飲み込まれる。怖い。怖い。怖い怖い怖い怖い
こわい

自分を守る全てのものが破壊される感覚の中で、俺から『俺』が剥がれるのが判った。

そのまま意識は闇に沈み……かすかに、レイの泣き声が聞こえた気がした。

第二十話 隙間

エヴァンゲリオンは、魂を宿す。これは、アニメでも明らかにされてきた設定だ。現に、俺は初号機の中の碇ユイと直接意思疎通した経験があるし、式号機にも、アス力を守護する何者かの意識を感じることができた。

ならば、零号機は？やはり、何者かの魂が宿されているのか。それとも、プロトタイプは例外なのか。

果たして、真実は　この世界での現実は、どうなのか。その答えは、まさしく今、『俺』の目の前に在る。

それはあまりに巨大で、気を抜くと意識ごと飲み込まれそうなほど、威圧感に満ちていた。他のエヴァの中に在った彼女らと同じものだと到底思えなかった。神というものが、人の意識では推し量ることすらできない高次のものだとするならば、それは間違いなく神であった。

そんなとんでもない存在であるにも拘らず、それは酷く困惑しているように見える。『俺』と、はがれたもう一つの魂、この世界の『碇シンジ』に交互に意識を向け、沈黙した。

ややあり、それは『俺』へ意思を伝える。

『おまえは何者か』

その問いに答える間もなく、再び、俺の意識が暗転する。

そこは狭苦しいワンルームだった。酷く散らかっていて、かろうじて布団を敷くスペースだけが確保されている。ぽつんと積み上げられているのは、「新世紀エヴァンゲリオン」のコミックス。すでに遠い昔のような気のする、馴染みきった光景。そこは『俺』の住んでいた部屋。しかし、その光景は灰色だった。自分の家なのに、

そこには安らぎという感覚はなく、ただ体を休めるだけの箱だった。いきなりの場面転換。そこは『俺』の職場であった。主のいない席。だが、周囲でそれを気にする者はいない。仕事の穴を埋められる人間はいくらでもいた。

場面転換。行きつけの居酒屋。『俺』はいつも隅で一人で飲んでいた。一言も言葉を発しなのまま。今は、『俺』はいない。それでも、和やかな雰囲気は何一つ変わらない。

場面転換。PCのモニタに映るのは、よく入り浸っている掲示板。だが、俺の発言は既に流れ、だれも話題にしない。

かつて恋していた彼女の横には、別の男がいる。彼女は笑っている。

近くの街。

故郷。

そのどこにも、『俺』は存在せず、それでも何も変わらない光景が広がっていた。

そして再び、『俺』の部屋へ場面は戻る。

風もないのに、床に置かれたコミックスのページがひとりでにめくれる。そこに描かれているのは、シンジやレイやアスカが生きるこの世界。いや、微妙に違っている。背景が、人の過去が、人格が、少しずつ食い違っている。そう、この世界は少しずつ都合がいい。誰にとって？シンジ、いや、俺

不意に、映像が途切れた。

目の前の巨大な存在は、困惑を極め、もはや混乱とっていい状況に陥っている。意識の方向があちこちへ飛び、『俺』と『シンジ』はその暴風に煽られ、振り回されていた。あわや吹き飛ばされる、というとき、ぴたり、と暴風が止まる。

『認めない』

そういう巨大な意識が叩きつけられた。『俺』と『シンジ』は一緒に吹き飛ばされ、わけもわからず気を失った。

轟音が鼓膜を揺さぶり、俺は目を覚ました。数瞬考え、零号機に搭乗していることをようやく思い出した。俺を載せた零号機は、しかし俺の意思を無視して勝手に動いている。暴走していた。エントリープラグ内には零号機の視界が映し出されている。その中心にあったのは、ガラスの向こうの小さな人影。

巨大な拳が振り上げられる。それが何を意味しているか、俺はようやく気がつき、狼狽した。

「レイ！逃げろっ！」

だが、レイは一步も動かない。

がしやあっ！

ケイジとオペレーターームを隔てる窓に、盛大なヒビが入る。それでは飽き足らず、二度、三度と拳が叩き込まれた。だが、耐圧ガラスを突き破るまでには至らない。

その内、零号機はメチャメチャな動作を取り始めた。頭を抱え苦しむぐさを見せたかと思うと、壁に走り寄り頭を打ち付ける。拘束具を掴み、引きちぎる。あたり構わず殴りつける。だが、それも数分ともたず、ゆっくりと動作を止めた。

モニタには、活動限界を示すインジケータが光っていた。

「……それだけ？」

医務室にリッコさんがやって来て、先程の実験中の様子をあれこれと訊いてきた。俺は、シンクロが始まった途端気が遠くなり、次に気がついたときには零号機が壁を殴っていた、とだけ答えた。実際、俺の記憶で確かだと言えるのはそれくらいのものだ。……あの中で見た夢、のようなものまで明かす気には、到底なれなかった。

「何かあるんすか？」

そう、わざと不安げに問い掛けてみると、リッコさんは諦めのため息を一つついた。

「……一応、言っておいたほうがいいかしらね」

少しためらうように、話を切り出す。

「シンジ君、あなた、一度零号機に取り込まれたのよ」

俺の中で言葉の意味を咀嚼するのに、少々時間がかかった。

「取り込まれた、ですか？」

オウム返しに聞き返す。そうしたところでようやく、俺の脳裏にアニメでのエピソード　使徒戦で暴走し、LCLとなって初号機に取り込まれた碇シンジ　が思い浮かんだ。

「そう。あなたは一度エントリープラグの中で分解され、再構成されたの」

「……はあ、そうですか」

何と言うか、返す言葉が見つからない。

「まあ、精密検査の結果も特に異状はないみたいだし、あなたに自

覚症状がなければいいわ」

「ホントですか…というか、そんなこと、なぜ俺に話すんです？」

普通の中学生なら怖がって逃げるぞ。いや、それならいきなり放り込まれて殺し合いやらされてる時点で逃げるか。

「自分の身体に起こったことくらい、知る権利はあるわ。それに、あなたは自分の責任もよく判ってるみたいだしね」

要するに責任を果たしたきゃ逃げるな、と。

「……まあ、お心遣いには感謝しますよ。正直、一介の中学生に負わせる責任じゃないと思いますけどね」

「それでもあなたは選んだのだから。報酬まで要求してね」

詭弁だ、とは思ったが、まあそんな事突っ込んででも始まらない。

「まあ、ちよつと遅くなっただけど、今日は帰ってゆつくり休みなさい」

そう言つて、リツコさんは医務室から出て行く。俺は一つだけため息をつくくと、帰り支度を始めた。

レイモアスカも、一足先に帰宅したそうだ。俺は監視兼護衛役の保安部の人に、車で自宅まで送ってもらう事にした。

「いつもすみません」

「かまわんよ。どうせ君にはついて歩かにならんのだ」

いつも、つかず離れず影で見守ってくれるチルドレン護衛担当の方々。よほど勤勉で組織への忠誠心の高い人じゃないとできない仕事だと思う。俺には到底真似できない。以前そんなことを言ったら「それでも、君の護衛は随分楽だよ。まあ我々が楽なのはいいんだが、君は中学生にしては出不精がすぎるんじゃないか？子供はもつと外であそぶもんだ」

などと諭されてしまった。『俺』も『シンジ』も昔っから引き籠もり寸前だったからなあ。

程なくして、自宅へ着いた。護衛に軽く礼を言い、部屋に入ると、俺は着替えもせずにはベッドに倒れこんだ。

「疲れた……」

あの出来事は一体なんだったのだろうか。

零号機に取り込まれた。これは判る。『俺』と『シンジ』が一度分離した。これも納得はできる。自分が2つの魂を持っていることは、漠然とだが感じていたから。零号機から出た後も、俺の中には両者の魂を感じ取る事ができた。

問題は、零号機がなぜ俺を取り込んだか。そして、何のために『俺』の記憶を読むような真似をしたのか。何故、あれほど取り乱したのか。

そこまで考え、記憶を読み取られる際に見た映像を、俺は思い出した。

この世界でいろいろなことを頑張っているうちに、俺は『俺』の世界のことをすっかり忘れていた。いや、きつと考えないようにしていたのだと思う。

俺は自分の居場所を求め、拘泥する。居場所とは、自分が他者に影響を与え、自分が在ることで周囲に変化をもたらす、その実感に他ならない。だから、この世界に、今の自分の状況に居心地のよさを感じていたのは確かだ。むしろ依存に近い。

逆に言えば、かつての『俺』はそのことに強い飢餓を覚えていたのだ。零号機の中で見せられた映像は、そのことを痛感させてくれた。

そして、一つの疑念をも俺に抱かせる。

「……この世界は、本当に『現実』なのか？」

そもそも、俺がここにいることを『現実である』と考えたのは何故だ？この世界が、夢や妄想の類ではないと、断言するだけの材料は実際にはない。とはいえ、ただの夢にしてはあまりにリアルだし、

時間感覚もすっかりしている。ここに来て、もうじき3ヶ月になる。それだけの時間を過ごした詳細な記憶も、ちゃんとあるのだ。

ただ、この世界が、「新世紀エヴァンゲリオン」というフィクションの世界を基礎としていながら、少しずつ俺に都合がいいというのも確かだ。アスカやレイが和解したことだって、本当はそんなに簡単に済むはずがない。物語では、もっと二人とも頑なで、根の深い悩みを抱えていたような気がする。

だが…しかし…

だめだ。あまりに情報が少なすぎて、いくら考えたって堂々巡りだ。

零号機の中のアレから聞き出すのが手っ取り早いだろうが……多分もう零号機に乗ることはないだろうなあ。結局暴走させちゃったし。そもそもアレは一体何者なんだ？初号機や弐号機とはあまりにも異質すぎる。

そういえば、レイは実験前に、零号機を拒絶しろ、と忠告してくれたっけ。レイはあの中にいるものの存在を知っているのだろう。

とすれば、アレは……

「レイに、訊いてみるべきかなあ」

それも少し気が引ける。彼女は自分がヒトと違うものだということを自覚している。学校でヒトとの交流を重ねる中で、自身の境遇に思い至ったとき、彼女はどう感じるのだろうか。

ましてや、それを信頼している男に示唆されるのは……

彼女がどう受け止めるか判らないが、下手をすると傷つけてしまいかもしれない。

「まいったな……」

寝返りを打ち、目を閉じた。瞼の裏に、レイの泣き顔が浮かんだ。それを慌てて打ち払うと、程なく睡魔に引きずり込まれた。

『シンジ君』

翌日、レイから電話があった。

「どうしたの？」

できるだけ何事もないように答えるが、俺もここらもち気後れしているのを自覚していた。数秒の沈黙のあと、遠慮がちにレイが尋ねてきた。

『……昨日、零号機に取り込まれたとき、何を見たの？』

来た。

俺は迷ったが、俺が訊きたいことを訊くためにも、正直に話しておくべきだと思った。

「何か、とてつもなく巨大な何かを感じたよ。何者かは判らないけど。そいつは、俺の記憶を覗き見て、酷く混乱していた」
努めて、軽く話す。

『シンジ君の記憶を……？大丈夫なの？』

「ああ、まあ、あんまり気分のいいもんじゃなかったけど」

いい記憶じゃないが、アニメのアスカのように、掘り返されたからと言って全力で拒絶するほどのトラウマを持つてゐるわけでもない。

『そう』

そう言つて、レイはまた黙つてしまふ。俺は、意を決して尋ねてみた。

「レイ、君は、零号機の中のアレが何なのか、知ってるんじゃないのか？」

電話口の向こうでは沈黙が続く。表情が見えないのが、もう一步の踏み込みを躊躇させた。

「……あー、ごめん。変なこと訊いた。知っていても話せないよな。機密事項だろうし。忘れてよ」

『……ごめんなさい』

少しつらそうな声が、胸に痛い。

「いいって。そうだ、これからどっか遊びに行かない？みんな誘ってさ」

『体、大丈夫なの？』

「大丈夫大丈夫。むしろ気が滅入っちゃっていけない。パーっと遊ぶほうがいい休養だよ」

『そう、それじゃ、惣流さんと洞木さんには連絡しておくわ。時間は…15時くらいかしら』

「そうだね、いつもの場所で待ち合わせてことで。トウジとケンスケにも声かけとくよ」

『わかった』

「それじゃ、後でね」

電話を切った後で、ひとつため息をつく。結局訊けなかったなあ、どうしよう。エヴァや人類補完計画のことだけでもスケールが大きすぎるというのに、世界とはなんぞや、などというほとんど哲学みたいなことを考えなければならなくなってしまった。いくら何でも手に余る。

それでもきつと、シナリオは淡々と進んでいくんだろう。そのシナリオの先には、一体何が待ってるというのだろうか。それが絶望的なものだとして、果たして俺はなにができるだろうか？

またもループに陥りかけた思考を振り払い、俺は再び電話をとった。

第二十一話 独り相撲

互換実験から一週間後のある夜、帰宅すると、何故か部屋のドアが開いていた。

もう夜も更けている。留守宅は当然真っ暗だが、なんとなく人がいるような気配がする。すわ泥棒か、と思い警戒したが、玄関には見慣れた女物のサンダルがあった。

あいつ、勝手に合鍵作りやがったな。そう思い、電気をつけて部屋に上がる。リビングには、予想通りの人物が、予想と全く違う表情でうずくまっていた。どんよりと曇った、少し涙すらためた目をして、じっと床を見ているアスカに、俺はとてつもない疲労感を感じ、へたり込みそうになった。

今日は、俺にとつても酷くシヨックなことがあった。混乱もしている。正直、悩める青少年のカウンセリングをしている余裕はない。だが、少女は話しかけられるのを待つように、じっとしている。

「……あー、どうしたんだよ、アスカ。今日は元気ないな」

気は進まないが、話しかけてみた。だが、少女は沈黙を保つ。

「またレイとケンカでもしたのか？」

無言。

「それとも、ミサトさんあたりに何か言われた？」

ミサトさん、というところで、びっくり、とわずかに反応する。いつもと様子が違うかな？ミサトさんとケンカしたなら、ガサツで軽薄な保護者の悪口を、それこそマシガンのようにまくし立てるのが常だった。こんな風に落ち込むのは何なのか、エヴァ関係か、それとも。

そこまで考えて、今日という日の持つ意味を思い出す。アニメの通りだとすると、これは加持さん絡みか。あまりズバリと挿し込むのは避けて、別方向から話を進めることにする。

「そっいや、今日はデートだとか言ってたよな、どうだった？」

プライドが高く、大抵の男は適当にあしらいつつ避けるアスカだが、今日の相手は洞木さんの知り合いと言うことで、親友にどうしても、と頼み込まれて断れなかつたらしい。もしも、アスカの悩みが俺の予想通りなら、この話題は彼女にとって酷く不愉快なものだろう。まあ、そうは言ってもこれじゃ話が進まん。

「……つまんないから、途中でほっといて帰った」
小さな声で答える。

「ひっでーの。洞木さんの紹介ならそんなに悪いやつでもなかったんだろ？」

「だから、つまんないのよ。アタシの顔色をやたら気にする割りに、自分のことばかり喋って、アタシの事なんか知ろうともしないんだから。ホント、何しに来てるのやら」

俺はキッチンに立ち、冷蔵庫から麦茶を出す。

「んで？男から逃げてきて、なんで俺んちにいるわけ？」

苦笑はしていたが、疲れも手伝ってか、言葉に少しだけ皮肉が混じる。アスカはまた沈黙した。

「そういえばミサトさんは同期の結婚式って言ってたっけ。今夜は遅くなるのかな？」

ミサトさんの同期ということとは、加持さんやリツコさんの同期でもある。三人揃って式に呼ばれていると聞いた。アニメではその後酔っ払ったミサトさんを介抱する加持さん、そして二人のベッドシーンまで描かれていたが。

もしかしたら、アスカは「そうなること」を予測していたのではないだろうか。彼女の、加持さんに対する寄せる信頼を見れば、加持さんがこの心に傷持つ少女をいかに導いてきたかが窺い知れる。しかし、日本に来てからはあまり会えていないようだ。そして、あの判りやすいミサトさんのことだ。自分のところに戻ってきた加持さんを見て、揺れる心を隠せはしないだろう。

そんなことを考えながら麦茶を注いでいたら、危うくグラスから溢れそうになり、少し慌てた。

「ねえ、シンジ」

「ん？」

「麦茶をグラスに注ぎ終わったところで呼びかけられ、振り向いて仰天した。いつの間にか気配もなく、息がかかるほど間近にアスカの顔があった。」

「キス、しない？」

「そうだ、これもまた、「シナリオ通り」だ。俺は自分でも意外なほど冷静だった。というより、急激に冷めてしまった。アスカの両肩を押さえる。少し身を硬くしたアスカを、ゆっくり横へどかし、コップを持ってリビングへ向かった。」

「何よ、怖いのか？」

「彼女の顔は見えないが、怒っているだろうか、嘲笑っているだろうか。声は低かった。どっかりとソファに腰を下ろし、麦茶で口を潤したあと、ゆっくりと喋った。」

「ああ、怖いね」

「何よ、アンタも結局ガキなんじゃない」

「言って、アスカは俺の前に回りこんだ。そんなアスカの目を見ずに、答える。」

「そうだな。それに、本当の俺は…『俺』は、今日のアスカのデート相手みたいな男だから。加持さんの代わりにはなれないよ」

「……誰が、アンタなんか加持さんの代わりを求めているのよ」
「俺はそれには答えず、麦茶を飲み干し、立ち上がった。」

「俺あ風呂入って寝るぞ。悪いが疲れてるんだ」

「え、ちよっ」

「引きとめようとしたアスカを無視し、俺は風呂へ向かった。」

「もう、これ以上俺が何を言っても嘘臭くしかならない。そう、心の中で言い訳していた。それに、本当に酷く疲れていたのだ。」

時間は、今朝に遡る。

けだるい休日の朝。いつもより少し早く目が覚めて、回らない頭を無理やり巡らし、ふと、カレンダーに目が留まった。

俺はそこで、唐突に思い出した。今日の日付、その意味を。

母、碇ユイの命日だった。

食欲が沸かず、朝食を抜いて家を出てきたが、共同墓地に着いた時には、既に日は高くなっていた。少し足が重い。碇ユイを必要以上嫌悪するのはやめたとはいえ、墓参りまでしたいかと言われると否だ。それでも『シンジ』は、母に会いに来たがっている。

零号機での体験以来、俺は前以上に『シンジ』の感情を意識するようになった。互いの記憶と価値観を共有し、相違が埋まってゆく中で、ほとんど融合してしまうかのような錯覚を抱いていた。しかし、やはり『シンジ』は『俺』とは別の存在としてここにいる。今ここで碇シンジとして活動しているのは『俺』の方だが、いついなくなるとも限らない。そうなったとき、『シンジ』が『俺』に塗りつぶされてしまっただけではないのか。

花を供え、じつと墓標を眺めていると、視界の隅に長身の影が映った。見ずとも誰だかわかる。その影は俺のすぐそばに来ると、一言も発せず墓標に向き、俺の花に寄り添わせるよう、自分が持ってきた花を供えた。

碇ゲンドウ。碇シンジの父親。『俺』がやってきて、ほとんどまともに口を聞いていない。ずっと話したいと思っていた。父を求め『シンジ』も、この世界の真実を知りたい『俺』も。

「なんか、信じられないな。『父さん』が墓参りだなんて」

「こんな日くらい、そう呼んでやってもいいだろう。」

「ひょっとして、毎年来てるの？」

「ああ」

顔を合わせずに会話する。どうせ面と向かったところで、この男は表情を見せようとはしないだろう。

「母さんって、どんな人だったの？」

無言。

「写真とか、ないの？」

「写真はない」

それが漫画の通りの台詞であることに、思い至った。俺も、ゲンドウも、台詞をなぞるように語る。

「全部、捨てちゃったんだ」

「ああ。この墓もただの飾りだ。死体はない」

少しの沈黙。そして、彼は続ける。

「すべては心の中だ。今はそれでいい……シンジ」

そこで、父はなぜか息子に背を向ける。

「もう、私を見るのはやめろ」

「なんだ？何を言っている？」

「人はみな、自分ひとりで生き、自分ひとりで成長していくものだ。母親の思い出云々まではまだわかる。だが、今の俺は親に依存していたりしない。少なくとも普段は。好き勝手やってる俺に、こんな台詞は不自然じゃないか。」

「親を必要とするのは赤ん坊だけだ。そして、お前はもう赤ん坊ではないはずだ」

その不自然さは、何故か妙に滑稽に見える。何かがおかしい。だが、それ以上に笑いがこみ上げてきた。

「自分の足で地に立って歩け。私もそうしてきた」

「ぶっ」

そこまで来て、とうとう俺は噴出してしまった。そこでようやく、父は息子を見た。訝しげな顔で。

「ククク…な、何言ってるんだよ父さん。今更何言ってるんだよ。あんたは親が必要な赤ん坊を捨てたんだろう。俺はもうあんたなんか見

ちやいない。いや、見てたって親としてなんか見ちやいないよ。まして」

ようやく笑いを噛み殺して、呼吸を整えてから言葉を続ける。

「何が、自分の足で地に立って歩け、だよ。私もそうしてきた？…それじゃ、あんたにとって母さんは、碇ユイは何だったって言うんだ」

だめだ。感情がぐちゃぐちゃだ。可笑しさと悔しさと、寂しさと怒りとが絡み合って、抑え切れない。これは誰だ、誰の想いだ。

「俺は知ってるんだ。確かに、この墓の下に碇ユイはいない。碇ユイは、母さんは、エヴァンゲリオンの中にいるんだ。あんたもそれを知ってるはずだ」

制御の効かない言葉だけが溢れる。

「それに…レイは母さんそっくりだろ。さっきはあんなこと言ったけど、俺は母さんの顔もちゃんと思い出せるんだ。彼女を自分の手元に閉じ込めて、一体何をしようとしてるんだ。碇ユイが取り付いた玩具を使って、あんたは一体何をしてるんだよ！」

そこまで言って、俺はゲンドウの顔から再び感情が消えたことに気がついた。低い声で、つぶやくように言う。

「……どこまで知っている」

しまった！つい不用意にベラベラと、余計なことまでしゃべってしまったか！？

うるたえる俺に、ただ鋭い視線を向けるゲンドウ。俺は不測の事態に混乱していた。

「な……何のことだよ」

「ぶっ」

だが、ゲンドウはそれに答えず、あろうことか笑い出した。

「慌てることはない。とりあえず、今お前をどうこうしようというわけではない。……お前の正体はわかっているんだ。今、ようやく確信が持てたところだがな」

意地の悪そうな微笑を浮かべながら、ゲンドウは語る。突然の空

気の変化に、俺はなおさら混乱を極めた。

「俺の正体だって？」

「ああ、そつだ。俺はお前のことは知っている。そつ、お前は」

それに続いて発せられたのは、間違いなく、『俺』の名であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0729w/>

依り代

2011年10月9日00時52分発行